山形県埋蔵文化財センター調査報告書第182集

下大曽根遺跡発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

下大曽根遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 182 集

２０１０

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

下大曽根遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 182 集

平成 22 年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

前期調査区完掘状況全景（南から）

後期調査区完掘状況全景（北から）

前期調査区完掘状況（北から）

古代の土器

中世以降の出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、下大曽根遺跡の調査成果をまとめたものです。

下大曽根遺跡は、山形県北部に位置する鮭川村にあります。鮭川村には、文化遺産や天然記念物、豊かな自然が多く存在します。村のほぼ中央部を流れる鮭川は、国土交通省が発表する水質ランキングで常に全国上位に位置する一級河川で、鮭の遡る川・天然の鮎が遡上する川として知られています。

この度、県が施行する経営体育成基盤整備事業（鮭川左岸Ⅱ期）にかかわり、下大曽根遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、西暦 915 年に青森・秋田県境の十和田地方で噴火した際に降下した火山灰が堆積した土坑や、竪穴建物跡などが見つかりました。また、周辺地域からの紛れ込みながら､蝦夷との関連が想定される続縄文土器も出土しました。これらの発見は、古墳～平安時代の遺跡が少ない最上地方において、時代考証をする上での貴重な資料と考えられます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　山口常夫

凡　　例

1　本書は、経営体育成基盤整備事業（鮭川左岸Ⅱ期）に係る「下大曽根遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって報告書とする。

3　調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、須賀井新人（第Ⅰ・Ⅱ章第１・２節・Ⅳ・Ⅵ章）、山木巧（第Ⅱ章３節・Ⅲ・Ⅵ章）が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、鎌上勝則、安部実、阿部明彦、黒坂雅人、伊藤邦弘が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴建物跡	ＳＤ…溝跡・溝状遺構	ＳＥ…井戸跡
ＳＢ…掘立柱建物跡	ＳＡ…杭列・柱穴列	ＳＸ…性格不明遺構
ＳＫ…土坑	ＳＰ…柱穴	ＲＰ…登録土器・陶磁器

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　遺物実測図は、遺構ごとに掲載し、各図に遺構名を明記して各々スケールをつけた。なお、土器実測図の断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を、網点を入れたものは黒色処理を表し、拓影断面図については、左から表面→断面→内面の順に図を作成した。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1998 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

10　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々から御協力、御助言をいただいた。（敬称略・順不同）

北野博司　井上喜久男　續伸一郎　白石純　水澤幸一　佐藤亜聖　瀬戸哲也

調 査 要 項

遺　跡　名	下大曽根（しもおおそね）遺跡		
遺 跡 番 号	平成 19 年度登録		
所　在　地	山形県最上郡鮭川村大字庭月小字下大曽根（しもおおそね）		
調査委託者	山形県		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受 託 期 間	平成 20 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日		
現 地 調 査	平成 20 年 5 月 12 日～平成 20 年 9 月 9 日		
調査担当者	平成 20 年度	調　査　課　長	長橋至
		課　長　補　佐	伊藤邦弘
		専門調査研究員	須賀井新人（調査主任）
		調 査 研 究 員	水戸部秀樹
		調　　査　　員	山木巧
	平成 21 年度	整　理　課　長	安部実
		調　査　課　長	阿部明彦
		課　長　補　佐	黒坂雅人
		課　長　補　佐	伊藤邦弘（整理主任）
		専門調査研究員	須賀井新人
		調　　査　　員	山木巧
調 査 指 導	山形県教育庁文化遺産課（平成 20 年度）		
	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 21 年度）		
調 査 協 力	鮭川村教育委員会		
	鮭川村農村整備課		
	鮭川左岸地区ほ場整備推進委員会		
	山形県最上総合支庁産業経済部農村整備課		
	山形県教育庁最上教育事務所		
業 務 委 託	遺跡基準点測量	有限会社　京葉技術	
	遺構測量業務	株式会社　パスコ	
	デジタルトレース業務	株式会社　大風印刷	
	理化学分析業務	パリノ・サーヴェイ株式会社	

発掘作業員	阿部勝昌	阿部行弥	荒木勝弘	荒木壽昭	大山昭子	奥山俊子	加藤昭夫
	加藤正幸	管よしみ	京郷悟	沓澤仁輝	黒坂時夫	黒坂敏夫	黒坂祐治
	小屋利介	斉藤孝史	信夫文子	高橋軍司	高橋孝一	高橋哲	高橋忠
	高山則義	堀米春美	本田一子	三浦政利	八鍬明美	山科達也	吉田吉徳
	（五十音順）						
整理作業員	井上淑子	金沢美由紀	関東美由樹	佐竹友子	鈴木慶子	峯田優子	持留陽子
	渡辺由美子 （五十音順）						

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査の方法と経過……2
　3　整理作業の経過……3
Ⅱ　遺跡の概観
　1　立地と環境……5
　2　周辺の遺跡……5
　3　遺跡の概要……9
Ⅲ　検出遺構
　1　竪穴建物跡……22
　2　掘立柱建物跡・柱穴列……22
　3　井戸跡……23
　4　土坑　……23
　5　溝跡　……27
　6　その他の遺構……29
Ⅳ　出土遺物
　1　遺構内出土遺物……59
　2　包含層出土遺物……60
　3　石器・貨幣・木製品……61
Ⅴ　理化学的分析
　1　はじめに……78
　2　放射性炭素年代測定……78
　3　テフラの検出同定・屈折率測定……79
　4　胎土蛍光Ｘ線分析　……82
Ⅵ　総括
　1　出土遺物の年代……88
　2　中世の様相……89

報告書抄録……巻末
下大曽根遺跡遺構配置図……付図

表

表１　発掘調査工程表 …… 4
表２　整理作業工程表 …… 4
表３　遺跡地名表 …… 7
表４　遺物出土詳細表（１） …… 12
表５　遺物出土詳細表（２） …… 13
表６　遺物観察表（１） …… 74
表７　遺物観察表（２） …… 75
表８　遺物観察表（３） …… 76
表９　遺物観察表（４） …… 77
表 10　石器観察表 …… 77
表 11　金属製品観察表 …… 77
表 12　木製品観察表 …… 77
表 13　放射性炭素年代測定結果 …… 78
表 14　暦年較正結果 …… 79
表 15　テフラの検出同定結果 …… 80
表 16　蛍光Ｘ線分析試料一覧 …… 82
表 17　蛍光Ｘ線分析結果 …… 83

図　版

第１図　遺跡概要図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 6
第３図　地形分類図 …… 8
第４図　基本層序 …… 10
第５図　出土遺物の割合図 …… 10
第６図　出土遺物の器種組成比 …… 11
第７図　遺構外出土遺物分布図 …… 11
第８図　遺構配置図割付図 …… 14
第９図　遺構配置図（１） …… 15
第 10 図　遺構配置図（２） …… 16
第 11 図　遺構配置図（３） …… 17
第 12 図　遺構配置図（４） …… 18
第 13 図　遺構配置図（５） …… 19
第 14 図　遺構配置図（６） …… 20
第 15 図　遺構配置図（７） …… 21
第 16 図　ＳＴ 50・51・52・53 竪穴建物跡（１） …… 30
第 17 図　ＳＴ 50・51・52・53 竪穴建物跡（２） …… 31
第 18 図　ＳＢ 164 建物跡 …… 32
第 19 図　ＳＢ 165 建物跡 …… 33
第 20 図　ＳＡ 166・167 柱穴列 …… 34
第 21 図　ＳＥ 102・108 井戸跡 …… 35
第 22 図　ＳＫ５土坑 …… 36
第 23 図　ＳＫ 10・13・14・21 土坑 …… 37
第 24 図　ＳＫ 36・43・44・48・49 土坑 …… 38
第 25 図　ＳＫ 55・56・57・58 土坑 …… 39
第 26 図　ＳＫ 60・61・65・66・67・68・168 土坑 …… 40
第 27 図　ＳＫ 103・104・105・111・114 土坑　ＳＤ 110 溝跡 …… 41
第 28 図　ＳＫ 117・118・126・129・148・150 土坑 …… 42
第 29 図　ＳＫ 133・134 土坑 …… 43
第 30 図　ＳＫ 115・116・124・151 土坑 …… 44
第 31 図　ＳＫ 152 土坑 …… 45
第 32 図　ＳＤ１・２・４溝跡　ＳＫ３土坑（１） …… 46
第 33 図　ＳＤ１・２・４溝跡　ＳＫ３土坑（２） …… 47
第 34 図　ＳＤ２溝跡 …… 48
第 35 図　ＳＤ６溝跡（１） …… 49
第 36 図　ＳＤ６溝跡（２） …… 50
第 37 図　ＳＤ 34・35・158 溝跡 …… 51
第 38 図　ＳＤ 38・39 溝跡 …… 52
第 39 図　ＳＤ 40・45 溝跡　ＳＫ 159 土坑 …… 53
第 40 図　ＳＤ 41・42 溝跡 …… 54
第 41 図　ＳＤ 100・101 溝跡　ＳＫ 97・99・161 土坑 …… 55
第 42 図　ＳＤ 130・131 溝跡　ＳＰ 162 柱穴 …… 56
第 43 図　柱穴（１） …… 57
第 44 図　柱穴（２） …… 58
第 45 図　遺物実測図ＳＤ溝跡出土（１） …… 62
第 46 図　遺物実測図ＳＤ溝跡出土（２） …… 63
第 47 図　遺物実測図ＳＴ竪穴建物跡・ＳＥ井戸跡出土 …… 64
第 48 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（１） …… 65
第 49 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（２） …… 66
第 50 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（３） …… 67
第 51 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（４） …… 68
第 52 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（５） …… 69
第 53 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（６） …… 70
第 54 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（７）・遺構外出土（１） 71
第 55 図　遺物実測図遺構外出土（２） …… 72
第 56 図　遺物実測図石器・金属製品・木製品 …… 73
第 57 図　火山ガラスの屈折率測定結果 …… 80
第 58 図　テフラ分析図 …… 81
第 59 図　下大曽根遺跡出土試料の胎土組成散布図 …… 85
第 60 図　庄内地方の古代土器試料胎土組成散布図 …… 85
第 61 図　二子沢古窯跡出土試料胎土組成散布図 …… 86
第 62 図　山形盆地の古代窯跡出土試料胎土組成散布図 …… 86

第 63 図　蛇崩窯跡出土須恵器胎土組成散布図‥‥‥

Ⅰ　調査の経緯

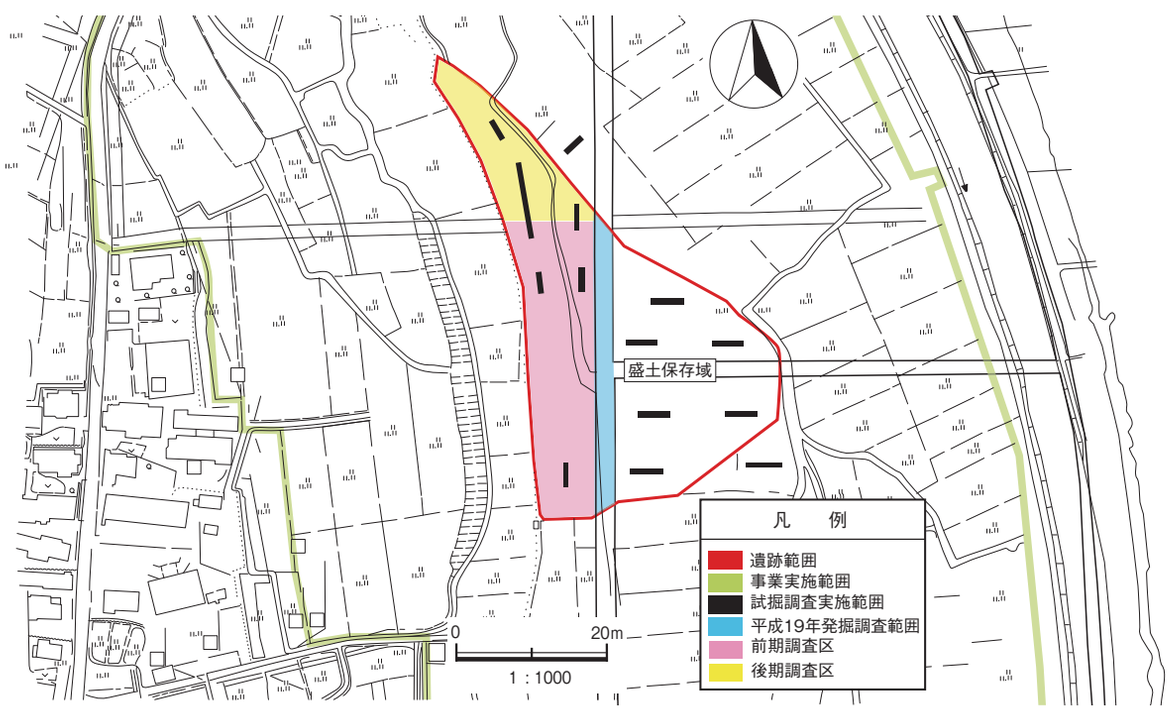
1　調査に至る経過

山形県では農地集積を通した経営体の育成を支援するほ場整備事業や、安全に暮らせる農村地域づくりに向けた防災事業、農業集落排水事業等を推進している。これら農業農村整備事業の計画的な展開を図っているが、本遺跡が所在する鮭川村を含めた最上地方管内の水田整備率は、県平均の73％に対し53％と低く、今後の整備を必要とする農用地が多く残っている。

最上地方は、農用地の多くが扇状地や河川後背地に位置しており、古来よりため池の築堤を行ったり、山腹や河川上流域より導水するなど、農業用水の確保に工面しながらも、基幹的な農業水利施設の整備が進められてきた。この結果、新庄盆地や最上町など比較的平坦な地域を中心に水田の整備が進み、現在は鮭川水系の沿線に点在する農用地を対象にして、ほ場整備事業が実施されている。

鮭川左岸に係る経営体育成基盤整備事業に伴い、県教育委員では平成14年に事業区域内の表面踏査を実施した。その結果、区内に1箇所の周知遺跡と4箇所の可能性地が存在することが判明し、下大曽根遺跡は可能性地の一つとして把握されていた。平成19年4月、この箇所が当該年の事業範囲に含まれる計画であったことから、同年6月に試掘調査が実施された。これにより遺構・遺物の存在が確認され、出土土器から10世紀を主体とする平安時代の集落跡として登録されるに至った。

事業にあたっては、保存のための協議及び文化財保護法に基づく手続きが必要と判断されたのを受けて、事業主体である最上総合支庁農村整備課との間で遺跡の取り扱いについての協議が行われた。この結果、約15,000㎡の遺跡範囲のうち、東半は工法変更による盛土保存が行われることになり、切土対象となる西側について、翌20年度に記録保存のための発掘調査を実施することで調整が図られた（第1図）。ただし、遺跡中央部を南北に縦断する計画農道と、保存が図られる遺跡東半のうち、切土整地を行わざるを得ない南端域については19年度



第1図　遺跡概要図

事業の対象であったため、これに係る約 980 ㎡については、７月末から８月初旬にかけて５日間の立会調査が実施された。これらの経過を経て、20 年度の発掘調査面積が 6,000 ㎡と確定したのを受け、８月に最上総合支庁産業経済部長から県教育委員会を経由して、発掘調査実施機関である（財）山形県埋蔵文化財センターへ調査経費の積算依頼が出された。当センターでは経費積算調書を作成後、２月に提出し、20 年４月１日付けで「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結した。続いて４月６日に、文化財保護法第 92 条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を県教育委員会へ提出、同月 18 日付けで受理された旨の通知を受け取った。

以上の諸手続きを経て、発掘調査開始前の４月 24 日に最上総合支庁農村整備課や鮭川村教育委員会など関係機関との事前打ち合わせを行い、調査期間や方法等の実施計画と現状での問題点等について協議している。

２　発掘調査の方法と経過

現地調査は、平成 20 年５月 12 日から９月９日まで（実働 80 日間）の日程で実施した。

発掘調査の方法は、遺跡範囲の確認→調査区の設定→重機による表土除去→遺構検出のための面整理・面精査と進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの工程を踏んだ。調査区内に設定したグリッドは、委託業務により設置した３級基準点から、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）に基づいた 10 ｍ単位の格子点を配置した。これを基に５ｍ四方の方眼を組み、座標値を与えてグリッド区割りを行い、遺跡範囲の北西角に当たるＸ＝－ 129.840・Ｙ＝－ 51.890 を０－０グリッドとした。標記は東西軸をアルファベットで、南北軸は北から南に昇順する算用数字にて行った。グリッド名が示す範囲は、Ｘ軸とＹ軸の交点の第四象限となる５ｍ四方の 25 ㎡である。座標値と番号を登録した遺構は、順次半截等の掘り下げを実施して断面精査を行い、実測図作成等の諸記録を経た後に完掘した。完掘後の遺構平面図の作成は、空撮による遺構測量を業務委託して実施している。平面図は 1/40 縮尺で図化したが、遺物が一括出土した土坑等に関しては、遺物出土地点を記録したため 1/20 スケールで手取りによって図化した。

調査区はほ場整備事業との兼ね合いから、南側を先行して引き渡すことで事前調整しており、７月末にこれに係る約 3,600 ㎡の範囲について調査を完了させた。調査の各段階では写真撮影を実施し、一連の作業が記録として辿れるように配慮した。以下には発掘調査の経過について、その概要を週単位で記述する。

５月 12 日～ 16 日（第１週）：12 日午後に現地到着。機材搬入後、発掘作業員の事務手続きとオリエンテーション等を行う。13 日から重機による調査区の表土除去開始。並行して遺構検出のための面整理を実施。

５月 19 日～ 23 日（第２週）：19 日に表土除去終了。北側の一部に旧耕田造成の際の撹乱部分があり、手掘りにて堆積土の除去を行う。21 日に３級基準点を設置し、23 日にグリッド杭の打設。

５月 26 日～ 30 日（第３週）：撹乱層の除去と面整理を継続。並行して、調査区東辺に排水溝を掘り下げる。グリッドは５ｍ単位の方眼区割りを行い、座標値を記入。

６月２日～６日（第４週）：包含層出土遺物の取り上げ。面整理を経ての遺構検出作業。検出遺構は写真撮影後に遺構マーキングを行う。

６月９日～ 13 日（第５週）：遺構検出作業を継続。1/100 スケールの遺構配置図の作成。11 日に調査区全体の遺構検出状況を写真撮影。12 日から南半域の遺構精査（半截等掘り下げ）を開始し、着手順に遺構番号の登録。

６月 16 日～ 20 日（第６週）：ＳＤ１～ＳＫ 14 までの遺構精査。遺構配置図作成は 17 日に完了。続けて半截遺構の土層断面図を作成。

６月 23 日～ 27 日（第７週）：ＳＫ 21 までの遺構精査。土層断面の写真撮影と図面作成。新規検出遺構（柱穴）を配置図への追記。

６月 30 日～７月４日（第８週）：ＳＰ 32 までの遺構精査と土層断面に係る諸記録。Ｎ－ 24 グリッド周辺に火山灰の堆積が認められたことから、一帯を掘り下げ、地形的な落ち込みを確認。

７月７日～ 10 日（第９週）：ＳＴ 53 までの遺構精査と並行し記録作業等を行う。土器片が散在するＭ・Ｎ－ 20 グリッド内の掘り下げを実施。調査区東壁面にて基本層序の断面実測。

７月 14 日～ 18 日（第 10 週）：ＳＰ 80 までの遺構精査。ＳＫ 57・58 では火山灰の堆積が認められ、遺物が伴って多く出土する。掘り下げと併せて諸記録作業を実施。

17日には事業委託者（最上総合支庁農村整備課）が現地視察。

7月22日～25日（第11週）：ＳＫ105までの遺構精査と記録終了遺構の完掘。並行して、空撮による遺構測量の準備作業。

7月28日～8月1日（第12週）：調査区南半域の遺構完掘。引き渡し範囲の完掘状況写真撮影。29日に遺構測量のための空撮実施。出土遺物の取り上げを経て、31日に南半域の現地引き渡し。また同日、舟形町立堀内小学校1・2年児童と保護者（14名）が来跡し、遺跡体験学習を開催。

8月4日～8日（第13週）：北半域（約2,400㎡）遺構再検出のための面整理後、ＳＫ105までの遺構精査。土層断面の写真撮影と図面作成。8日に盆休みに備えた調査区の養生と環境整備。

8月18日～22日（第14週）：ＳＤ130までの遺構精査と断面図等の諸記録。雨天により週5日のうち2日を作業休止とする。

8月25日～29日（第15週）：ＳＫ163までの遺構精査。断面図等の諸記録終了遺構を順次完掘。29日に北半域遺構完掘状況の写真撮影。

9月1日～5日（第16週）：ＳＫ152土坑の遺物出土状況平面実測。空撮と調査説明会に向けた調査区内外の環境整備。3日に空撮による遺構測量実施。4日に調査説明会を行い、地元小学生ほか81名の参加を得る。

9月8・9日（第17週）：ＳＫ152土坑の遺物取り上げと完掘。9日に機材撤収して、現地調査を終了する。

3　整理作業の経過

発掘調査終了後、報告書作成のための整理作業は2ヵ年にわたって実施した。出土遺物の整理過程は、洗浄→注記→分類→接合・復元→抽出→実測・拓本→トレース→写真撮影→収納の順である。

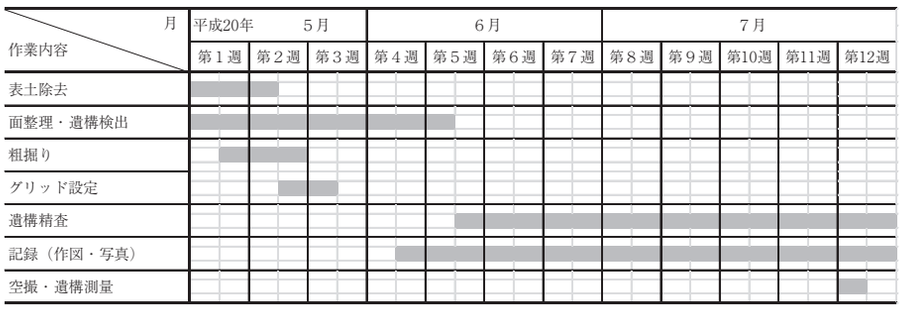
平成20年度は10月初旬に遺物洗浄を開始し、乾燥後の注記と分類を経て下旬より接合・復元に着手した。また、写真・図面等記録類の整理を並行して実施した。図面は番号を付加した上で図面台帳を作成し、遺構ごとに平面図と土層断面図の補整を行った。業務委託した遺構平面図については校正を行って、12月下旬に成果品を得た。またこれとは別に、遺構個別の平面図と断面図を編集して、報告書掲載原稿のデジタルトレースを実施した。遺物復元は12月中旬に完了し、報告書掲載品の抽出を経て実測に着手した。実測に際しては、破片資料であっても図上復元可能なものについては、図上復元を行っている。1月末から並行して拓本採取と、遺物実測図のデジタルトレースを実施した。また、遺構内から出土した炭化材の年代測定、火山灰堆積層のテフラ検出分析・テフラ屈折率測定、出土遺物の胎土分析の理化学分析を業務委託し、3月中旬に成果品を得た。

平成21年度の6月からは、報告書掲載遺物の拓本のデータ処理を行い、遺物実測図へ拓本の貼付を行った。これらを順次版組みして、報告書の頁単位で割付を作成した。また、報告書で取り上げた遺構を中心として写真図版の割付を行い、遺構写真のプリントを発注した。9月からセンター内にて、出土木製品の保存処理業務を行っている。

諸作業と並行して本文執筆に取り掛かり、10月中旬には報告書掲載遺物の写真撮影を行った。これらの原稿を編集して報告書の版組見本を作成し、21年12月の入稿までに至った。その後、写真・図面等の諸記録類を、出土遺物は報告書掲載と未掲載に区分して収納した。

なお、報告書掲載遺物については後の検索・活用を考慮し、図版番号を追加して注記している。

表１ 発掘調査工程表



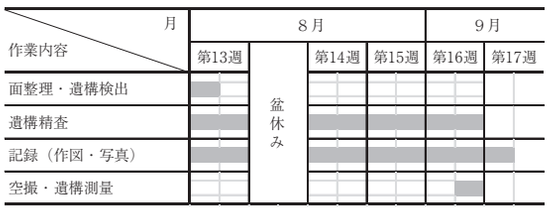
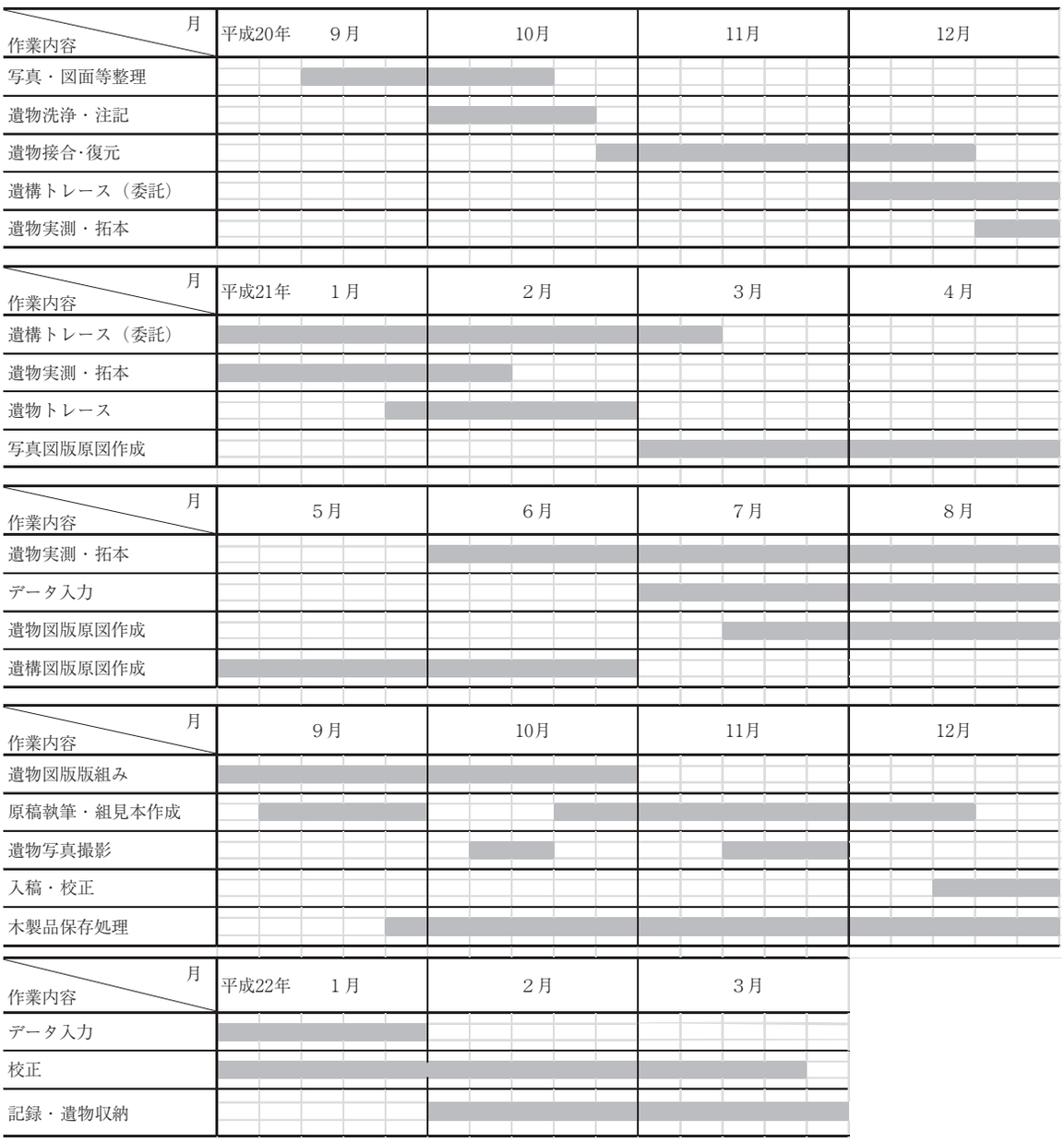


表２ 整理作業工程表



Ⅱ　遺跡の概観

1　立地と環境

下大曽根遺跡が所在する最上郡鮭川村は、山形県の北部にあたる新庄盆地の西縁部に位置する。周囲を奥羽山脈の支脈と出羽丘陵によって囲まれ、南西方向に月山、北西には鳥海山を望むことができる。村域の規模は東西20㎞・南北12㎞で、面積122.3平方kmを測り、総面積の64％が林野で占められた農山村である。村の中央部を南下する鮭川を境に、東部は比較的平坦で耕地が多いのに対し、西部は出羽丘陵とその裾野で起伏の激しい山間部に大別される。出羽丘陵の樹木はブナが主な植生であり、標高が下がるにつれてミズナラ・クリ・コナラの林になる。標高は最も高い与蔵峠付近で約702ｍ、集落中心部の京塚や庭月で約58ｍを測る。

遺跡の西側を流れる一級河川の鮭川は、村の中央部を南流した後に、隣接する戸沢村津谷付近で最上川に合流する。鮭川本流は幾多の蛇行を繰り返しており、沿岸部は水害の常習地となっている。このために集落の多くは、沿岸を避けた段丘面と蛇行内側の河間低地に形成されている（第３図）。

気候は積雪寒冷地帯に属し、年間の平均気温は11℃程である。冬季は最上川峡谷に沿って来る季節風の影響で、積雪期間が11月中旬から３月中旬までの５ヶ月間に亘り、積雪量は多い年で180㎝を超える。春から夏にかけては多雨多湿であり、降水量は年間約2,500㎜と多く、集中豪雨による被害も度々起こる。また、盆地特有の霧が発生し、日照時間が短く、とりわけ７～８月に少ないことから農作物に大きな影響を与える。このような厳しい気候のため、果樹栽培は難しい地域であり、鮭川流域の肥沃な土地に依存した水稲や畑作が農業経営の中心である。この他、良質の杉材を利用した木材加工業をはじめキノコ栽培や山菜加工業、サケのふ化放流・養殖業などの地場産業も盛んである。

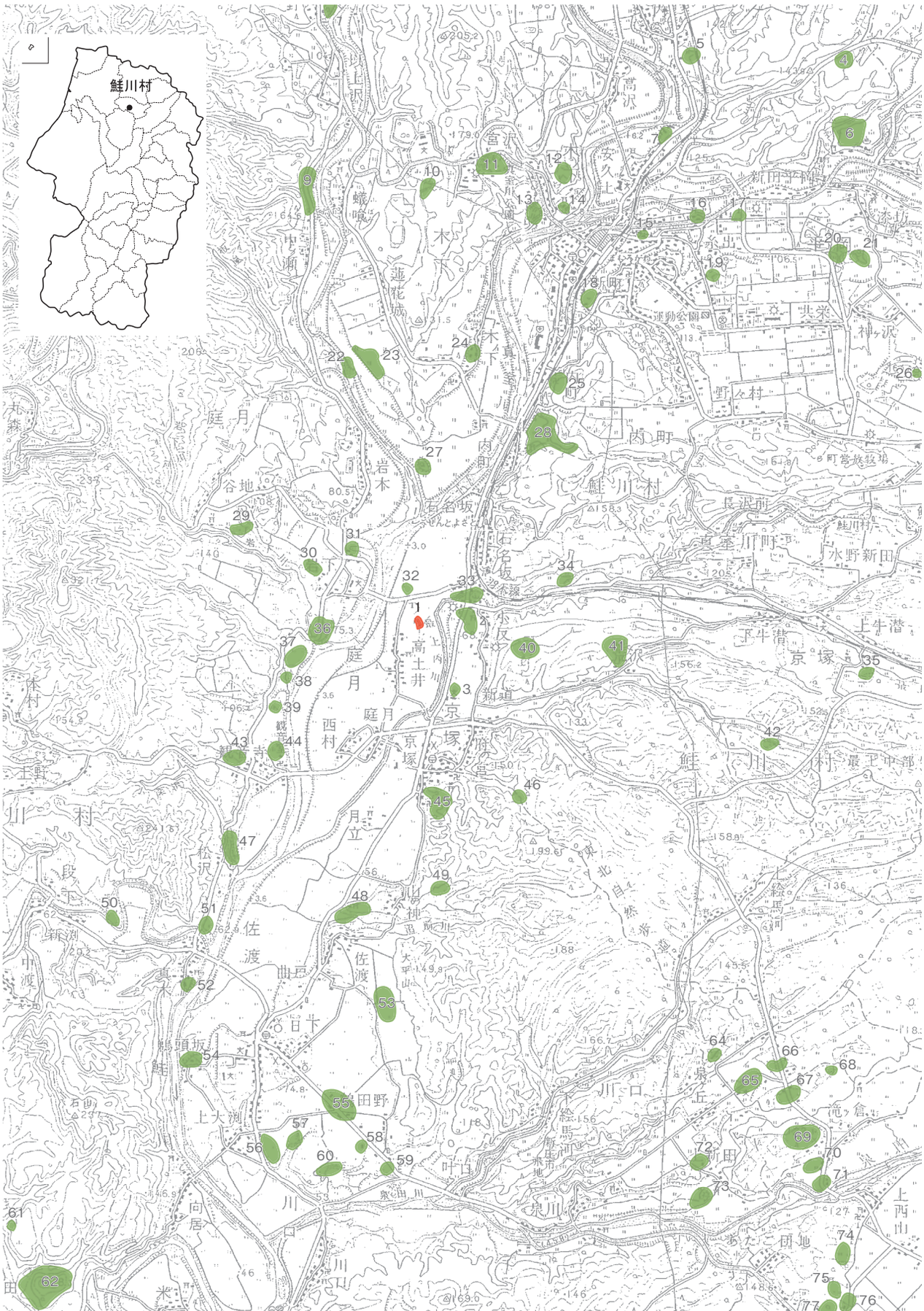
下大曽根遺跡はＪＲ羽前豊里駅から南西方へ約600ｍ、高土井集落東側の水田地帯に所在する。西側を流れる鮭川と、東側の最上内川に挟まれた河岸段丘上に立地しており、地形分類上は鮭川沿岸低地の後背湿地に当たる。表層の地質は未固結の砂及び泥からなる沖積堆積物で、河川の作用により細粒である。耕作土壌は細粒灰色低地土壌に属し、非固結堆積岩を母材としている。堆積様式は水積であり、水田として利用され、生産力は高い。地下水位が高い場所の下層部はグライ反応を示し、土性は一般に粘質で斑紋が見られる。

2　周辺の遺跡

第２図は下大曽根遺跡を中心とした半径６㎞圏内の図幅に、遺跡範囲を記入した位置図である。78遺跡が分布し、その多くは鮭川・真室川・泉田川・金山川といった河川流域の段丘上に立地している。時代が確認されている中では縄文時代の遺跡が多いこと、また種別において城館跡が多く認められること等が特徴と言える。

最上地方の遺跡で、発掘調査で概要が明らかにされた例はあまり多くはない。新庄市に所在する乱馬堂遺跡では、1976年から81年にかけて都合４次に亘る発掘調査（新庄市教委1982）が実施され、4,000点を越す旧石器群が出土した。鮭川流域においても真室川町の秋山Ｂ遺跡（11）や小林遺跡（18）といった当該期の遺跡が存在し、後者では1973年の予備調査で乱馬堂遺跡出土例とは異なる形態のナイフ形石器や尖頭器が出土している。

縄文時代には遺跡数が急増し、泉田川流域の鮭川村滝ノ倉や鶴田野地区などに密集域が形成される。鮭川流域を中心にして見ると、前期では真室川町の悪土遺跡（７）と、大木４～６式土器が出土した金山町の本町遺跡（金山町教委1981）が代表的である。中期に入ると気候の温暖化も影響してか遺跡数が増え、小反遺跡（２）・岩下遺跡（30）・石名坂遺跡（34）・観音寺遺跡（43）・庭月観音堂遺跡（44）・山の神遺跡（49）・松沢遺跡（51）・真木遺跡（52）・鶴田野遺跡（55）・上大淵遺跡（56）など多くの遺跡が点在している。このうち上大淵遺跡からは、1972年の水田整備の際に大木７ｂ～９式の土器と、長さ65㎝の大形の石棒が出土している。庭月観音堂遺跡では1987・88年の確認調査により、立石を伴う配石



※国土地理院発行２万５千分の１地形図「羽前金山」・「大沢」・「新庄」・「羽根沢温泉」を 50％縮小して使用

第２図　遺跡位置図（1:50,000）

表３　遺跡地名表

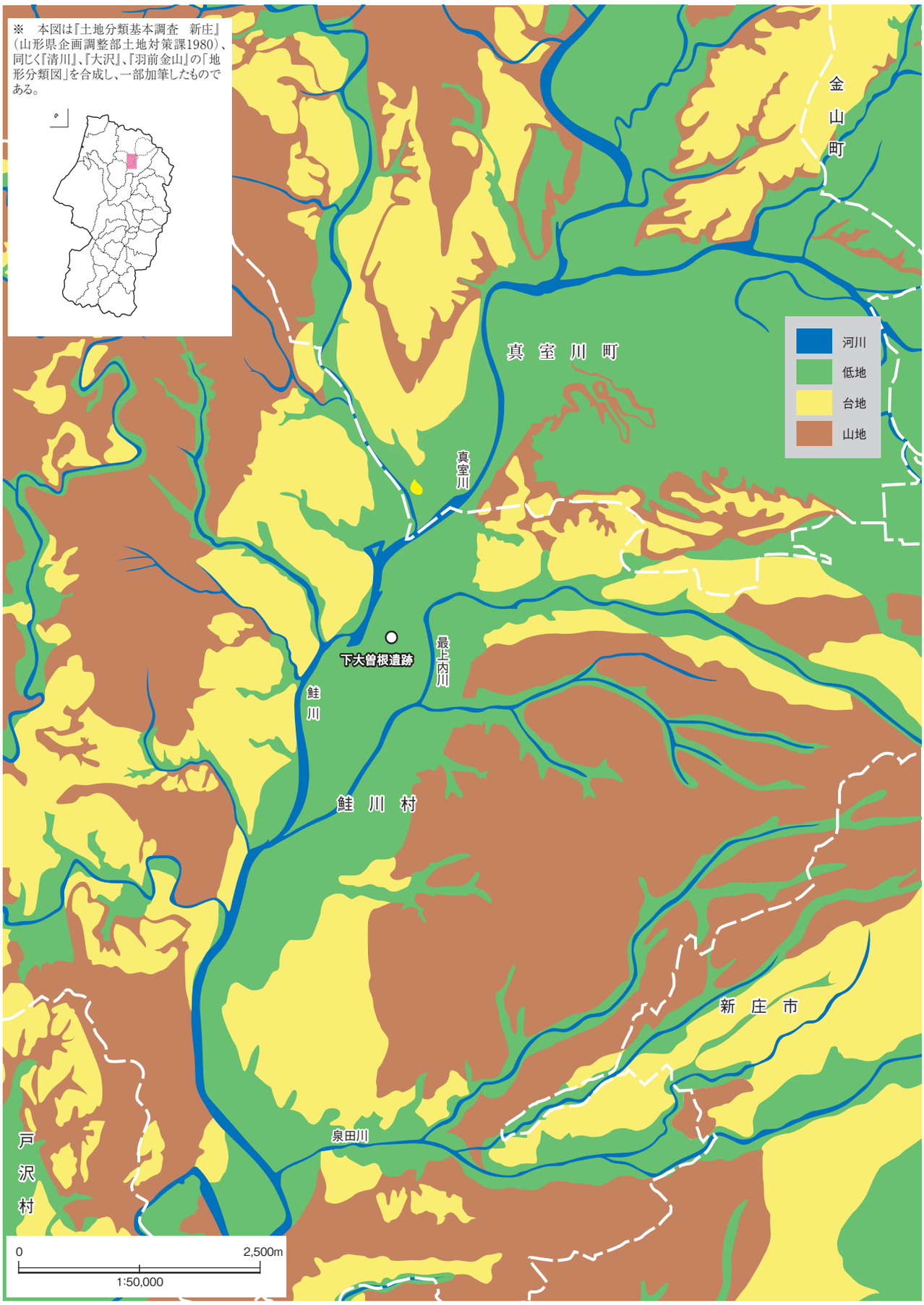
No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	下大曽根	平安・中世	集落跡	27	オクミ館		城館跡	53	長者屋敷		城館跡
2	小反	縄文	集落跡	28	鮭延城		城館跡	54	鵜頭坂	縄文	散布地
3	上野	縄文・中世	集落跡	29	岩下・後野	縄文	集落跡	55	鶴田野	縄文・平安	集落跡
4	長野	縄文	集落跡	30	岩下	縄文	集落跡	56	上大淵	縄文	集落跡
5	川の内	縄文	集落跡	31	岩木野	縄文	集落跡	57	鶴田野３	縄文	集落跡
6	平岡館		城館跡	32	葎田	鎌倉	集落跡	58	古問屋	縄文	散布地
7	悪土	縄文	集落跡	33	谷地	縄文	散布地	59	古問屋２	縄文	散布地
8	上野	縄文	集落跡	34	石名坂	縄文	集落跡	60	鶴田野２	縄文	散布地
9	中ノ瀬館		城館跡	35	平坂山	縄文	散布地	61	姥館		城館跡
10	滝ノ沢山	縄文	集落跡	36	八幡館		城館跡	62	平家館		城館跡
11	秋山Ｂ	旧石器・縄文	集落跡	37	庭月館		城館跡	63	川口館		城館跡
12	秋山Ｃ	縄文	集落跡	38	小十郎館		城館跡	64	中峯山	縄文	散布地
13	秋山Ａ	縄文	集落跡	39	玄蕃館		城館跡	65	泉ヶ丘	縄文	集落跡
14	宮沢	縄文	集落跡	40	ミタケ館		城館跡	66	中谷地	縄文	散布地
15	山神神社	縄文	集落跡	41	ミクラ館		城館跡	67	真室道	旧石器・縄文	散布地
16	糸出稲荷神社	縄文	集落跡	42	五枚田沢	縄文	散布地	68	八幡裏	旧石器	散布地
17	新田平岡	縄文	集落跡	43	観音寺	縄文	集落跡	69	滝ノ倉	旧石器・縄文	散布地
18	小林	旧石器・縄文	集落跡	44	庭月観音堂	縄文	集落跡	70	滝ノ倉前Ａ		散布地
19	糸出	縄文	集落跡	45	京塚館		城館跡	71	滝ノ倉前Ｂ		散布地
20	塩野	縄文	集落跡	46	京塚	室町	経塚	72	上新田Ａ	縄文	散布地
21	片杉野	縄文	散布地	47	セゴロ館		城館跡	73	上新田Ｂ	縄文	散布地
22	鷺の瀬	縄文	散布地	48	熊野館		城館跡	74	山崎Ｄ	旧石器・縄文	散布地
23	蓮花城	縄文	集落跡	49	山の神	縄文・古墳	集落跡	75	山崎Ｃ	旧石器	散布地
24	木の下	縄文	集落跡	50	向居新淵	縄文	集落跡	76	山崎Ｂ	縄文	散布地
25	正源寺境内	縄文	集落跡	51	松沢	縄文	集落跡	77	山崎Ａ	旧石器	散布地
26	神ケ沢墳墓	鎌倉	集落跡	52	真木	縄文	集落跡	78	下山崎Ａ	縄文	散布地

遺構群が検出された（鮭川村教委 1989）ことから、総体として環状列石との指摘（大友 2002）もなされている。本遺跡の 400m 東に位置する小反遺跡は 2004 年に発掘調査が行われ、複式炉を有する 14 棟の竪穴住居跡と、県内の縄文時代遺跡では３例目となる独立棟持柱構造の掘立柱建物跡等が確認された（山形埋文 2006a）。さらに金山町本町遺跡（前掲）からは、土盛りの中央に石棒を立て、周囲に８基の柱穴を廻らした当該期の祭壇跡と想定される遺構が見つかっている。後期の様相は判然とせず、真室川町の滝ノ沢山遺跡（10）･木の下遺跡（24）･正源寺境内遺跡（25）などから土器片が数点出土しているに過ぎない。真室川左岸に立地する釜淵Ｃ遺跡は、中期末葉～晩期にかけて断続的に営まれた集落跡で、1912 年に出土した土偶が国指定重要文化財として正源寺に保管されている。1985 年、町によって発掘調査が行われた（真室川町教委 1986）ほか、2001 年には当センターがほ場整備を原因とした発掘調査を実施し、中期末葉を主体とする竪穴住居跡や、配石・列石・敷石遺構などを検出した（山形埋文 2003）。晩期には真室川町の糸出稲荷神社（16）や片杉野遺跡（21）、泉田川流域では中谷地遺跡（66）・上新田Ｂ遺跡（73）等で当該期の遺物が採集されている。出土土器から鮭川流域の前者は、大洞Ａ～Ａ'式を主とする後葉の遺跡であるのに対し、泉田川流域の遺跡群は前葉の大洞 BC 式に位置付けられている。

弥生時代では当該期の遺物が断片的に見つかっている程度で、最上地方において発掘調査が行われた事例はない。大蔵村の上竹野遺跡からは、中期に特徴的な沈線文が施された瓢形を呈する壺の下半部や、蓋の一部が出土している。鮭川村では楢山遺跡から、アメリカ型石鏃１点と石鍬と考えられる打製石器２点が採集されている。

古墳時代についても表採された遺物から該期の存在が確認できる程度で､山の神遺跡（49）や上大淵遺跡（56）から７～８世紀に比定される土師器・須恵器の破片資料が見つかっている。また、鮭川村には京塚地区から出土したと伝えられる６世紀中頃の「金銅双鳳環把頭」があり､全国的にも類例の少ない逸品として紹介されている。

奈良･平安時代の遺跡は最上地方全体で見ても少なく、第２図に示した中では鶴田野遺跡（55）が縄文時代との複合遺跡として登録されているに過ぎない。最上町の水木田遺跡は縄文時代中期を主体とする遺跡であるが、1983 年の発掘調査により平安時代の竪穴住居跡４棟と


※　本図は『土地分類基本調査　新庄』（山形県企画調整部土地対策課1980）、同じく『清川』、『大沢』、『羽前金山』の「地形分類図」を合成し、一部加筆したものである。
金山町
真室川町
河川
低地
台地
山地
真室川
下大曽根遺跡
最上内川
鮭川
鮭川村
新庄市
泉田川
戸沢村
0
2,500m
1:50,000

第３図　地形分類図

掘立柱建物跡２棟を検出している（山形県教委 1984）。最上地方において、平安時代を主とした集落遺跡の発掘調査は本遺跡が初めてであり、様相が明らかにされていない古代の解明に向けて、多くの成果が期待されるところとなった。

中世に至ると鮭川流域の京塚・庭月地区には館の分布が顕著となり、眺望の良い丘陵の突端やその裾野を利用したものと思われる。鮭川左岸には京塚館跡（45）を中心にミタケ館跡（40）・ミクラ館跡（41）が、右岸には庭月館跡（37）を中心に八幡館跡（36）・小十郎館跡（38）・玄蕃館跡（39）などが点在する。京塚・庭月地域は最上郡北部の鮭延氏、南部の清水氏、庄内の武藤氏といった各勢力が覇権を争った場所であり、京塚館などは清水氏の支配に属し、庭月館・八幡館・小十郎館・玄蕃館などは鮭延氏の支配下に置かれていたとされる（山形県教委 1997）。2001 年に小反遺跡と一部並行して発掘調査を実施した上野（うわの）遺跡（３）では、堀で囲まれた内郭に建物跡と石組池や石敷などの庭園遺構が検出され、鮭延氏の前身である佐々木氏の館跡、もしくは寺院跡として注目された（山形埋文 2006b）。

参考文献

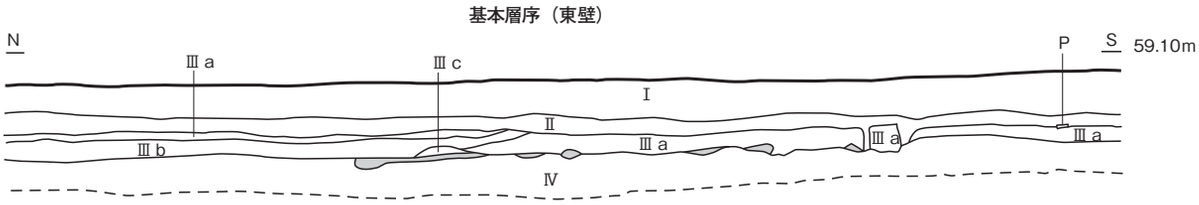
大友義助 2002「縄文人の祭り 庭月観音堂遺跡の環状列石」『図説 最上の歴史』郷土出版社
金山町教育委員会 1981『本町遺跡発掘調査報告書』
鮭川村教育委員会 1989『庭月観音堂遺跡発掘調査報告書』鮭川村文化財調査報告書
鮭川村史編集委員会・鮭川村 1986『鮭川村史 通史編』
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2003『釜淵Ｃ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006a『小反遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 148 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006b『上野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 149 集
新庄市教育委員会 1982『乱馬堂遺跡発掘調査報告書』山形県新庄市教育委員会報告書６
真室川町教育委員会 1986『釜淵Ｃ遺跡発掘調査報告書』山形県最上郡真室川町文化財調査報告書第１集
山形県 1987『土地分類基本調査 清川 国土調査』
山形県教育委員会 1984『水木田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 75 集
山形県教育委員会 1997『山形県中世城館遺跡調査報告書 第３集（庄内・最上地域）』

3　遺跡の概要

下大曽根遺跡の範囲は、地形の概観から東西約 100 m・南北約 200 mの広がりに係る 15,000 ㎡程と推定され、前章でも触れたとおり、基盤整備により切土対象となる遺跡西側が今回の調査区域である。遺跡の現況は水田と一部が畑地であり、比較的旧地形を遺していると推測されたが、平成 19 年度の試掘調査によると南東部分は大規模な造成が行われたようで、包含層や遺構検出面の大部分は削平された可能性が高いと判断された。現地形での標高は約 59 mを測り、東側の田面とは 30 ㎝前後、また西側の田面に比しては 130 ㎝程高い微高地となっている。調査区を設定した遺跡西側には、北から南へ流れる排水路が通っている。

基本層序は調査区東側の土層を観察した。堆積層は基本的に３層からなる（第４図）。Ⅰ層は、耕作土で地表面から 10 ～ 15 ㎝、Ⅱ層は黄色褐色シルト層でⅠ層よりやや粒子が粗い。この層は、ほ場整備時に動かされた撹乱層で、若干の遺物が混入する。遺物包含層と目されるⅢ層は、遺物と炭化物を含む黒褐色シルト層と酸化鉄を含む黄褐色シルト層に分けられる。層中には一部で火山灰の堆積が確認される。遺構検出面は、このⅢ層の土層中または層の直下で確認され、現地表から 20 ～ 30 ㎝下に検出面が広がっている。北側では包含層が認められずに表土直下が検出面となる。Ⅳ層は、にぶい黄橙色シルト層で砂質の強い基盤層である。

検出された遺構は竪穴建物跡・井戸跡・土坑・溝跡・柱穴などであり、出土遺物から主に平安時代と中世に属するものと認識された。さらに、平成 19 年度に行った東側に隣接する農道部分の立会調査では、掘立柱建物跡１棟も検出されている。遺構の分布は中央部と北側にやや密集した様相を呈しており、中央部では立会調査での分布状況を含めて、さらに東側への広がりが予見される。中央部東側で検出された竪穴建物跡４棟の重複した在り方は、集落が数期間に亘って存続したことを示すと思われる。３基確認した井戸跡は、ほぼ等間隔で北西―南東方向の直線上に配置されている。廃棄穴が主と考えられる大小の土坑は全域に分布するが、北半部のＨ～Ｋ‐12 ～ 14 グリッドに密集する傾向が指摘できる。また、遺物と共に火山灰を包含する土坑は、北半部東側の一定域で検出される。溝跡は調査区中央部を南北方向に通る休耕田のものを基軸に、これに直交する東西方向の数条西



基本層序（東壁）

Ⅰ　10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色シルト（耕作土）
Ⅱ　10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色シルト（固くしまる。Ⅰより色調明るい）
Ⅲａ 10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　　（遺物包含層。Ⅳをブロック状に混入する）
Ⅲｂ 10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色シルト（Ⅲａをブロック状に３％含む）
Ⅲｃ 10ＹＲ4/2　灰黄褐色シルト
Ⅳ　10ＹＲ6/3　にぶい黄橙色シルト（砂質。地山）

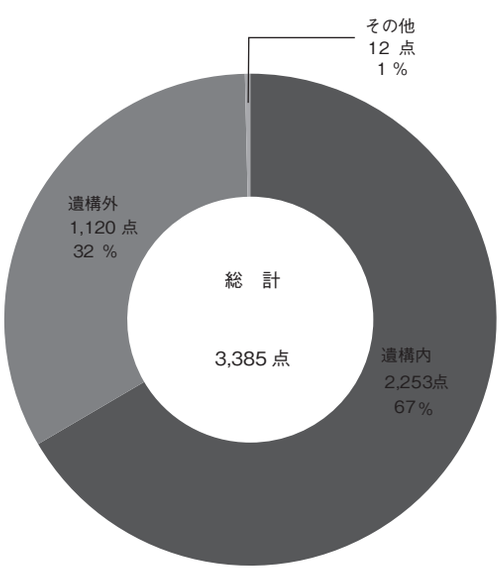
0　1ｍ
1：40

第４図　基本層序

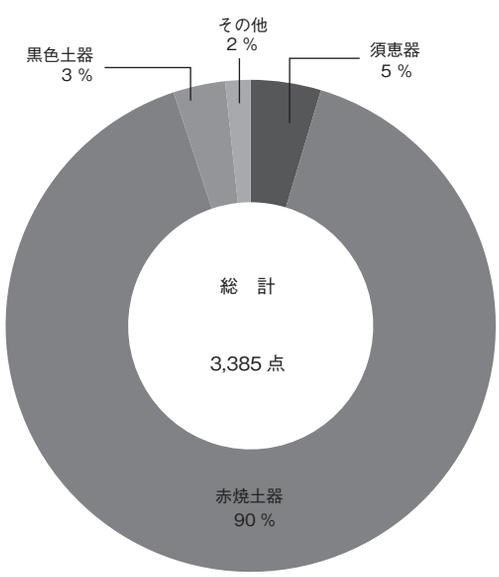
側に多く分布する。柱穴は南半部の西側に分布的まとまりが見られ、配置や組み合わせにより掘立柱建物跡や柱穴列と認識できるものが調査区内で３例確認できた。

出土した遺物は平安時代の土器が７箱と、中世陶磁器、井戸跡出土の木製品や、石器・金属製品（古銭）等が１箱相当分で、調査面積及び遺構数に照らせば総じて少ないと言える。遺物の67％は遺構内から出土しているが、このうち量的・質的に分布の主体を占めたのはＳＫ58など３基の火山灰堆積土坑であり、全体の34％に及んだ。その他、遺構内における分布状況では、ＳＴ52・53、ＳＤ59、ＳＫ126等の調査区中央～北半の東側に位置する遺構からある程度まとまった出土量が得られた。（表４・５）一方、包含層の出土遺物においては、北半域で圧倒的に多く、特にＳＫ58等が位置する中央部の東側に集中しており、遺構内出土遺物と相関した傾向が窺われた。（第７図）これに対して遺構密度が比較的高い中央部の西側から南半部にかけてはほとんど出土しておらず、遺構の分布や包含層の削平とは必ずしも一致しない状況が看取された。出土遺物は、主に赤焼土器が90％と大半を占めており、器種組成は無台坏・有台坏･坏類の食膳具が最も多く、全体の55％を占めている。須恵器については、甕が81％と大半を占めている。黒色土器については､食膳具が圧倒的な割合を占めた。（第５～６図）

遺物の出土数と割合

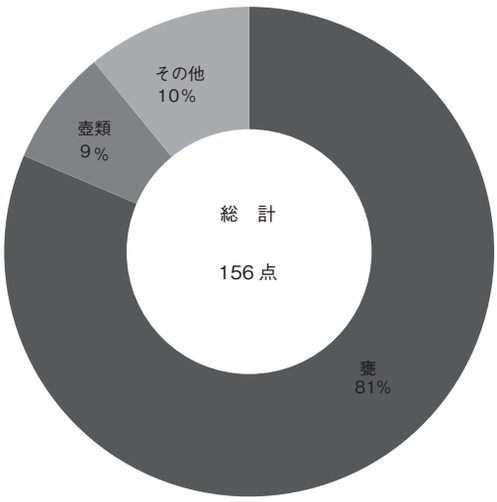


出土遺物の組成比

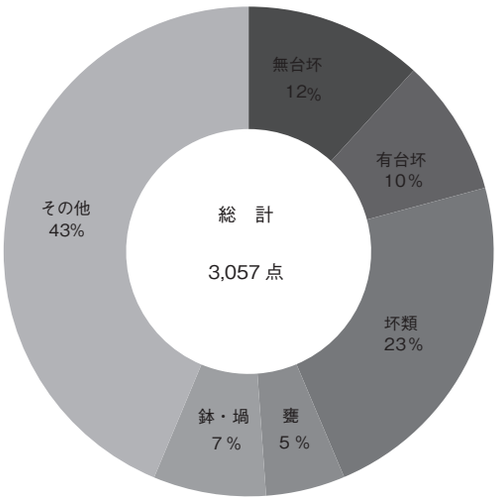


第５図　出土遺物の割合図

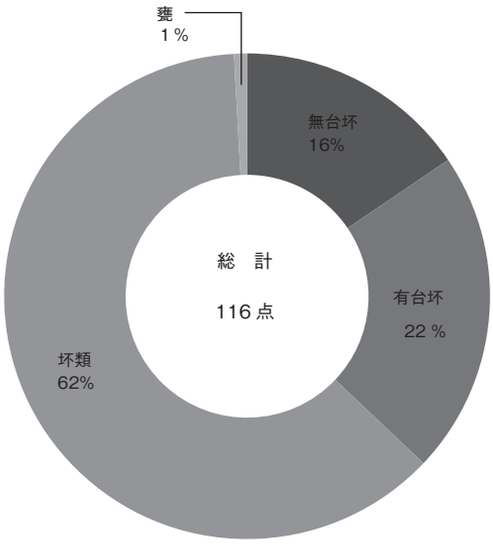
須恵器の器種組成比



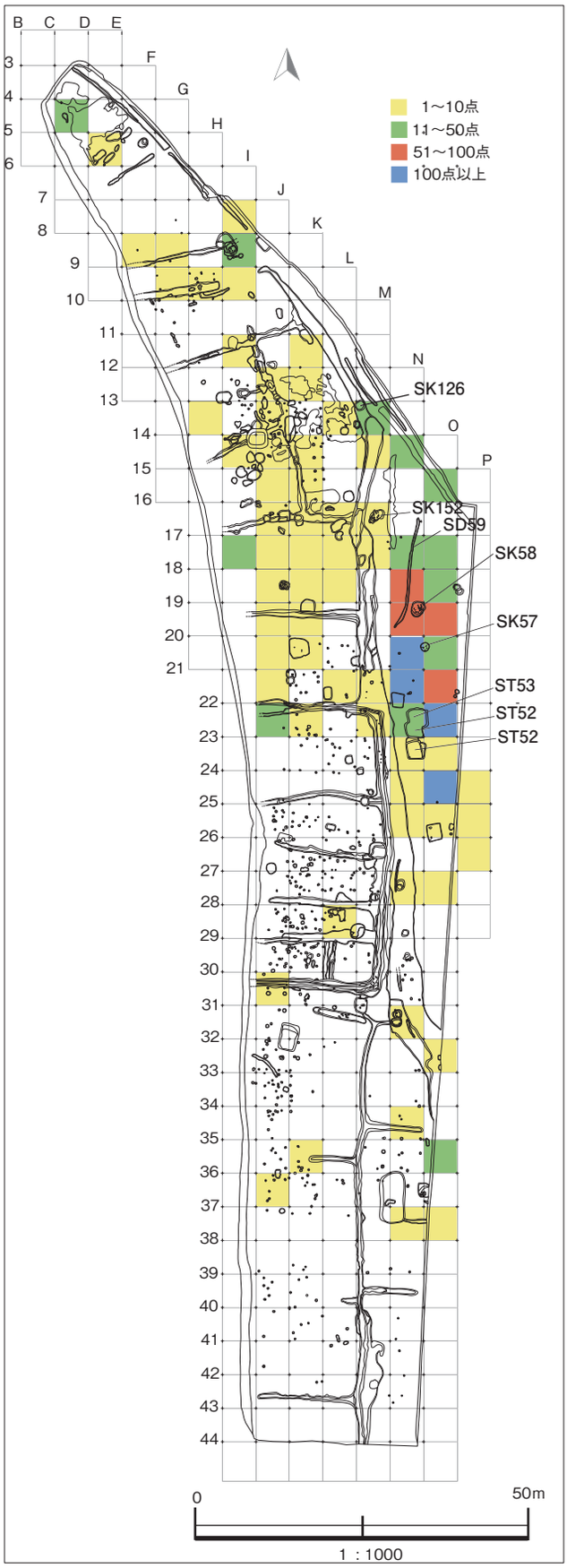
赤焼土器の器種組成比



黒色土器の器種組成比



第６図　出土遺物の器種組成比



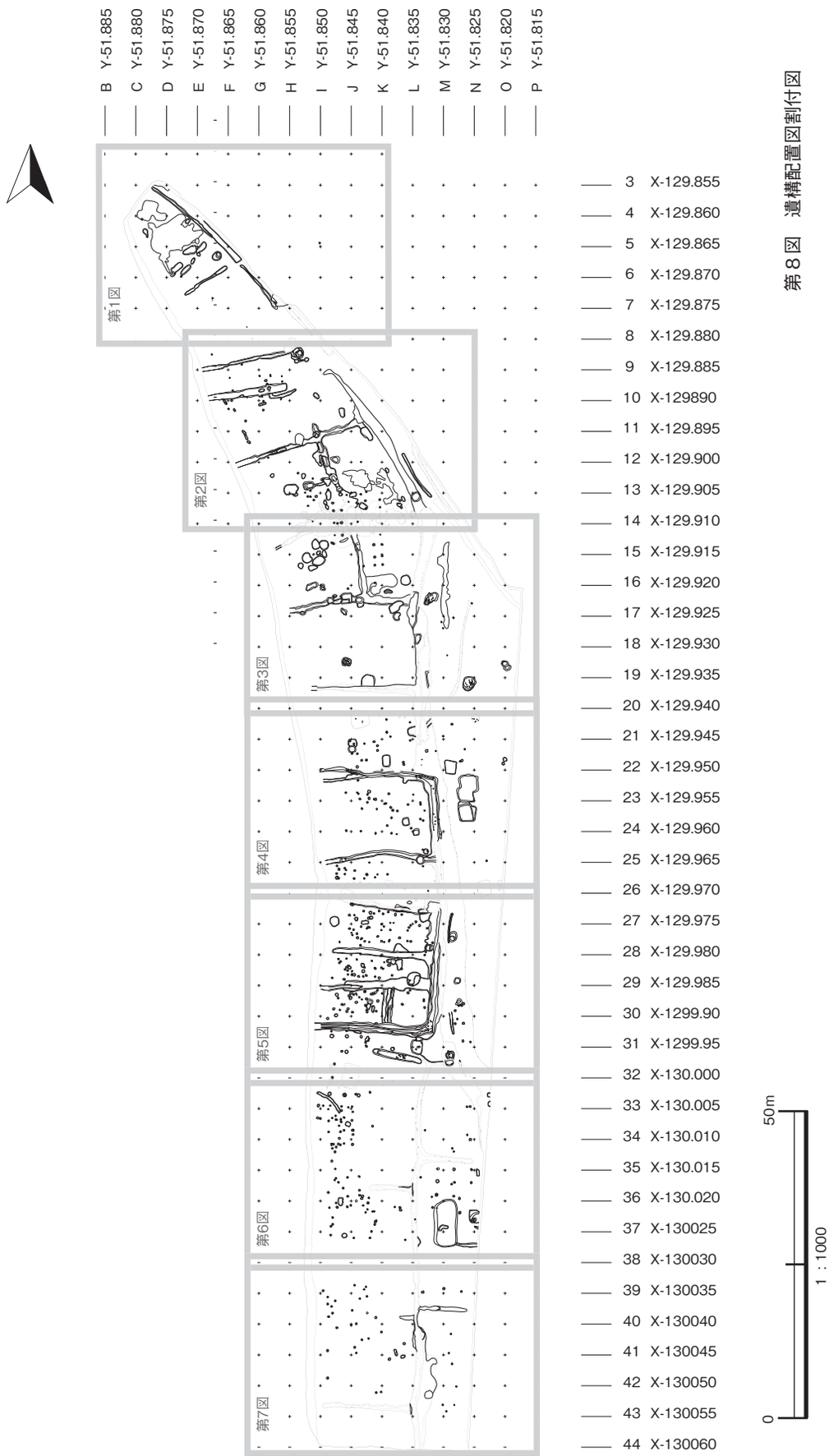
第７図　遺構外出土遺物分布図

表４ 遺物出土詳細表（１）

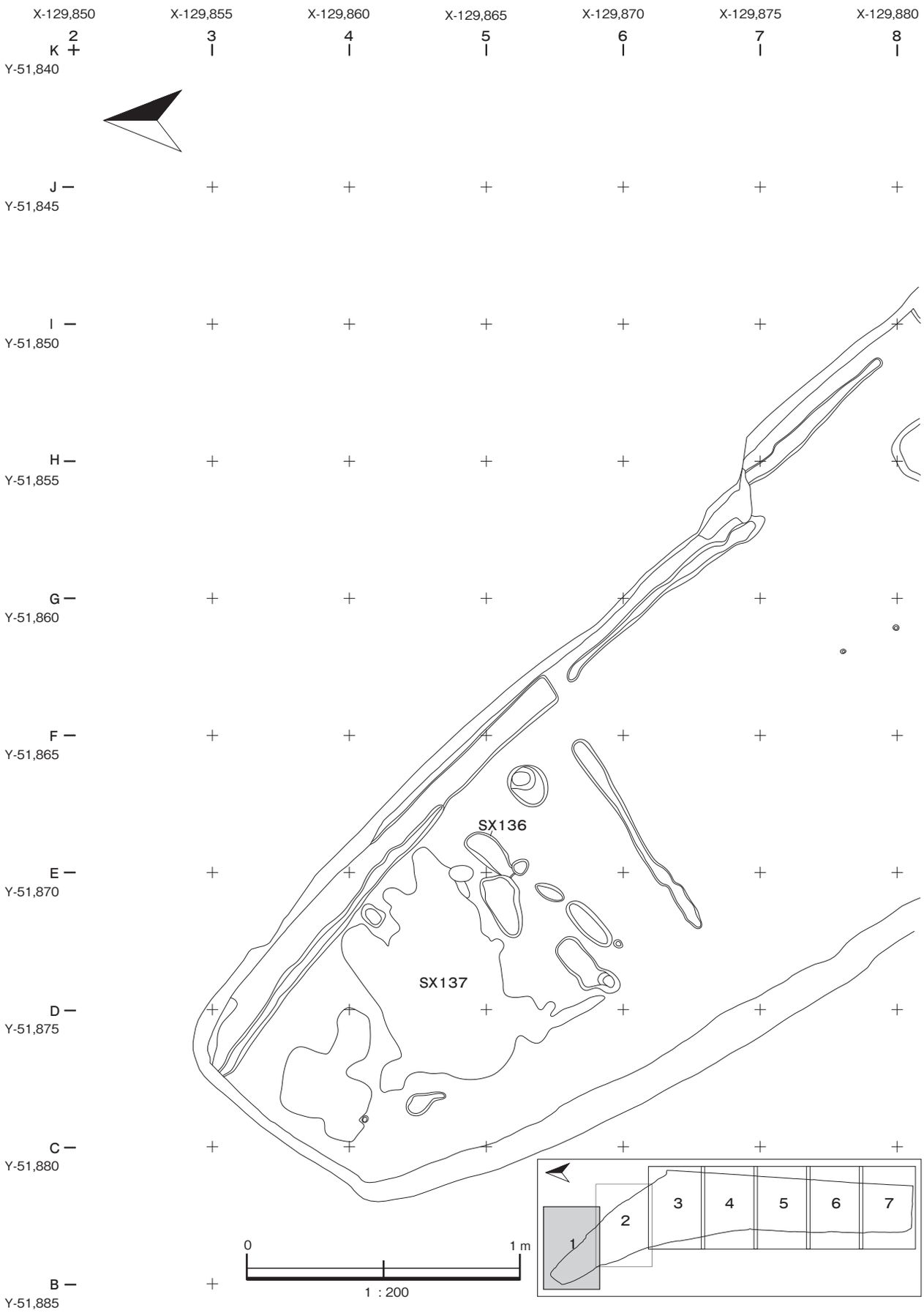
遺構	遺構	須恵器			赤焼土器						黒色土器				その他					合計
種別	番号	坏類	甕	壺	坏	高台坏	坏類	甕	鉢	その他	坏	高台坏	坏類	甕	碗	皿	甕	鉢	その他	
SK	3						1			1										2
SK	5						3	1	2	11										17
SK	10									1										1
SK	11				1				2	4										7
SK	13						1			2										3
SK	14						3	1		3							2			9
SK	21					1														1
SK	33																		1	1
SK	36																		1	1
SK	44						1			1										2
SK	46									2										2
SK	48									1								1	1	3
SK	49									1										1
SK	55				1	4	3		1	7			1							17
SK	56		1			1				6										8
SK	57				6	8	12	14	13	29										82
SK	58			2	150	114	209	34	83	235	5	4	8							844
SK	60		3							1			1							5
SK	61						3	1	1	4					1			1		11
SK	65						1													1
SK	66		2																	2
SK	67																	1		1
SK	68																		1	1
SK	71						1			1			2							4
SK	88				1															1
SK	96						1			2		1								4
SK	97							1		2										3
SK	98						1	1		2										4
SK	99									3										3
SK	103						2			2										4
SK	104				1		2			3										6
SK	105		1		3	2	5	4		6							1	2	1	25
SK	106												1							1
SK	109			1						6										7
SK	111							1		4										5
SK	112									1										1
SK	113						1			2										3
SK	114				1		1	2		4			1							9
SK	115						2			2	1									5
SK	116									1										1
SK	117				1					5			1							7
SK	118									2									4	6
SK	120									4			1							5
SK	123							1		5										6
SK	126			2	6		19	4	2	26		1	3							63
SK	129						1		1	3										5
SK	133			2				1	1	1			1							6
SK	134		15	2		1	3			6								2		29
SK	148									3									2	5
SK	149									2										2
SK	150				1		2			2										5
SK	151				1		6	1	3	13			2							26
SK	152			2	33	27	50	19	16	72	6	13	10							248
ST	50				1		2			10			3						1	17
ST	51		3	3	4	7	13	2	7	27		1	2							69
ST	52			1	3	1	2		1	7			3							18
ST	53				4		12	4	4	25	1	1	2							53
SP	13							1												1
SP	15						1													1
SP	17				1															1
SP	23				1															1
SP	24						2													2
SP	25									2										2
SP	26						2			1										3
SP	27									2										2
SP	28									1										1

表５　遺物出土詳細表（２）

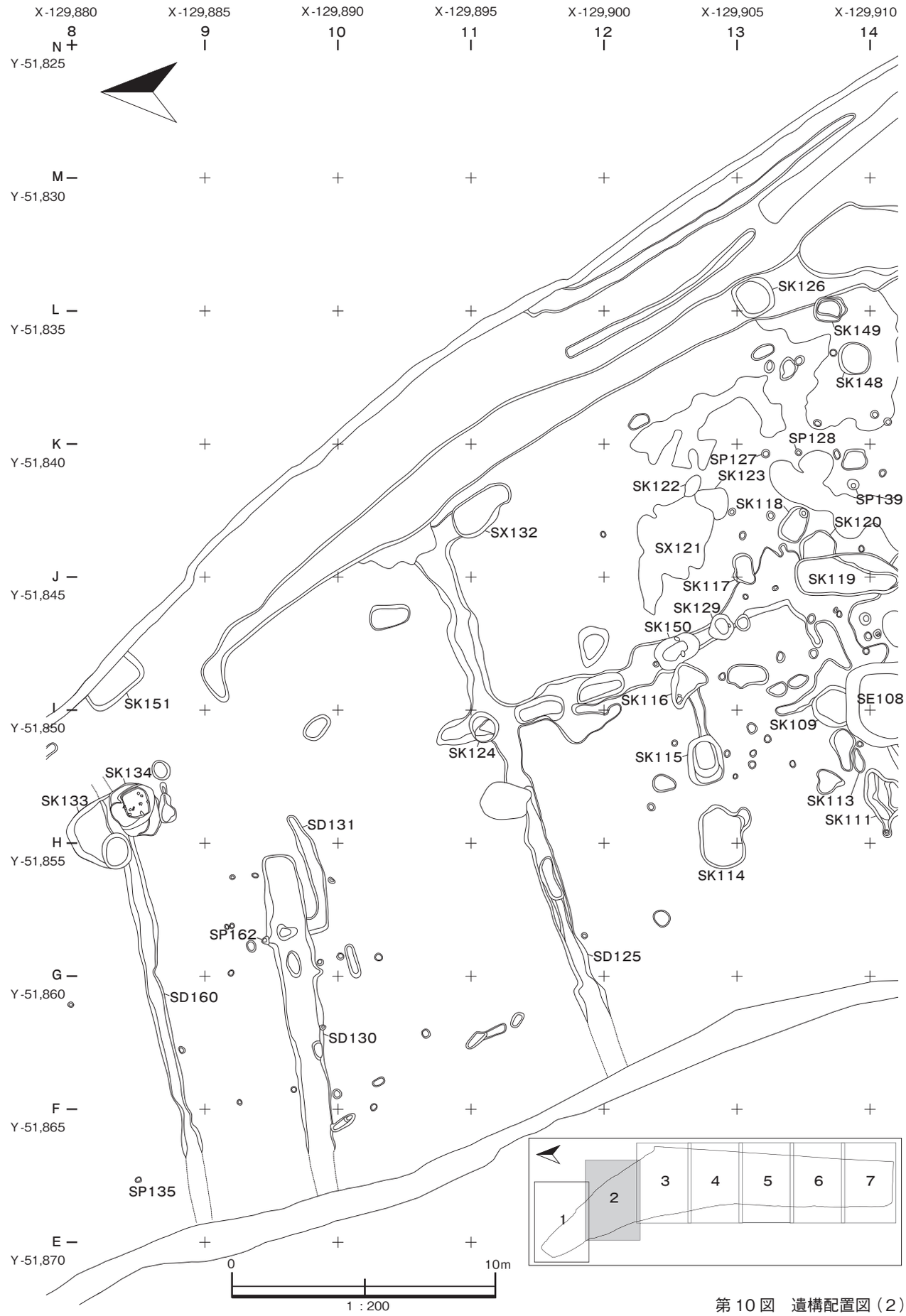
遺構	遺構	須恵器			赤焼土器						黒色土器				その他					合計
種別	番号	坏類	甕	壺	坏	高台坏	坏類	甕	鉢	その他	坏	高台坏	坏類	甕	碗	皿	甕	鉢	その他	
SP	29						2			6										8
SP	30									3										3
SP	31									1			1							2
SP	32						2			9										11
SP	62				1					4										5
SP	63									3										3
SP	64						1			3										4
SP	69										1									1
SP	70									2			2							4
SP	72									2										2
SP	79						1			2										3
SP	80																		2	2
SP	81						1			5										6
SP	82				1	2		2		4		1								10
SP	83												1							1
SP	84									3										3
SP	85						2													2
SP	86									1										1
SP	87									1										1
SP	88				2		2			3										7
SP	89							1		4										5
SP	90					1	1			1										3
SP	91									2										2
SP	92									5										5
SP	93							1												1
SP	94						1			2										3
SP	95						1			4										5
SP	127									1										1
SP	128									1										1
SP	135																		1	1
SE	138									1										1
SE	102		1		4	1	12	3		25								1	1	48
SE	108		3	1	2	1	7		2	21	1					1			5	44
SX	121									4										4
SX	132																		1	1
SX	136												1							1
SD	137		23				1	2		5										31
SD	1		2				2			4									1	9
SD	2	1	7	1			1	1	1	15					1			5	2	35
SD	4		3							4		1	1							9
SD	6		2							1										3
SD	7		1	1	1		1	3		10			1		2			1		21
SD	8									1										1
SD	12						1			6										7
SD	34									1										1
SD	35									3			1							4
SD	37		1							1			1						3	6
SD	39								1	1										2
SD	40																		1	1
SD	41		1			2	2		1	12			1		1					20
SD	42				1		2		1	6								2		12
SD	59				17	7	32	1	1	47										105
SD	100					1	5	3		36				1				1		47
SD	101						1			1										2
SD	130			1	3	2	6		2	6								1		21
SD	153		1				5	1		12										19
	総計	1	70	19	252	183	460	111	146	864	15	23	52	1	5	1	3	18	29	2253



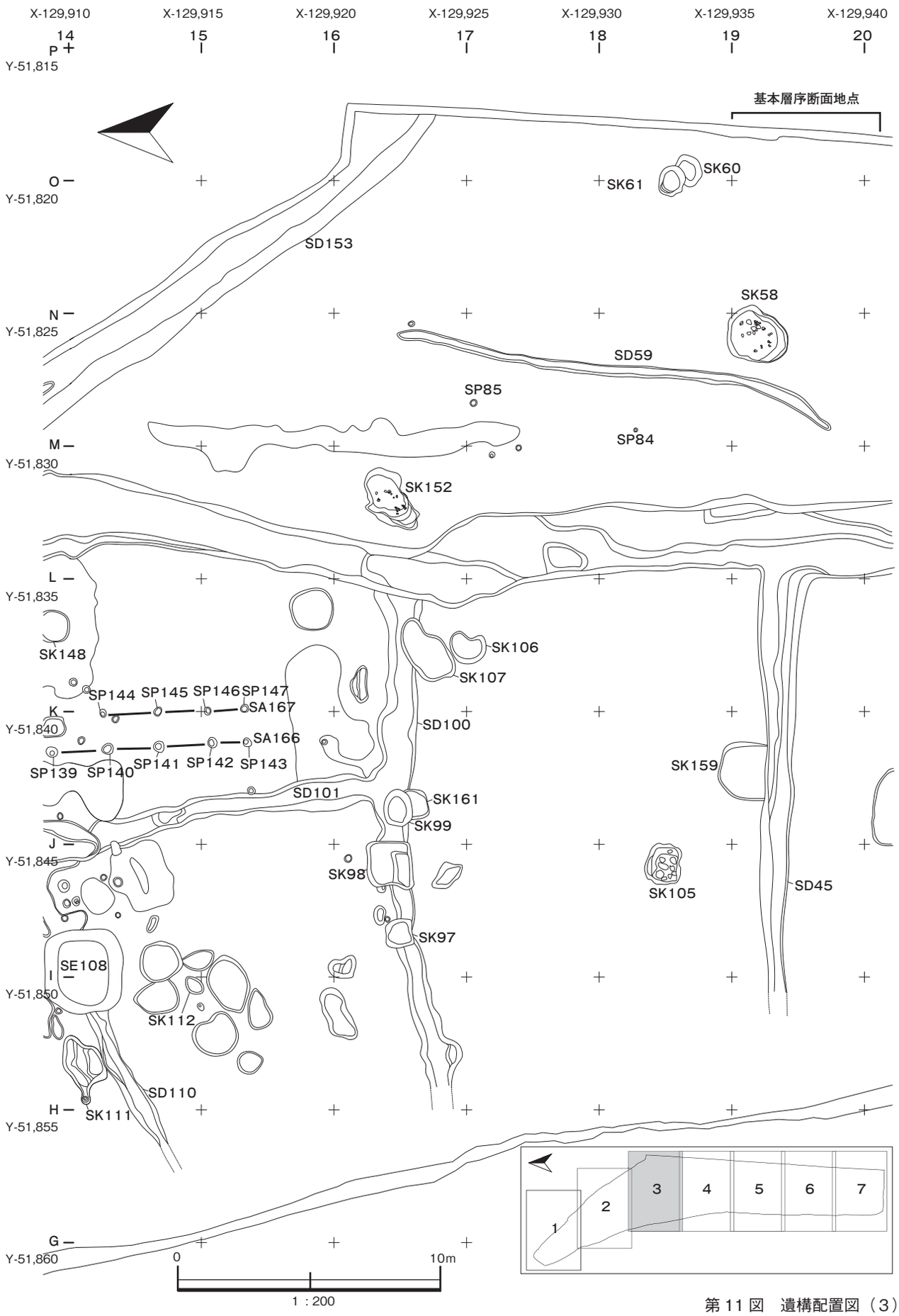
第８図　遺構配置図割付図


X-129,850
X-129,855
X-129,860
X-129,865
X-129,870
X-129,875
X-129,880
2
3
4
5
6
7
8
K
Y-51,840
J
Y-51,845
I
Y-51,850
H
Y-51,855
G
Y-51,860
F
Y-51,865
E
Y-51,870
D
Y-51,875
C
Y-51,880
B
Y-51,885
SX136
SX137
0
1 m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

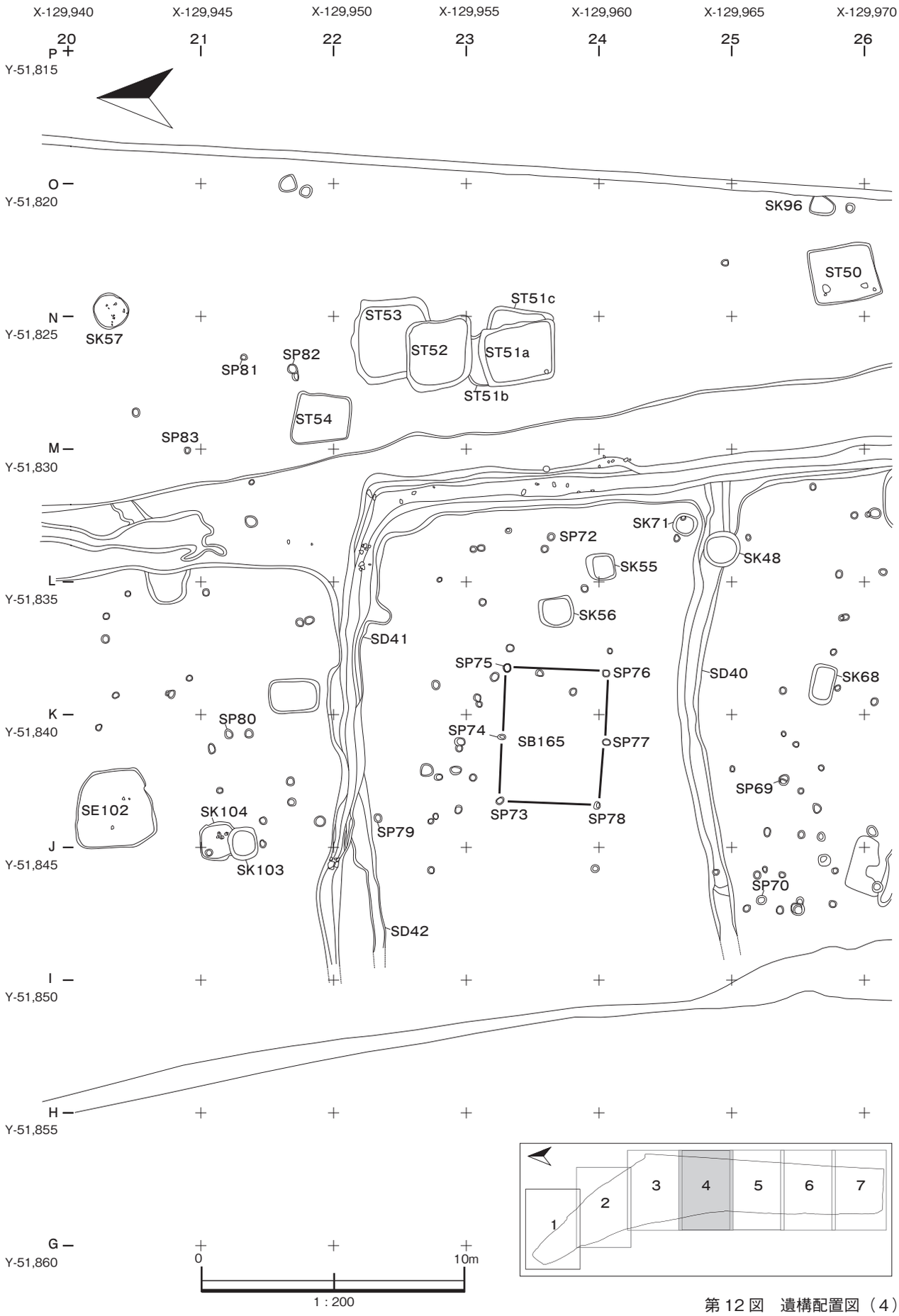
第９図　遺構配置図（１）


X-129,880
X-129,885
X-129,890
X-129,895
X-129,900
X-129,905
X-129,910
8
9
10
11
12
13
14
N
Y-51,825
M
Y-51,830
L
Y-51,835
K
Y-51,840
J
Y-51,845
I
Y-51,850
H
Y-51,855
G
Y-51,860
F
Y-51,865
E
Y-51,870
SK126
SK149
SK148
SP128
SP127
SK123
SK122
SK118
SP139
SK120
SX132
SX121
SK119
SK117
SK129
SK150
SK151
SK116
SE108
SK109
SK124
SK115
SK134
SK133
SK113
SK111
SD131
SK114
SP162
SD125
SD160
SD130
SP135
0
10m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

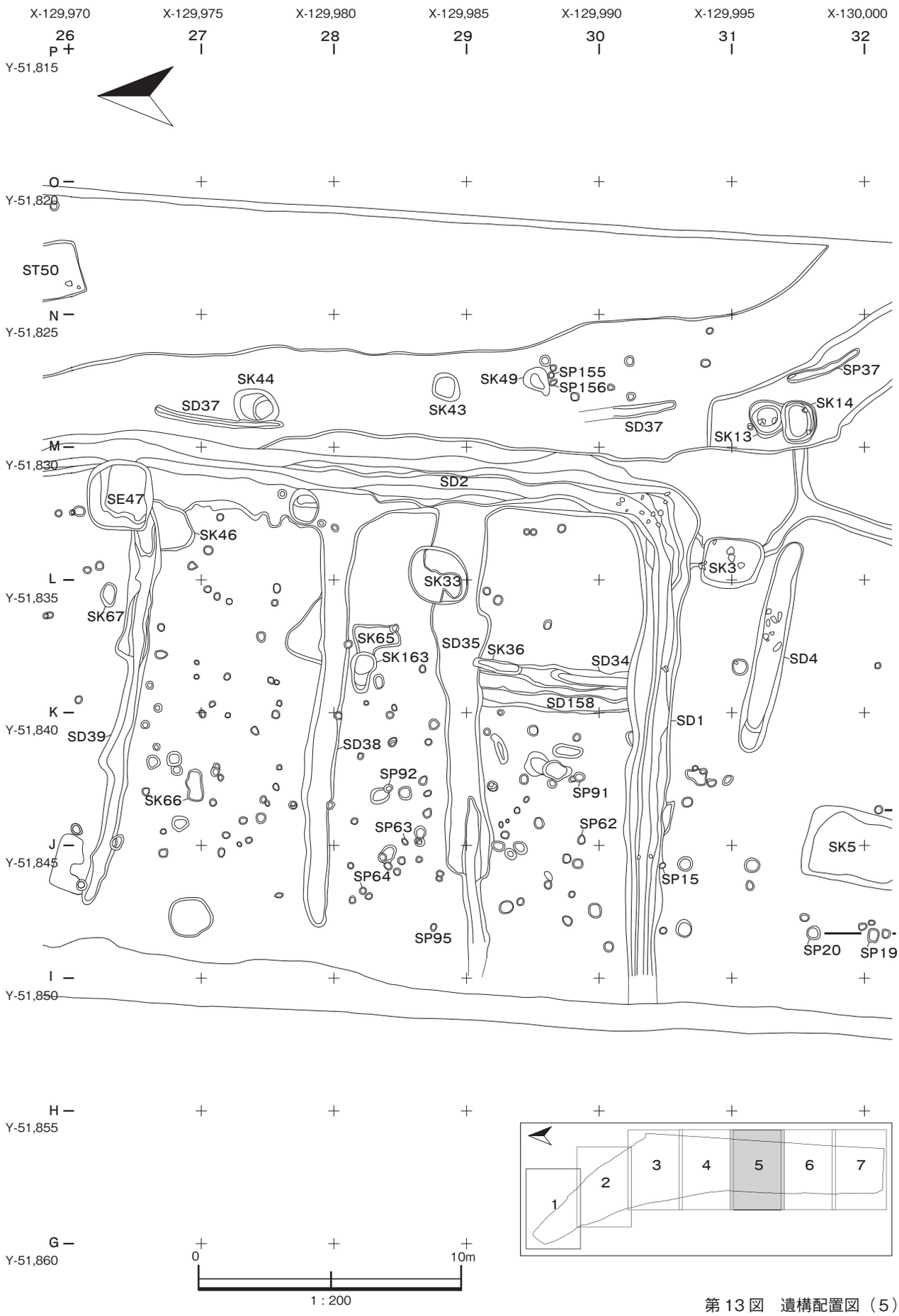
第 10 図　遺構配置図（2）


X-129,910
X-129,915
X-129,920
X-129,925
X-129,930
X-129,935
X-129,940
14
15
16
17
18
19
20
P
Y-51,815
O
Y-51,820
N
Y-51,825
M
Y-51,830
L
Y-51,835
K
Y-51,840
J
Y-51,845
I
Y-51,850
H
Y-51,855
G
Y-51,860
基本層序断面地点
SK60
SK61
SD153
SK58
SD59
SP85
SP84
SK152
SK148
SK106
SK107
SP144
SP145
SP146
SP147
SA167
SD100
SA166
SP139
SP140
SP141
SP142
SP143
SK159
SD101
SK161
SK99
SK98
SK105
SD45
SK97
SE108
SK112
SD110
SK111
0
10m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

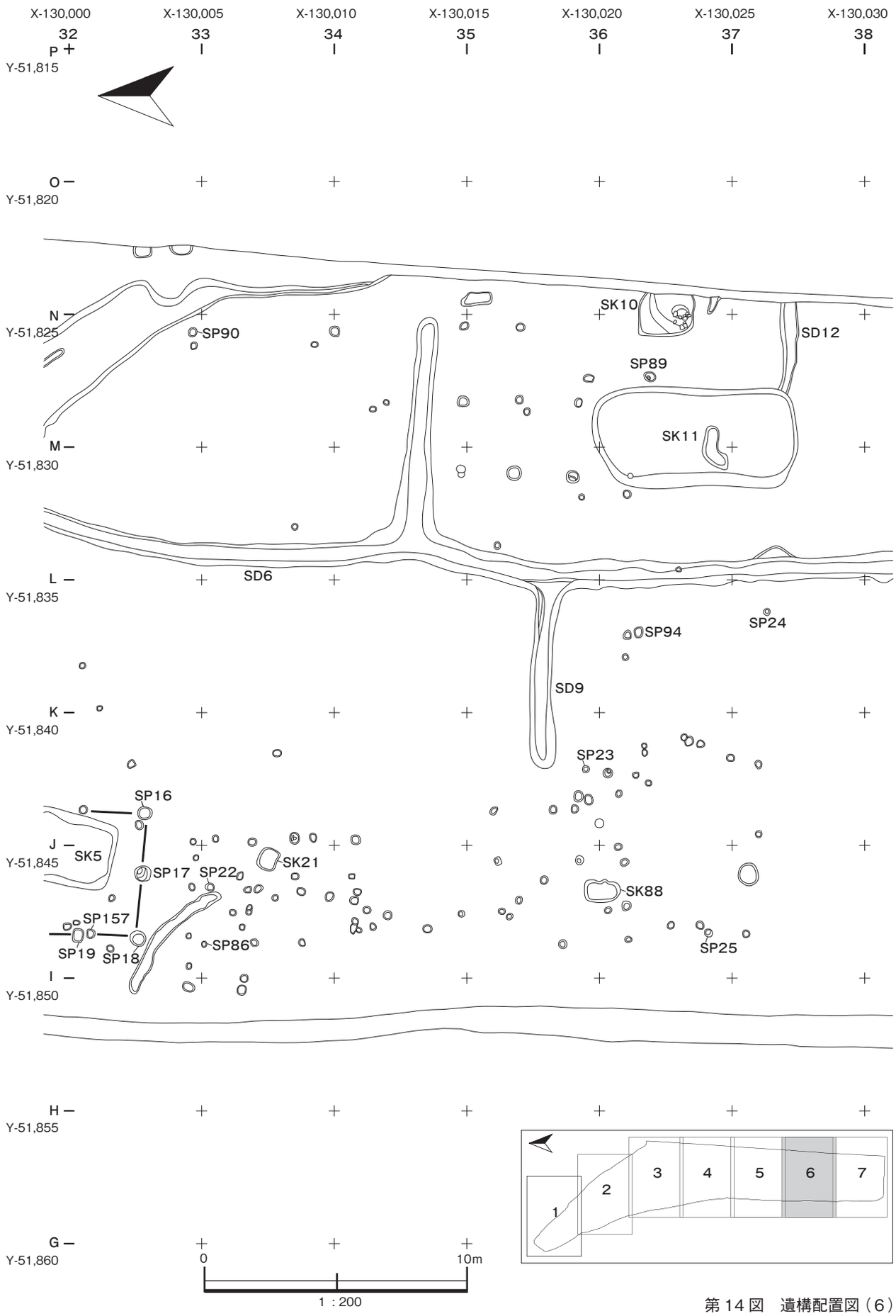
第 11 図　遺構配置図（3）


X-129,940
X-129,945
X-129,950
X-129,955
X-129,960
X-129,965
X-129,970
20
21
22
23
24
25
26
P
Y-51,815
O
Y-51,820
N
Y-51,825
M
Y-51,830
L
Y-51,835
K
Y-51,840
J
Y-51,845
I
Y-51,850
H
Y-51,855
G
Y-51,860
SK96
ST50
ST51c
ST53
ST52
ST51a
ST51b
SK57
SP81
SP82
ST54
SP83
SK71
SP72
SK55
SK48
SK56
SD41
SP75
SP76
SD40
SK68
SP80
SP74
SB165
SP77
SP69
SE102
SK104
SP73
SP78
SP79
SK103
SP70
SD42
0
10m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

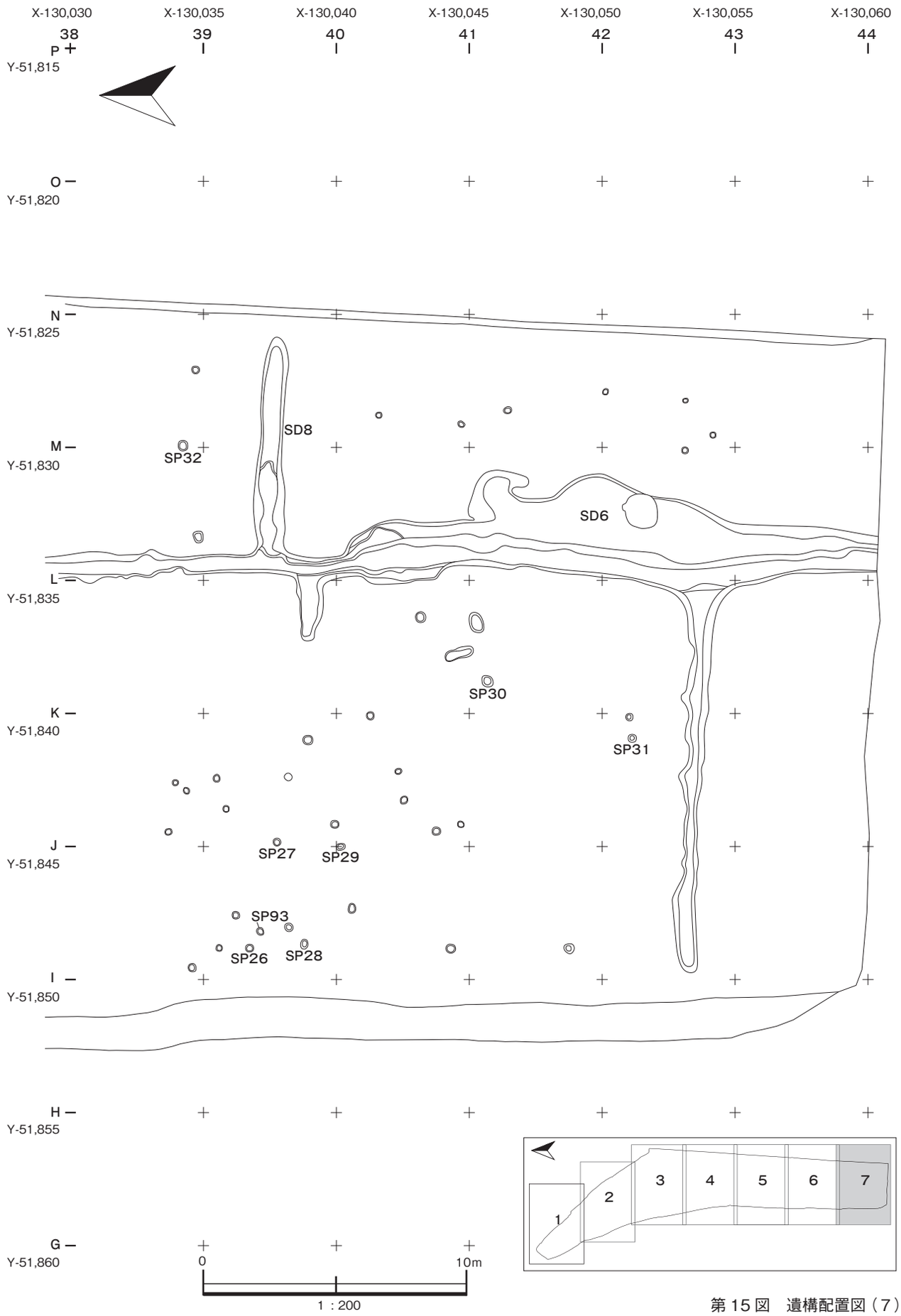
第 12 図　遺構配置図（4）


X-129,970
X-129,975
X-129,980
X-129,985
X-129,990
X-129,995
X-130,000
26
27
28
29
30
31
32
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
Y-51,815
Y-51,820
Y-51,825
Y-51,830
Y-51,835
Y-51,840
Y-51,845
Y-51,850
Y-51,855
Y-51,860
ST50
SK44
SD37
SK43
SK49
SP155
SP156
SD37
SP37
SK14
SK13
SD2
SE47
SK46
SK33
SK3
SK67
SK65
SK163
SD35
SK36
SD34
SD4
SD158
SD1
SD39
SD38
SP92
SP91
SK66
SP63
SP62
SK5
SP64
SP15
SP95
SP20
SP19
0
10m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

第 13 図　遺構配置図（5）


X-130,000
X-130,005
X-130,010
X-130,015
X-130,020
X-130,025
X-130,030
32
33
34
35
36
37
38
P
Y-51,815
O
Y-51,820
N
Y-51,825
M
Y-51,830
L
Y-51,835
K
Y-51,840
J
Y-51,845
I
Y-51,850
H
Y-51,855
G
Y-51,860
SP90
SK10
SD12
SP89
SK11
SD6
SP94
SP24
SD9
SP23
SP16
SK5
SP17
SP22
SK21
SK88
SP157
SP19
SP18
SP86
SP25
0
10m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

第 14 図　遺構配置図（6）


X-130,030
X-130,035
X-130,040
X-130,045
X-130,050
X-130,055
X-130,060
38
39
40
41
42
43
44
P
Y-51,815
O
Y-51,820
N
Y-51,825
M
Y-51,830
L
Y-51,835
K
Y-51,840
J
Y-51,845
I
Y-51,850
H
Y-51,855
G
Y-51,860
SD8
SD6
SP32
SP30
SP31
SP27
SP29
SP93
SP26
SP28
0
10m
1 : 200
1
2
3
4
5
6
7

第 15 図　遺構配置図（7）

Ⅲ　検出遺構

今回の調査では，竪穴建物跡、掘立柱建物跡、柱穴列、井戸跡、土坑、溝跡、ピット群などの多数の遺構が確認された。特に中央部、北側においては、竪穴建物跡や十和田ａ火山灰の堆積が認められる土坑などが検出されている。遺構番号は、当初の所見であった遺構の通しで付した登録番号を優先し、整理段階でもこれを踏襲した。以下に遺構の種別毎に概要を述べる。

1　竪穴建物跡

調査区中央部の東側において、重複するものを含め７棟を検出した。このうちの５棟は重複関係にあり、南北方向に連なって確認されたものである。７棟はいずれも一辺の長さが2.5～３ｍと小規模な造りで、方形もしくは幾分南北に長い長方形を呈している。各建物跡からは赤焼土器や黒色土器が出土するが、いずれも破片試料で少量である。以下に建物跡について記述する。

ＳＴ 50 竪穴建物跡（第16～17図、第47図）

調査区中央部Ｎ‐19グリッドに位置する。平面プランは方形で、壁面が垂直に立ち上がる箱形を呈する。覆土は黒褐色シルトの単層で、底面から赤焼土器甕の底部が１点出土している。

ＳＴ 51・52・53 竪穴建物跡（第16～17図、第47図）

調査区中央部の東側、Ｍ・Ｎ‐22・23グリッドに位置する。検出時は南北に連なる３棟の重複した建物跡と見なして登録した。土色等からは新旧関係が定かでなく、掘り下げ後の断面観察により判明したほか、南側のＳＴ51では床面までの深さや主軸方位が異なる別の建物跡２棟の存在が確認できた。このＳＴ51に関しては、精査時に出土遺物を重複の２棟と区別し得なかった観点から、新規の遺構番号を付さずにＳＴ51のａ～ｃとして採録した。切り合いは、①ＳＴ51ａが同ｂ・ｃを切るのと、②ＳＴ52がＳＴ51ｃ及びＳＴ53を切っていることが分かり、新旧関係ではＳＴ51ｂ・ＳＴ51ｃ・ＳＴ53→ＳＴ51ａ・ＳＴ52となる。このうちＳＴ51ｂ・ｃに関しては、新旧関係が不詳ながら明らかに重複しているため、これら５棟には最低３時期の変遷があるものと理解されるが、重複していない棟同士が同時存在した可能性については、近接した位置関係等から見て低いと思われる。遺物は、覆土中から赤焼土器や内黒処理の黒色土器片が少量出土する。ＳＴ53床面からは、赤焼土器甕の底部が１点出土している。各建物跡とも地山が床面となっており、床面や側壁に柱穴等の痕跡は認められない。検出面から床面までの深さはＳＴ51ａ・52・53がほぼ同様で約40㎝、ＳＴ51ｂ・ｃの２棟が20㎝内外を測った。

2　掘立柱建物跡・柱穴列

柱穴の配置状況から掘立柱建物跡として認識可能なＳＢ164・165の２棟と、近接して平行した列状の配置となるＳＡ166・167の２例を認めた。これらは各々が40ｍ程の距離を置いて、南北方向に配されるものである。

ＳＢ 164 掘立柱建物跡（第18図、第54図）

調査区南側のＩ・Ｊ‐31・32グリッド位置する。北東部においてＳＫ５と重なっており、これによって切られる重複関係がある。桁行・梁行とも二間規模の建物跡で、重複のため北東隅と北辺中間の柱穴が未検出となる。また総柱の建物と見なした場合、中央部の柱穴もＳＫ５との重複によって確認できない。規模は南辺桁行4.7ｍ・西辺梁行4.6ｍのほぼ正方形を呈し、柱間も等間隔に配されている。柱穴の掘り方は径約60㎝の略円形で、検出面からの深さが20㎝前後を測るものである。他の検出柱穴と比較して平面規模が大きいことや、二間構成の方形プラン等から察して、総柱構造の建物跡であったと考えられる。

ＳＢ 165 掘立柱建物跡（第19図）

ＳＢ165は調査区中央部のＪ・Ｋ‐23・24グリッドに位置する。桁行長5.0ｍ・梁行長3.7ｍの規模を測る東西棟の建物跡であり、面積は約18㎡を測る。桁行二間×梁行一間で構成され、桁行柱間は南・北辺とも西から2.4ｍと2.6ｍの距離を測り、中柱が若干西寄りに配されている。また、北辺の柱列は直線上で並ぶのに対し、南辺は中柱（ＳＰ77）が幾分外側へ片寄った配置

となる。各柱穴の掘り方規模はほぼ同様と見なされ、径30㎝前後の小規模な楕円形や隅丸方形を呈している。

ＳＡ 166・167 柱穴列（第 20 図）

ＳＡ 166・167 は平行する２列の柱穴列で、調査区北側のＪ‐13 ～ 15 グリッドで検出された。柱穴は磁北に沿った南北方向に並んでおり、西側に位置するＳＡ 166 が５基（ＳＰ 139 ～ 143）、東側のＳＡ 167 は４基（ＳＰ 144 ～ 147）の柱穴によって構成され、両柱列間は 1.2 ～ 1.3 ｍの幅で平行している。ＳＡ 166 の柱間距離は南から 1.3 ｍ・2.0 ｍ・1.9 ｍ・2.1 ｍ、ＳＡ 167 のそれは同じく 1.4 ｍ・1.9 ｍ・2.1 ｍを測り、それぞれの柱穴は概ね対応した位置関係にある。柱穴掘り方は径 30 ～ 50 ㎝の円形または楕円形を呈しているが、検出面からの深さは平面規模以上に差異が認められ、18 ～ 45 ㎝の範疇で掘り込まれる。

3　井　戸　跡

調査区の中央部、北半部において３基の井戸跡が確認された。このうち２基は、調査区の西側に位置している。いずれも確認面下２ｍ程で底面が確認され、井桁等の構造物は伴わない素掘りの井戸と推定される。

ＳＥ 102 井戸跡（第 21 図、第 47 図）

調査区西側Ｉ・Ｊ‐20 グリッドに位置する。平面プランは長辺 3.1 ｍ、短辺 2.9 ｍの方形を呈し、確認面からの深さは 2.1 ｍを測る。断面形は開口部が広く、ほぼ垂直に掘り下げられる逆台形を呈し、底面は平坦である。覆土は４層に分けられ、上層の炭化物を含む暗褐色シルトと、それより粒子の粗い暗褐色シルトが堆積する。遺物は、14 世紀頃に属すると考えられる瀬戸美濃産の尊式花瓶や瓦質焼成の擂鉢が出土する。井桁などが認められず、素掘りの井戸と想定される。所属時期は、中世以降に比定されると考えられる。

ＳＥ 108 井戸跡（第 21 図、第 47 図）

調査区西側Ｉ‐14 グリッドに位置する。北側の土坑ＳＫ 109 を掘り込む重複関係にある。平面プランは長辺 3.1 ｍ、短辺 2.9 ｍの方形を呈し、確認面からの深さは 2.1 ｍを測る。断面形は、壁面がほぼ垂直で、底面が平坦な箱形を呈する。覆土は４層に分けられ、上層の炭化物を含む黒褐色のシルトと下層の暗褐色シルトが堆積する。遺物は、須恵器甕や壺の底部、白磁皿の他、箸や下駄歯片などの木製品が４点出土している。所属時期は中世以降に比定されると考えられる。

4　土　　坑

検出した土坑は、撹乱で部分的な検出に留まるものを含め約 60 基を数える。調査区中央部に多く分布し、楕円形や方形の平面プランを呈した比較的浅いものが大半を占める。出土遺物や火山灰の堆積から、時期は平安時代前期～後期と中世の２時期に所属すると考えられる。以下に概略を記す。

ＳＫ３土坑（第 32 図、第 33 図）

調査区南半部Ｌ‐31 に位置し、溝跡ＳＤ６を掘り込む重複関係にある。平面プランは長辺 2.2 ｍ、短辺 0.9 ｍの方形を呈し、確認面からの深さは 30 ㎝を測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面は平坦な逆台形を呈する。覆土は３層に分けられ、中位の層で人頭大の石が出土する。覆土から赤焼土器片１点が出土しているが、所属時期は不明である。

ＳＫ５土坑（第 22 図）

調査区南半部Ｊ‐32 に位置し、ＳＢ 164 建物跡の北東部と重複する。平面プランは長辺 4.1 ｍ、短辺 2.2 ｍの南北方向に広がる長方形を呈する。確認面からの深さは 55 ㎝を測る。断面形は壁面が急に立ち上がり、底面がほぼ平坦な逆台形を呈する。覆土は 10 層に分けられ、中位の層で炭化した灰を筋状に含む黒色シルトの堆積が確認される。覆土から赤焼土器片１点が出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 10 土坑（第 23 図）

調査区南半部のＭ・Ｎ‐35 グリッドに位置し、遺構東半部は調査区外へ延びている。平面プランは長径 2.1 ｍ、短径 1.6 ｍを測り、南西側が張り出す不整形を呈する。確認面からの深さは５～ 20 ㎝を測り、若干凹凸な底面である。一段落ち込む面から拳大～人頭大の石が認められたが、集石の配置に規則性は見受けられず、土坑内に廃棄されたものと推定される。遺物は、落ち込みから赤焼土器片が数点出土する。所属時期は不明である。

ＳＫ 13・14 土坑（第 23 図、第 48 図）

調査区南半部Ｍ‐31 グリッドに位置する。後に掘り込まれた土坑ＳＫ 13 と重複関係にある。平面プランは双方とも径 1.2 ～ 1.5 ｍの楕円形を呈し、確認面からの

深さは40～50㎝を測る。断面形はＳＫ13では、壁面が急に立ち上がり、中位で段を形成する。ＳＫ14は、壁面が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状を呈する。覆土は３層に分けられ、上層の黒褐色シルトと下層の褐色シルトが堆積する。双方とも中位の層から人頭大の石が出土するが、廃棄時に投げ込まれたと考えられる。遺物は、ＳＫ14から廃棄された石と共に須恵器系陶器２点が出土している。所属時期はＳＫ14が平安時代以降、ＳＫ13はそれ以降と考えられる。

ＳＫ21土坑（第23図）

Ｉ-31グリッドに位置する。平面プランは長辺85㎝、短辺80㎝の方形を呈し、確認面からの深さは20㎝を測る。断面形は、壁面が急に立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は２層に分けられ、上層の暗褐色シルト層と下層の褐色シルト層が堆積する。遺物は、赤焼土器有台坏の底部が１点出土する。所属時期は平安時代以降に比定される。

ＳＫ36土坑（第24図、第56図）

調査区南半部のＫ-36グリッドに位置する。溝跡ＳＤ34から掘り込まれる重複関係がある。平面プランは長辺1.9ｍ、短辺0.5ｍの南北軸に延びる長方形を呈する。別遺構が重複するため、正確な深さは不明確である。壁面が急に立ち上がり、底面が平坦な逆台形の断面形を呈する。覆土は黒褐色シルトの単層で、石器が１点出土するが、流れ込みに伴うものよると推定される。所属時期は不明である。

ＳＫ43土坑（第24図）

調査区南半部のＭ-28グリッドに位置する。平面プランは長辺1.2ｍ、短辺1.0ｍを測り、南西方向に張り出す方形を呈する。確認面からの深さは10㎝で、壁面が緩やかに立ち上がる逆台形の断面形を呈する。覆土は、炭化物を含む黒褐色シルトの単層である。遺物の出土は無く、所属時期は不明である。

ＳＫ44土坑（第24図）

調査区中央Ｍ-27グリッドに位置する。近代の暗渠と推定される溝跡ＳＤ37に掘り込まれる重複関係がある。平面プランは長辺1.8ｍ、短辺1.2ｍの南北軸に延びる楕円形を呈し、確認面からの深さは約50㎝を測る。断面形は、開口部に向かって広がる逆台形を呈し、壁面途中で段を形成する。覆土は６層に分けられ、上面から赤焼土器片が１点出土している。所属時期については不明である。

ＳＫ48土坑（第24図、第48図）

調査区Ｌ-24グリッドに位置する。平面プランは径1.3～1.4ｍの円形を呈し、確認面からの深さは50㎝を測る。断面形は、壁面が垂直に立ち上がる円筒形を呈する。覆土は、炭化物を含む黒褐色シルトの単層である。遺物は、下層から瀬戸美濃産の筒形香炉と須恵器系陶器が出土している。下層出土の炭化材は、分析の結果13世紀後半から14世紀後半とされる。所属時期は中世以降に比定される。

ＳＫ49土坑（第24図）

調査区Ｍ-29グリッドに位置する。平面プランは長辺1.2ｍ、短辺0.8ｍの不整形を呈し、確認面からの深さは20㎝を測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。上面から赤焼土器片が数点出土しているが、所属時期は不明である。

ＳＫ55土坑（第25図、第48図）

調査区中央部Ｌ-24グリッドに位置する。平面プランは長辺1.1ｍ、短辺1.0ｍの方形を呈し、確認面からの深さは30㎝を測る。断面形は、壁面が垂直に立ち上がる箱形を呈する。覆土は炭化物を含む黒褐色シルトの単層で、赤焼土器の有台坏が出土している。所属時期は平安時代以降と考えられる。

ＳＫ56土坑（第25図）

調査区中央部Ｋ-23グリッドに位置する。平面プランは長辺1.3ｍ、短辺1.2ｍの方形を呈し、確認面からの深さは20㎝を測る。断面形は、壁面が垂直に立ち上がる箱形を呈する。覆土は２層に分けられ、上層の黒褐色シルトから須恵器、赤焼土器片が数点出土する。所属時期は、平安時代以降と考えられる。

ＳＫ57土坑（第25図、第48図）

調査区中央部の東側Ｎ-20グリッドに位置する。平成19年度の試掘調査時に確認された土坑である。遺構周辺からは赤焼土器をはじめ、遺物が多量に出土している。平面プランは径1.3～1.4ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20㎝と浅い。断面形は壁面が垂直に立ち上がり、底面が平坦な円筒状を呈する。覆土は概ね３層に分けられ、上層では十和田ａ火山灰の堆積が認められる。遺物は火山灰と共に赤焼土器の坏類、黒色土器が多

く出土する。所属時期は、遺物や十和田ａ火山灰の堆積から平安時代前期と推定される。

ＳＫ 58 土坑（第 25 図、第 49 図）

調査区中央部の東側Ｍ・Ｎ‐19 グリッドに位置する。平成 19 年度の試掘調査時に確認された土坑である。遺構周辺からは赤焼土器をはじめとする遺物が多量に出土している。平面プランは径 2.1 ～ 2.3 ｍの、南北軸に張り出す楕円形を呈する。確認面からの深さは 30 ㎝を測る。断面形は急角度で壁面が立ち上がるが、南半部で階段状の段を形成する。底面はほぼ平坦である。覆土は大概４層に分けられ、前述した段の形成面において十和田ａ火山灰がレンズ状に堆積する。また土坑の廃棄時に投げ込まれたと考えられる人頭大の石が数点認められる。火山灰堆積下の黄褐色シルト層では、炭化物と少量の遺物を含む。遺物は、火山灰と共に多量に出土している。大半は赤焼土器の坏類が占め、他に硯に転用された須恵器壺の底部が出土している。所属時期は、遺物や十和田ａ火山灰の堆積から平安時代前期と推定される。

ＳＫ 60・61 土坑（第 26 図、第 50 図）

調査区中央部の東側Ｏ‐26 グリッドに位置する。後に掘り込まれた土坑ＳＫ 61 と重複関係にある。平面プランは双方とも径 1.0 ～ 1.3 ｍの楕円形を呈している。確認面からの深さは 25 ～ 30 ㎝である。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面は弧を描くレンズ状を呈する。覆土は、上面の黄褐色シルトと下層の褐色シルトが堆積している。遺物はＳＫ 60 の覆土中から須恵器甕、ＳＫ 61 からは青磁碗と須恵器系陶器の擂鉢の破片が出土している。所属時期は、出土遺物からＳＫ 60 が平安時代以降に、ＳＫ 61 が中世以降に比定される。

ＳＫ 65 土坑（第 26 図）

調査区中央部の西側Ｋ‐28 グリッドに位置する。平面プランは長辺 1.8 ｍ、短辺 1.0 ｍで長方形を呈する。北西側がやや張り出すがＳＫ 168 に掘り込まれ不明確である。確認面からの深さは 20 ㎝を測る。断面形は緩やかに立ち上がり、底面がほぼ平坦な逆台形を呈する。下層の中央部では焼土の混入が認められる。上面から赤焼土器片が１点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 66 土坑（第 26 図）

調査区中央部の西側Ｊ‐26 グリッドに位置する。平面プランは長辺 1.2 ｍ、短辺 0.6 ｍの長方形を呈する。確認面からの深さは 15 ㎝と浅い。断面形は緩やかに立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。遺物は上面から須恵器甕片が２点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 67 土坑（第 26 図）

調査区北半部の西側Ｋ‐28 グリッドに位置する。長軸 93 ㎝、短軸 50 ㎝の楕円形を呈し、確認面からの深さは約３㎝と浅い。底面はほぼ平坦を呈する。遺物は、覆土から須恵器系陶器の甕片が１点出土している。

ＳＫ 68 土坑（第 26 図、第 50 図）

調査区中央部のＫ‐25 グリッドに位置する。平面プランは長軸 1.5 ｍ、短軸 0.9 ｍの東西軸にやや張り出す長方形を呈する。確認面からの深さは 30 ㎝で、底面は平坦である。覆土は砂質の強い黄褐色シルトの単層である。砥石が１点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 97 土坑（第 41 図）

調査区北半部のＩ‐16 グリッドに位置する。溝跡ＳＤ 101 を掘り込む重複関係がある。平面プランは一辺 90 ㎝の方形を呈する。確認面からの深さは 40 ㎝で底面は平坦である。上層の黄褐色シルトから赤焼土器片が数点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 99 土坑（第 41 図）

調査区北半部のＪ－16 グリッドに位置する。溝跡ＳＤ 100 と土坑ＳＫ 161 を掘り込む重複関係にある。平面プランは長軸 1.4 ｍ、短軸 1.0 ｍの東西方向に張り出す楕円形を呈する。確認面からの深さは 40 ㎝である。覆土は２層に分けられ、下層では酸化鉄を多く含んでいる。遺物は、上面で赤焼土器片が数点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 103・104 土坑（第 27 図）

調査区北半部のＪ‐21 グリッドに位置する。後に掘り込まれた土坑ＳＫ 103 と重複している。平面プランは双方ともに一辺 1.8 ｍ～ 2.0 ｍ規模の方形を呈し、確認面からの深さは 10 ～ 30 ㎝である。ＳＫ 104 は壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱形状の断面形で、底面は平坦である。ＳＫ 103 の上層では、人頭大の石が数点確認されるが、集石等の規則性は認められず、土坑廃棄時に伴うものと推定される。遺物は、覆土中から赤焼土器が少量出土している。所属時期は、平安時代以降に比定される。

ＳＫ 105 土坑（第 27 図、第 50 図）

調査区北半部のＪ‐18 グリッドに位置する。平面プ

ランは長辺 1.6 m、短辺 1.2 mの方形を呈する。確認面からの深さは 60 ㎝である。断面形は開口部に向かって広がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は暗褐色シルトの単層で、層の中位には、土坑の廃棄時に投げ込まれたと考えられる人頭大の石が確認される。遺物は、下層から瓦質焼成の擂鉢や砥石が出土している。所属時期は中世以降に比定される。

ＳＫ 111 土坑（第 27 図）

調査区北半部のＨ - 14 グリッドに位置する。南側で溝跡ＳＤ 110 に切られる重複関係がある。平面プランは長軸 2.2 m、短軸 1.5 mの東西端が張り出す不整形を呈する。確認面からの深さは約 20 ㎝である。断面形は壁面の途中で段を有しながら、緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。覆土は黒褐色シルトの単層で、酸化鉄を多く含む。上面から赤焼土器片が数点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 114 土坑（第 27 図）

調査区北半部のＨ - 13 グリッドに位置する。平面プランは長軸 2.4 m、短軸 1.15 mの楕円形を呈する。確認面からの深さ 20 ㎝である。断面形は緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。堆積層は２層に分けられ、全体的に酸化鉄と炭化物を含んでいる。覆土から赤焼土器片が数点出土している。所属時期は平安時代以降に比定される。

ＳＫ 115 土坑（第 30 図）

調査区北半部のＨ - 12 グリッドに位置する。平面プランは長辺 1.8 m、短辺 1.3 mの長方形を呈する。確認面からの深さは 30 ㎝である。断面形は緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。覆土は３層に分けられ、全体的に酸化鉄と炭化物を含んでいる。遺物は２層の暗褐色シルト層から赤焼土器片と黒色土器の有台坏底部が出土している。所属時期については平安時代以降に比定される。

ＳＫ 116 土坑（第 30 図）

調査区北半部のＩ - 12 グリッドに位置する。平面プランは長軸 1.7 m、短軸１mの南西方向へ張り出す不整形を呈する。確認面からの深さは 20 ㎝である。断面形は緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。覆土は２層に分けられ、上層の黒褐色シルト層では全体的に炭化物を含んでいる。上面から赤焼土器片が数点出土しているが、所属時期については不明である。

ＳＫ 117 土坑（第 28 図）

調査区北半部のＪ - 13 グリッドに位置する。平面プランは長辺 1.4 m、短辺 0.8 mの長方形を呈する。確認面からの深さは 10 ～ 15 ㎝である。断面形は緩やかに立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。上面から赤焼土器と黒色土器片が数点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 118 土坑（第 28 図）

調査区北半部のＪ - 13 グリッドに位置する。平面プランは長辺 1.4 m、短辺 0.9 mの方形を呈する。確認面からの深さは 18 ㎝である。断面形は緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。東側で掘り込みが認められるが、底面はほぼ平坦である。遺物は上層で赤焼土器片が数点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＫ 124 土坑（第 30 図）

調査区北半部のＩ - 11 グリッドに位置する。溝跡ＳＤ 125 を掘り込む重複関係がある。平面プランは径１～ 1.2 mの円形を呈し、確認面からの深さは 25 ～ 30 ㎝を測る。遺物の出土は無い。所属時期は不明である。

ＳＫ 126 土坑（第 28 図、第 50 図）

調査区北半部のＬ - 13 グリッドに位置する。平面プランは長辺 1.5 m、短辺 1.4 mを測る方形を呈する。確認面からの深さは約 20 ㎝を測る。断面形は緩やかに立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は２層に分けられる。上面の黒褐色シルト層からは黒色土器の有台坏片の他、赤焼土器片が多くが出土している。所属時期については平安時代以降と比定される。

ＳＫ 129 土坑（第 28 図）

調査区北半部のＩ - 12 グリッドに位置する。平面プランは長軸１m、短軸 0.9 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 30 ～ 40 ㎝を測る。断面形は開口部に向かって広がる逆台形を呈する。覆土は炭化物を含む黒褐色シルト層の単層で、赤焼土器片が数点出土する。所属時期は平安時代以降と比定される。

ＳＫ 133 土坑（第 29 図）

調査区北半部の東側Ｈ - ８グリッドに位置し、溝跡ＳＤ 160 を掘り込む重複関係にある。平面プランは長軸 2.5 m、短軸 1.5 mの不整形を呈し、確認面からの深さは約 40 ㎝を測る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状を呈する。覆土は５層に分けられる

が、大概は上面の黒褐色シルト層とそれより粒子の粗い下層の暗褐色砂層が占める。遺物は、上面で赤焼土器、黒色土器の小片、２層から須恵器甕片が出土する。所属時期は平安時代以降と考えられる。

ＳＫ 134 土坑（第 29 図、第 50 ～ 52 図）

調査区北半部の東側Ｇ‐８～Ｈ‐８グリッドに位置し、溝跡ＳＤ 160 を掘り込む重複関係にある。平面プランは長軸 2.2 ｍ、短軸 1.8 ｍの不整形を呈する。確認面からの深さは１ｍを測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面は平坦な逆台形を呈する。覆土は６層に分けられ、上層の暗褐色シルトと粒子の粗い下層の暗褐色砂層が堆積する。中位の２・３層からは、人頭大の石が多く認められ、土坑の廃棄時に投げ込まれたものと考えられる。この層では遺物が多く出土し、特に須恵器甕片の出土が目立つ。しかし全体の形にまで復元できるものはなく、数個体の甕片が流れ込んでいるとみられる。遺構の性格については、井戸跡の可能性も考えられる。所属時期は平安時代以降と考えられる。

ＳＫ 148 土坑（第 28 図、第 56 図）

調査区北半部のＫ‐13 グリッドに位置する。平面プランは径 1.2 ～ 1.22 ｍの円形を呈する。確認面からの深さは 15 ㎝を測る。断面形は壁面が垂直に立ち上がり、底面が平坦な箱形を呈する。覆土は３層に分けられ、２層の褐色シルトから北宋銭の皇宋通寶が２枚出土している。所属時期は中世以降と考えられる。

ＳＫ 150 土坑（第 28 図）

調査区北半部Ｉ‐12 グリッドに位置する。平面プランは長軸 1.7 ｍ、短軸１ｍの長方形を呈する。確認面からの深さは 35 ～ 40 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がるＵ字形を呈する。覆土は２層に分けられ、全体的に炭化物を多く含んでいる。遺物は、覆土中から赤焼土器片が数点出土している。所属時期は平安時代以降と比定される。

ＳＫ 151 土坑（第 30 図）

調査区北半部の東端部にＩ‐８グリッドに位置する。遺構の東半部が撹乱により掘り込まれているが、平面プランは長軸 2.5 ｍ、短軸 1.4 ｍの方形を呈すると考えられる。断面は壁面で垂直に立ち上がり、底面が平坦な箱形を呈すると推定される。確認面からの深さは約 30 ㎝を測る。覆土は３層に分けられ、２層の黒褐色シルト層から炭化物と共に赤焼土器、黒色土器が少量出土する。所属時期は平安時代以降に比定される。

ＳＫ 152 土坑（第 31 図、第 53 ～ 54 図）

調査区中央部の東側Ｎ‐16 グリッドに位置する。遺構周辺からは赤焼土器をはじめ、遺物が多量に出土している。平面プランは長軸 2.7 ｍ、短軸 1.4 ｍの東西軸に張り出す不整形を呈し、確認面からの深さは約 30 ㎝を測る。断面形は開口部に向かって緩やかに立ち上がり、壁面途中で段を形成する。底面は若干の凹凸があるが平坦である。覆土は大概３層に分けられ、下層から暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐色シルトの順に堆積している。十和田ａ火山灰の堆積は２層に顕著に認められ、前述した壁面の段が形成される面にレンズ状に堆積している。遺物は火山灰の堆積と共に、赤焼土器が多量に出土する。火山灰下層の３層からも赤焼土器の有台坏などが一定量出土している。所属時期は、出土遺物や十和田ａ火山灰の堆積から平安時代前期に比定される。

5　溝　　跡

今回の調査で検出された溝跡は約 20 条である。しかし畑や水田の用水路跡など、近年まで使用していたものも含まれていると考えられる。ここでは、主に近世までに廃絶した遺構を扱い、考察できる範囲で述べたい。また、調査区西側に位置する東西方向に延びる溝については、柱穴等の遺構の分布状況を考慮すると区画溝の可能性も窺える。以下に概略を記す。

ＳＤ１・２溝跡（第 32 ～ 34 図、第 45 図）

調査区中央部Ｉ‐30 ～Ｌ‐30 に位置する。調査区の中央部を通る溝である。南北軸に長く延びるが、南北端で西方向へ直角に屈曲するコの字状の広がりをみせる。検出規模は全体長で約 76 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へ延びている。幅は最大で約 1.7 ｍ、深さは最深部で約１ｍを測る。遺構の表記は、調査時の登録に従い、南側のＬ‐30 グリッドから東西軸に延びるＳＤ１、北側のＬ‐22 グリッドから東西軸へ延びるＳＤ 41 とし、南北軸に延びる範囲をＳＤ２と細分したが、同一の溝跡であると考えられる。ここでは南半域の溝跡ＳＤ１・２について記述し、北半域の溝跡ＳＤ 41･42 は別項で記す。溝跡ＳＤ１は、前述したとおり東西軸に延びる範囲にあたり、屈曲してからの長さは 18 ｍ以上を測る。幅は 1.2

～ 1.6 m、深さは約 80 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦な逆台形や弧を描くＵ字状を呈する。覆土は 10 層に分けられ、上層の暗褐色シルトと下層の黄褐色シルトが堆積する。遺物は、上面から砥石が１点出土している。一方で南北軸へ長く延びる溝跡ＳＤ２は、長さ約 40 m、最大幅 1.7 m、最深部で約１ｍを測る。一部が近代暗渠により掘り込まれる。断面は壁面途中の段から一段と落ち込み、底面が平坦もしくは弧を描くＵ字状を呈する。覆土は３層に分けられ、上層の褐灰色粘土と下層の灰色粘土が堆積する。ＳＤ１と接する屈曲部では、人頭大の石が多く投げ入れられている。遺物は２層から須恵器、須恵器系陶器、陶磁器が出土している。所属時期は中世以降と考えられる。

ＳＤ４溝跡（第 32 ～ 33 図、第 45 図）

調査区南半部のＪ‐31 ～Ｌ‐31 に位置する。北に隣接する溝跡ＳＤ１と平行し、東西軸に直線的に延びる溝跡である。検出規模は長さ約 8.0 m、幅 1.2 m、確認面からの深さは 30 ～ 40 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は４層に分かれ、暗黄褐色シルトとそれより粒子の細かい灰黄褐色シルト層の順で堆積する。４層では、人頭大の石が数点確認され、溝の廃棄時に投げ入れたものと考えられる。遺物は底面から須恵器甕片が２点出土している。所属時期は平安時代以降と比定される。

ＳＤ６溝跡（第 35 ～ 36 図）

調査区南端部から調査区中央部のＬ‐32 に位置する。調査区中央を南北方向に直線的に通る溝である。調査区内での長さは約 16 ｍを測るが、さらに南側の調査区外へと延びている。幅は 0.7 ～ 1.4 m、確認面からの深さは 40 ～ 60 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は３層に分かれ、黄橙色シルトと砂を含む黄橙色シルトの順に堆積する。下層では酸化鉄の沈殿が目立つ。遺物は上面で赤焼土器の小片が出土するが、覆土中からの出土は無い。この溝跡と同一と考えられる溝跡ＳＤ８・９も同様に遺物の出土は無く、所属時期の詳細は不明である。しかし、地割図の記載から最近まで用いられた水路跡の可能性が高い。

ＳＤ 34 溝跡（第 37 図）

調査区南半部のＫ‐29 に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝跡である。溝跡ＳＤ１・ＳＤ 35 に切られ、土坑ＳＫ 36 を掘り込む重複関係にある。検出規模は残存長で約 5.6 ｍを測る。幅は 60 ～ 75 ㎝、確認面からの深さは約 30 ㎝を測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面はＵ字状を呈する。覆土は３層に分かれ、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、黒褐色シルトの順に堆積する。遺物は上面で赤焼土器が出土するが、所属時期は不明である。

ＳＤ 35 溝跡（第 37 図）

調査区南半部のＩ‐29 ～Ｋ‐29 に位置する。西から東側へ直線的に延び、東側で溝跡ＳＤ２と交差する。溝跡ＳＤ 34・ＳＤ 158 を掘り込む重複関係にある。調査区内での長さは約 17 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へと延びる。幅は 60 ㎝～ 180 ㎝、確認面からの深さは約 18 ㎝を測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は黒褐色シルトの単層で、炭化物を粒子状に含む。遺物は、下層から赤焼土器無台坏の底部が１点出土している。所属時期は平安時代以降と比定される。

ＳＤ 38 溝跡（第 38 図）

調査区中央部のＩ‐27 ～Ｌ‐27 に位置する。西から東側へ直線的に延び、東側で溝跡ＳＤ２と交差する。検出規模は長さ約 15 m、幅約 1.0 ～ 1.2 m、確認面からの深さは 30 ～ 40 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面は平坦な逆台形を呈する。覆土は２層に分かれ、上層の黄褐色シルトと下層の褐色砂が堆積する。遺物の出土は無く、所属時期は不明である。

ＳＤ 39 溝跡（第 38 図、第 45 図）

調査区中央部のＩ‐26 ～Ｌ‐26 に位置する。西から東側へ直線的に延び、東側で溝跡ＳＤ２と交差する。井戸跡ＳＥ 47 に切られ、土坑ＳＫ 46 を掘り込む重複関係にある。検出規模は長さ約 15 m、幅約 60 ㎝～ 100 ㎝、確認面からの深さは約 40 ㎝を測る。壁面の中位で段を形成し、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は２層に分かれ、上層の黄褐色シルトと下層の褐色砂が堆積する。遺物は、２層から赤焼土器の甕もしくは鉢の底部が１点出土するが、所属時期は不明である。

ＳＤ 40 溝跡（第 39 図、第 45 図）

調査区中央部のＩ‐24 ～Ｌ‐24 に位置する。西から東側へ直線的に延び、東側で溝跡ＳＤ２と交差する。土

坑ＳＫ 48 に切られる重複関係にある。調査区内での長さは約 16 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へと延びる。幅 70 ～ 90 ㎝、確認面からの深さは約 20 ㎝以上を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦な逆台形や弧を描くＵ字状を呈する。覆土は２層に分かれ､上層の黄褐色シルトと下層の褐色シルトが堆積する。遺物は２層から土錘と推定される土製品が１点出土するが、所属時期の詳細は不明である。また、溝跡ＳＤ 41・42 と共に、掘立柱建物跡ＳＢ 165 を囲む区画溝の可能性も考えられる。

ＳＤ 41・42 溝跡（第 29 図、第 46 図）

前述した溝ＳＤ１・２と同一の溝跡で、調査区中央部のＩ‐22 ～Ｌ‐22 に位置する。溝跡ＳＤ 42 を掘り込む重複関係がある。南北軸に延びる溝跡ＳＤ２から西側に屈曲し、東西軸に延びる範囲にあたる。屈曲部からの長さは約 15 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へと延びる。幅 0.6 ｍ～ 1.2 ｍ、深さは最深部で 55 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が弧を描くＵ字状となる。覆土は 10 層に分かれ、上層の暗褐色シルトと下層の黒褐色シルトが堆積する。遺物は下層から見込みに蓮花の印刻がある青磁碗の底部が１点が出土している。所属時期は中世以降と考えられる。また、溝跡ＳＤ 40 と共に、掘立柱建物跡ＳＢ 165 を囲む区画溝の可能性も考えられる。

ＳＤ 45 溝跡（第 39 図）

調査区中央部のＩ‐19 ～Ｌ‐19 に位置する。西から東側へ直線的に延び、東側で溝跡ＳＤ２と交差する。土坑ＳＫ 159 を切る重複関係にある。調査区内での長さは 16 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へと延びている。幅 0.6 ｍ～１ｍ､確認面からの深さは約 40 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈する。覆土は２層に分かれ、上層の黒褐色シルトと下層の黒褐色シルトが堆積する。遺物の出土は無く、所属時期は不明である。

ＳＤ 100・101 溝跡（第 41 図、第 46 図）

調査区北半部のＩ‐16 ～Ｌ‐22 に位置する。東西軸に延びるが、中央部で北側に屈曲して延びている。遺構の表記は調査時の登録に従い、東西軸に延びるＳＤ 100、南北軸に延びる範囲をＳＤ 101 と細分したが、同一の溝跡である。ここでは溝跡ＳＤ 100 について記述する。調査区内の長さは 15 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へ延びる。幅 60 ㎝～ 120 ㎝、深さは最深部で 40 ㎝を測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面がＵ字状を呈する。覆土は３層に分けられ、全体的に酸化鉄に富む砂層である。遺物は黒色土器・須恵器系陶器が出土する。所属時期は中世以降に比定される。

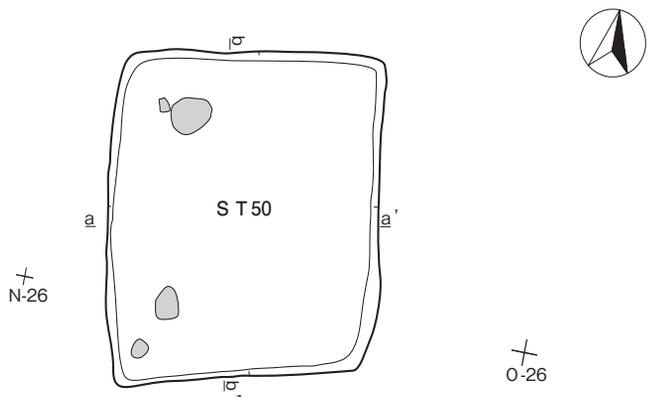
ＳＤ 130・131 溝跡（第 42 図、第 46 図）

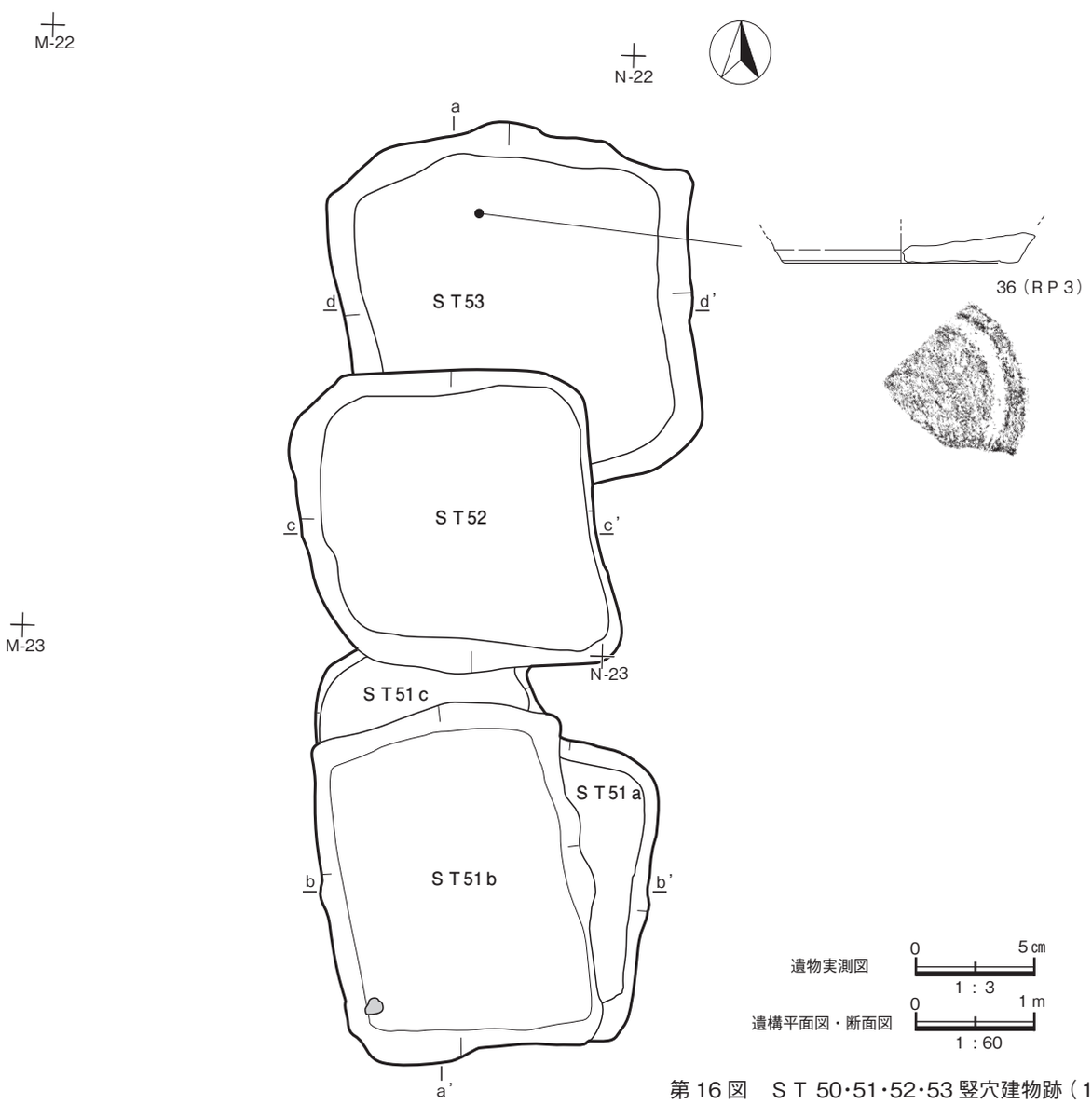
調査区北半部のＥ‐９～Ｉ‐９に位置する。双方とも東西軸に平行するが、溝跡ＳＤ 131 はＧ‐９グリッド付近で北方向へ屈曲する。これを溝跡ＳＤ 130 が掘り込む重複関係がある。溝跡ＳＤ 130 は、調査区内での長さが約 11.5 ｍを測るが、さらに西側の調査区外へと延びる。幅 1.2 ～ 1.4 ｍ、深さ約 40 ㎝を測る。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くＵ字状を呈する。覆土は４層に分かれ、下層の褐色シルトから赤焼土器片が出土する。一方で溝ＳＤ 131 は、長さ 4.8m 以上、幅 40 ㎝～ 60 ㎝、深さ約 20 ㎝を測る。断面形は壁面が急角度で立ち上がり、底面が弧を描くＵ字状を呈する。双方とも、所属時期は平安時代以降と比定される。

6　その他の遺構

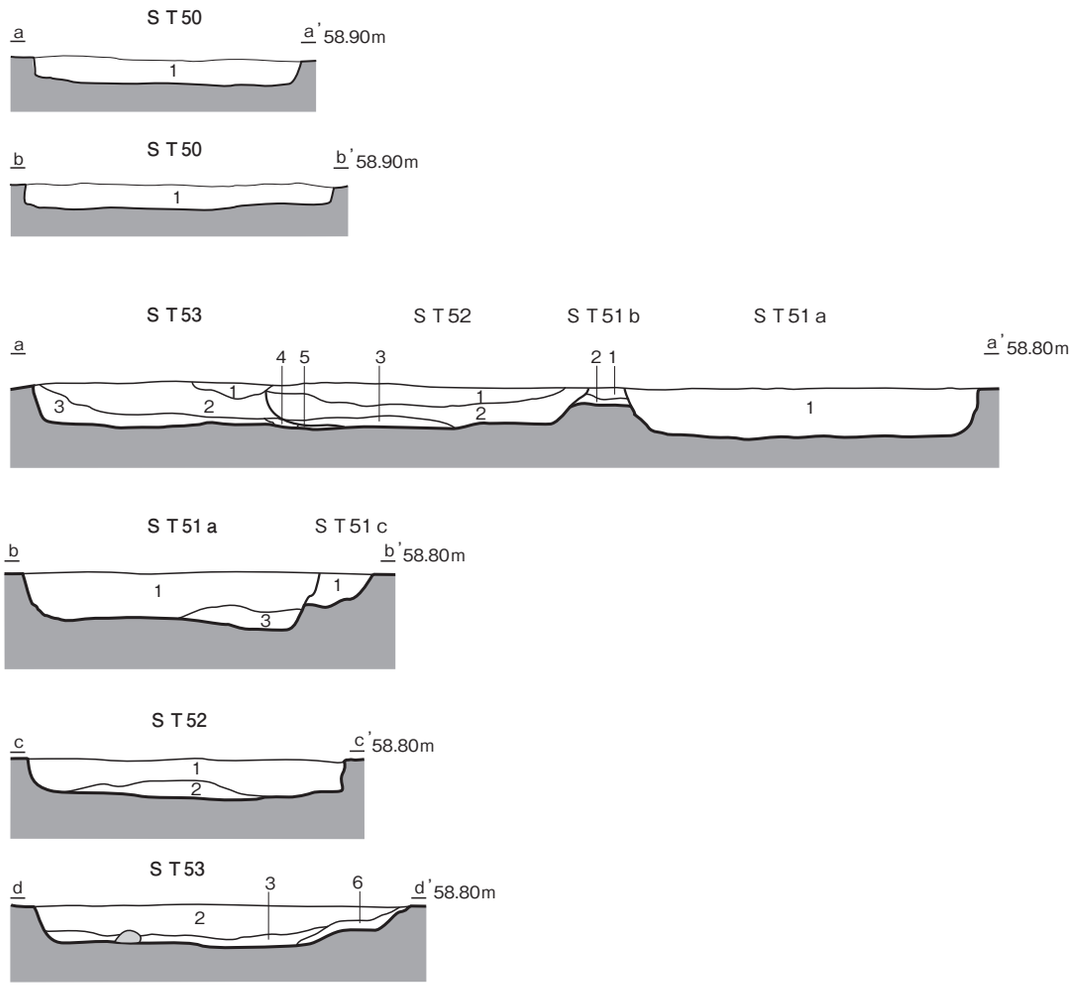
遺物が出土した柱穴を第 43・44 図に示した。柱穴は調査区の南半部西側に多く分布する傾向がある。大半が方形もしくは円形の平面プランを呈する。検出規模は長軸 20 ㎝を測る柱穴と、40 ㎝を測る柱穴とに分けられる。確認面からの深さは、10 ～ 40 ㎝の範囲に収まる。いずれも柱材、根固め石や礎石なども確認されなかった。遺物は、上面や覆土の上層から出土し、赤焼土器の破片が大半を占める。調査区北端部のＣ‐４～Ｄ‐５に位置する性格不明遺構ＳＸ 137 は､長軸８ｍ､短軸５ｍのアメーバー状に広がる不整形を呈し、確認面からの深さは 20 ㎝～ 50 ㎝を測る。壁面は緩やかに立ち上がり、凹凸のある底面を呈する。上層からは、須恵器大甕の胴部・頸部の破片が 21 点出土している。10 個体以上の存在が窺えるが、いずれも全体を把握できるまでには至らない。

調査区北半部Ｊ‐11 に位置するＳＸ 132 からは、砥石が１点出土している。





第 16 図　S T 50･51･52･53 竪穴建物跡（1）



S T 50

1　10Y R3/2　黒褐色シルト　　（粘土質。10Y R5/4にぶい黄褐色シルトをブロック状で30％混入。炭化物と酸化鉄を含む）

S T 51 a

1　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で30％混入）
2　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で10％混入。炭化物を帯状に含む）
3　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で10％混入）

S T 51 b

1　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトと10Y R3/2黒褐色シルトを斑状で30％混入）
2　2.5Y6/2　灰黄色シルト　　（部分的に粘土質。10Y R4/2灰黄褐色シルトと10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10％混入）

S T 51 c

1　2.5Y6/2　灰黄色シルト　　（部分的に粘土質。10Y R4/2灰黄褐色シルトと10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10％混入）

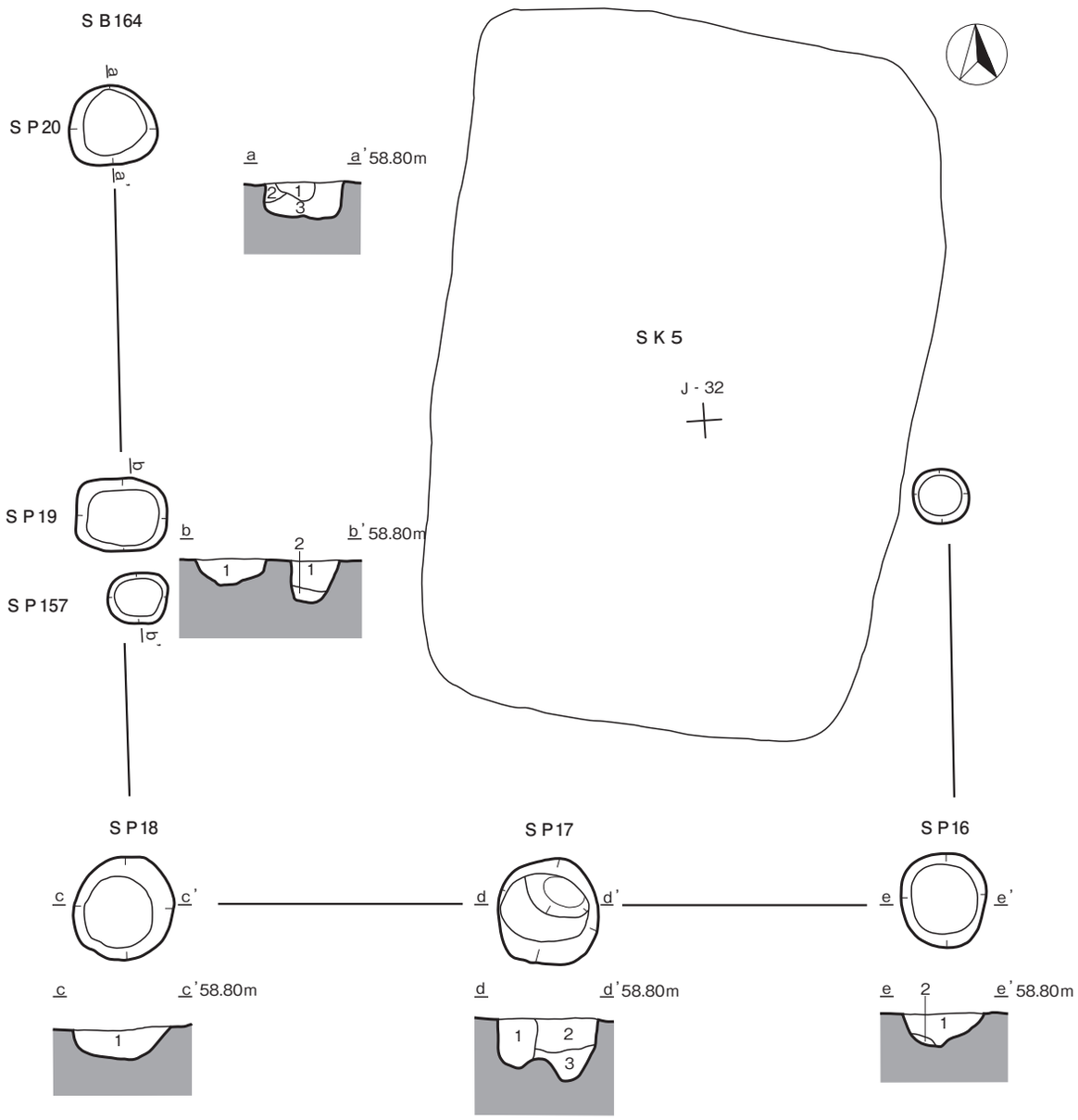
S T 52

1　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（炭化物を少量含む。10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で20％混入）
2　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（炭化物を少量含む。10Y R6/3にぶい黄橙色シルトを斑状で40％混入）
3　10Y R3/2 黒褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で10％混入）

S T 53

1　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（層下位は帯状の炭化層。10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で30％混入）
2　10Y R4/2 灰黄褐色シルト　　（炭化物を少量含む。10Y R6/3にぶい黄橙色シルトと10Y R3/2黒褐色シルトを斑状で20％混入）
3　10Y R4/2 灰黄褐色粘質シルト（炭化物を少量含む。10Y R6/3にぶい黄橙色シルトと10Y R3/2黒褐色シルトを斑状で50％混入）
4　10Y R3/2 黒褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で20％混入）
5　10Y R6/3 にぶい黄褐色シルト（10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で20％混入）
6　2.5Y6/2　灰黄褐色砂質シルト　（10Y R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で20％混入）

第 17 図　S T 50･51･52･53 竪穴建物跡（2）



ＳＰ16

1 10Ｙ R2/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R4/6シルトをブロック状で40％混入）

2 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R2/2シルトをブロック状で３％混入）

ＳＰ17

1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（やや粘土質。10Ｙ R4/6シルトをブロック状で５％混入）

2 10Ｙ R2/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R4/6シルトをブロック状で30％混入）

3 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（砂質。10ＹＹ R2/2シルトをブロック状で10％混入）

ＳＰ18

1 10Ｙ R2/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R4/6シルトをブロック状で50％混入）

ＳＰ20

1 10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色シルト（砂質。10Ｙ R2/2シルトをブロック状で20％混入。層境界を酸化鉄に覆れる）

2 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R2/2シルトをブロック状で５％混入）

3 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/6シルトをブロック状で20％混入）

ＳＰ19

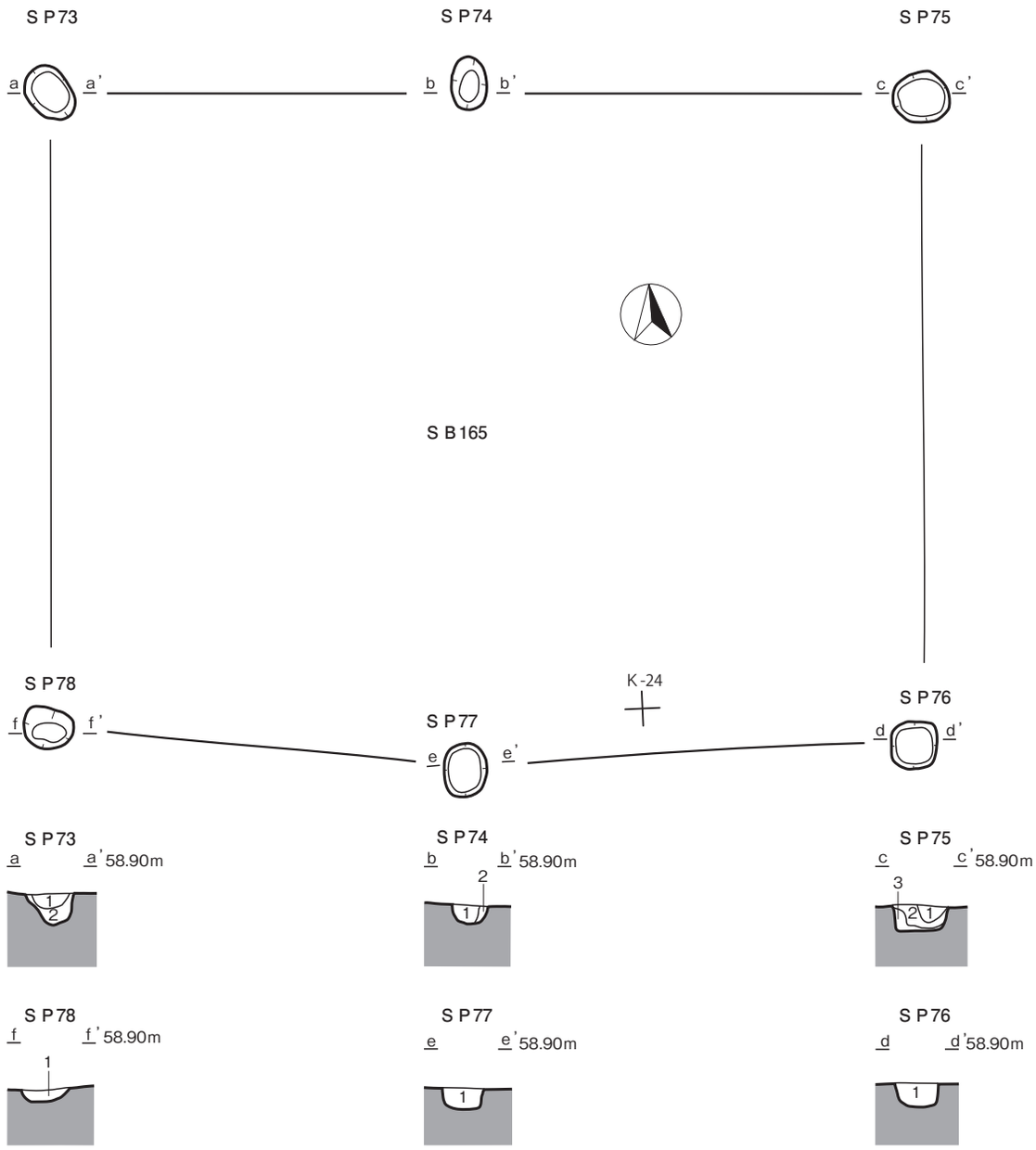
1 10Ｙ R2/2 黒褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/6シルトをブロック状で20％混入）

ＳＰ157

1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（やや粘土質。10Ｙ R4/6シルトをブロック状で20％混入）

2 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R3/3シルトをブロック状で10％混入）

第18図　ＳＢ 164 建物跡



S P73
1　10Y R3/2 黒褐色シルト　　（10Y R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で５％混入）
2　10Y R6/3 にぶい黄橙色シルト（酸化鉄によるサビを生じる。10Y R3/2黒褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）

S P74
1　10Y R3/2 黒褐色シルト　　（10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
2　地山

S P75
1　10Y R6/3 にぶい黄橙色シルト（10Y R3/2黒褐色砂質シルトをブロック状で30％混入）
2　10Y R3/3 暗褐色シルト　　（純層）
3　地山

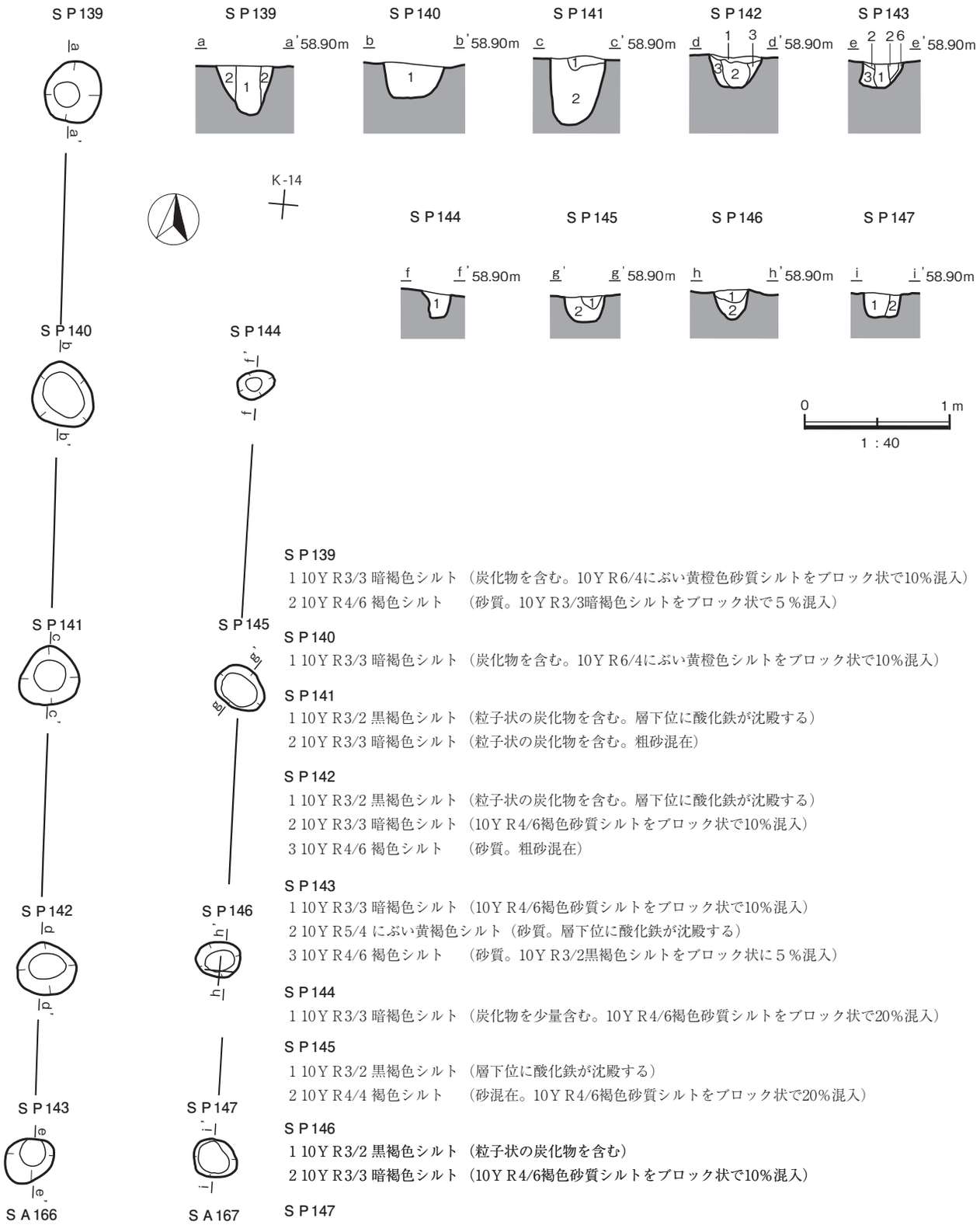
S P76
1　10Y R3/2 黒褐色シルト　　（10Y R4/6褐色シルトをブロック状で10％混入）

S P77
1　10Y R6/3 にぶい黄橙色シルト（酸化鉄によるサビを生じる。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10％混入）

S P78
1　10Y R6/3 にぶい黄橙色シルト（酸化鉄によるサビを生じる。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で20％混入）

0　1 m
1 : 40

第 19 図　S B 165 建物跡



S P 139
1 10Y R3/3 暗褐色シルト（炭化物を含む。10Y R6/4にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状で10%混入）
2 10Y R4/6 褐色シルト　（砂質。10Y R3/3暗褐色シルトをブロック状で５％混入）

S P 140
1 10Y R3/3 暗褐色シルト（炭化物を含む。10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で10%混入）

S P 141
1 10Y R3/2 黒褐色シルト（粒子状の炭化物を含む。層下位に酸化鉄が沈殿する）
2 10Y R3/3 暗褐色シルト（粒子状の炭化物を含む。粗砂混在）

S P 142
1 10Y R3/2 黒褐色シルト（粒子状の炭化物を含む。層下位に酸化鉄が沈殿する）
2 10Y R3/3 暗褐色シルト（10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で10%混入）
3 10Y R4/6 褐色シルト　（砂質。粗砂混在）

S P 143
1 10Y R3/3 暗褐色シルト（10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で10%混入）
2 10Y R5/4 にぶい黄褐色シルト（砂質。層下位に酸化鉄が沈殿する）
3 10Y R4/6 褐色シルト　（砂質。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状に５％混入）

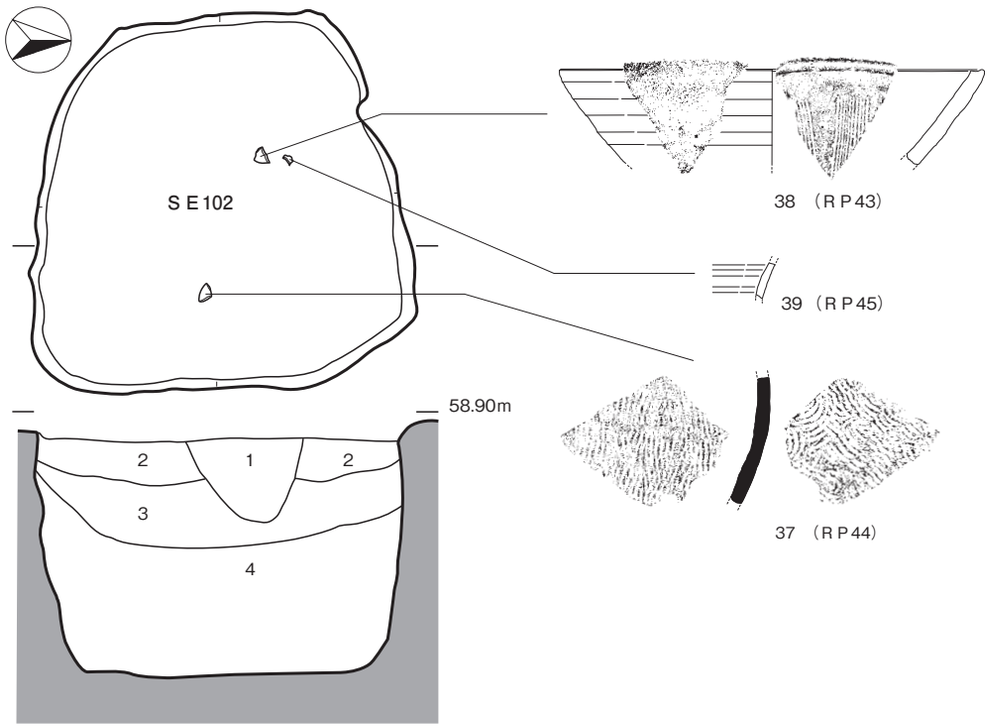
S P 144
1 10Y R3/3 暗褐色シルト（炭化物を少量含む。10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で20%混入）

S P 145
1 10Y R3/2 黒褐色シルト（層下位に酸化鉄が沈殿する）
2 10Y R4/4 褐色シルト　（砂混在。10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で20%混入）

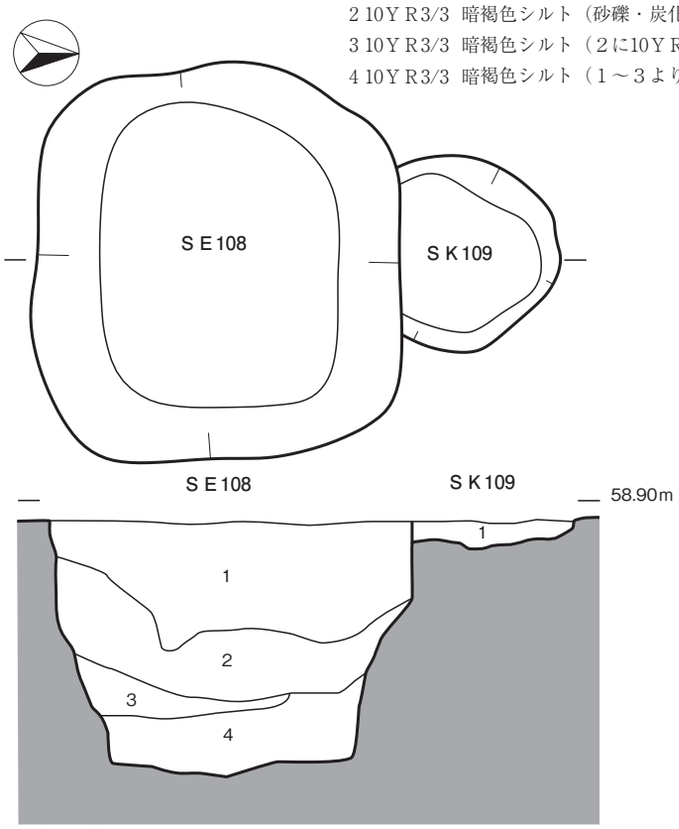
S P 146
1 10Y R3/2 黒褐色シルト（粒子状の炭化物を含む）
2 10Y R3/3 暗褐色シルト（10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で10%混入）

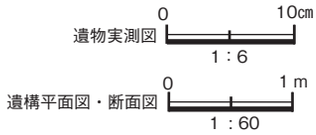
S P 147
1 10Y R3/3 暗褐色シルト（炭化物を含む。10Y R4/6褐色砂質シルトをブロック状で20%混入）
2 10Y R4/6 褐色シルト　（砂質。10Y R3/3暗褐色シルトをブロック状で５％混入）

第 20 図　ＳＡ 166・166 柱穴列



ＳＥ102
1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト（砂礫を多く含む。炭化物を混入し、下位で帯状に含む）
2 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト（砂礫・炭化物を多く含む。10Ｙ R6/4にぶい黄橙色シルトを斑状で10％含む）
3 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト（２に10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトを帯状で混入する）
4 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト（１～３より色調明るい。砂をより多く混在する ）

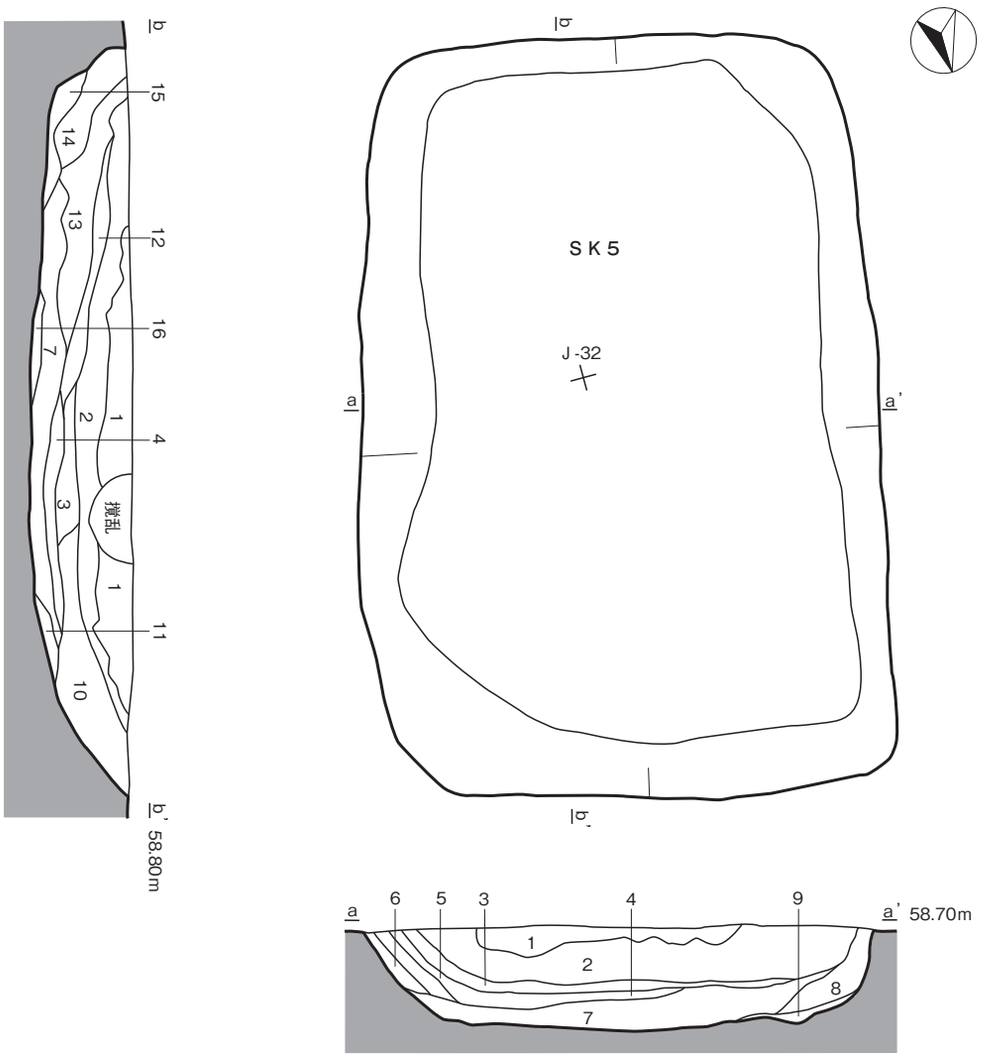




ＳＥ102
1 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト （炭化物を混入し、10Ｙ R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状に含む）
2 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト （砂礫・炭化物を多く含む。10Ｙ R4/2灰黄色シルトをブロック状で10％含む）
3 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト （砂礫を多く含む。遺物少量含む）
4 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト （砂礫を多く含む ）

ＳＫ109
1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト （炭化物を含む）

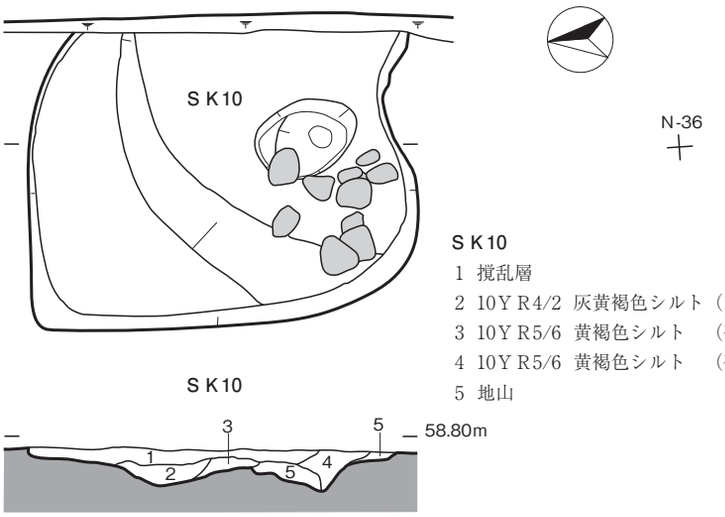
第 21 図　ＳＥ 102・108 井戸跡



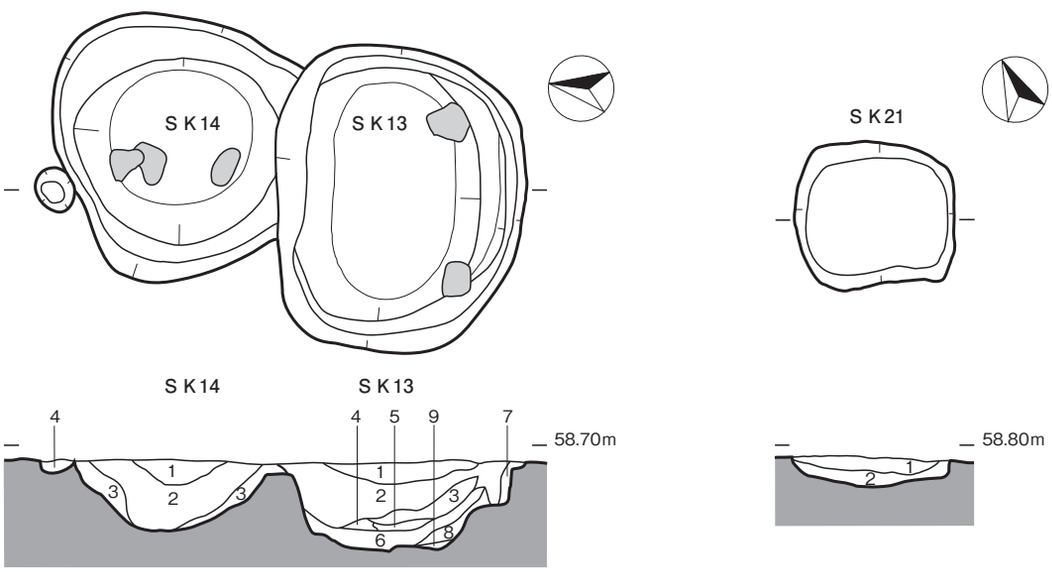
ＳＫ５

1	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（粘土質で硬くしまる。層下は酸化鉄により7.5Ｙ R5/8明褐色を帯びる）
2	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（炭化物を斑状または帯状に含む。一部に灰を含む）
3	10Ｙ R4/2	灰黄褐色シルト	（炭化した灰と酸化鉄を帯状に含む）
4	10Ｙ R2/1	黒色シルト	（炭化した灰を筋状に含む）
5	10Ｙ R4/2	灰黄褐色シルト	（10Ｙ R5/6黄褐色シルトを斑状に混在）
6	10Ｙ R5/6	黄褐色シルト	（10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトを斑状に混在）
7	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（2.5Ｇ Ｙ5/1オリーブ灰色砂質シルトを斑状で10％混入）
8	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
9	10Ｙ R5/6	黄褐色シルト	（砂質。10Ｙ R3/2黒褐色シルトをブロック状で30％混入）
10	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（炭化した灰と酸化鉄を帯状に含む。炭化物を含む。10Ｙ R5/6黄褐色シルトをブロック状で10％混入）
11	10Ｙ R2/1	黒色シルト	（炭化した灰を筋状に含む。炭化物を多く含む）
12	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（炭化した灰を帯状に含む。４に対応する）
13	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で20％混入。粒子状の炭化物を含む）
14	10Ｙ R5/1	黄褐色シルト	（砂質。10Ｙ R3/2黒褐色シルトを霜降り状で20％混入）
15	10Ｙ R3/2	黒褐色シルト	（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で20％混入）
16	2.5Ｇ Ｙ5/1	灰オリーブシルト	（砂質。純粋層）

第22図　ＳＫ５土坑



ＳＫ10
1 撹乱層
2 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）
3 10Ｙ R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R2/2黒褐色シルトをブロック状で10％混入）
4 10Ｙ R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2黒褐色シルトを霜降り状で10％混入）
5 地山



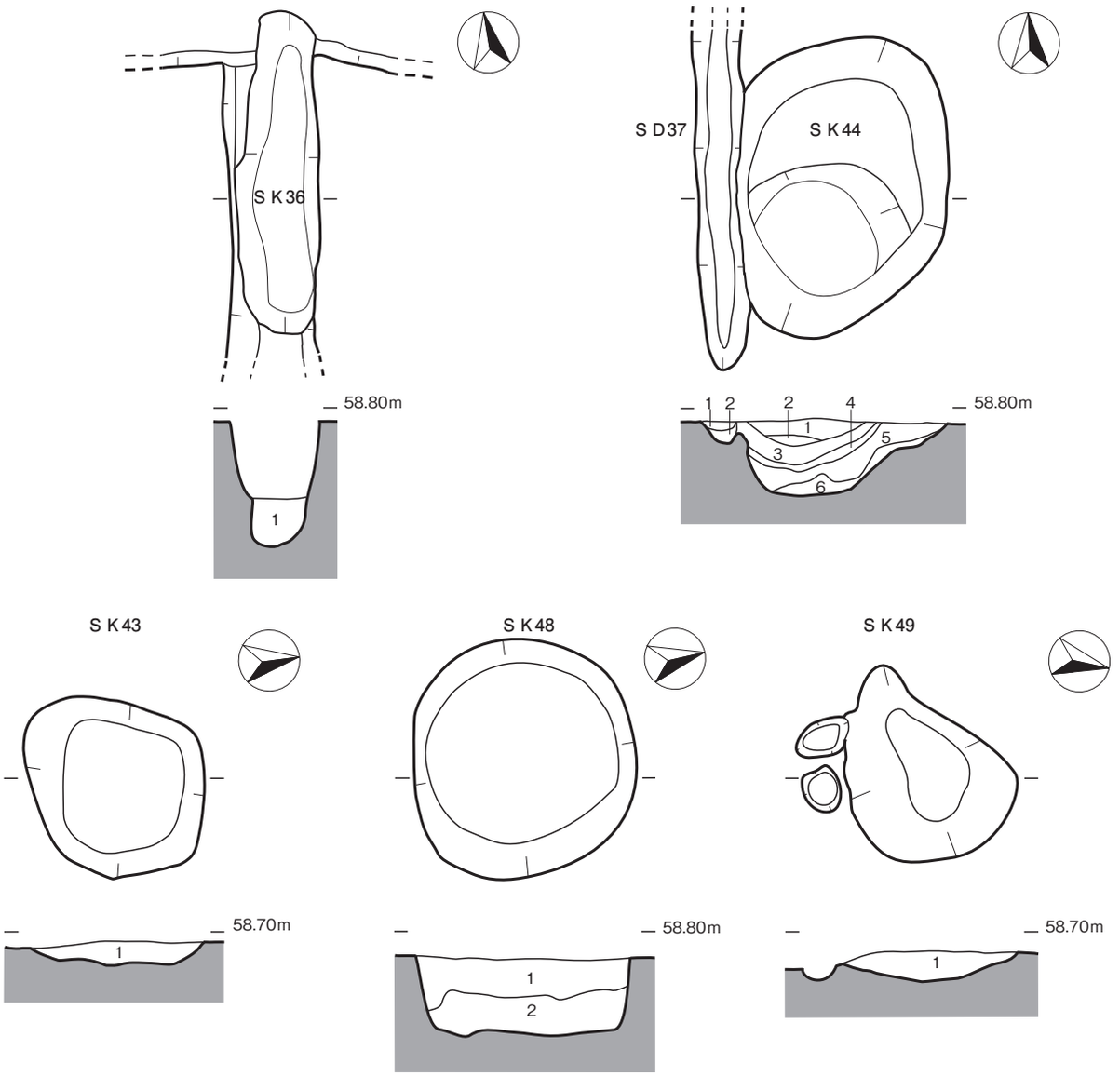
ＳＫ13
1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（粒子状の炭化物を多く含む）
2 7.5Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を含む。ほぼ粘土化した有機物を含む）
3 7.5Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で30％混入）
4 7.5Ｙ R4/3・10Ｙ R5/6シルトの撹乱層

ＳＫ14
1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（炭化物を多く含む。ほぼ純層）
2 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（炭化物を多く含む。10Ｙ R5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）
3 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を多く含む。10Ｙ R5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）
4 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）
5 10Ｙ R4/2 灰黄褐色粗砂　（酸化鉄を含む）
6 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を帯状で多く含む。10Ｙ R5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）
7 10Ｙ R5/4 にぶい黄褐色シルト（砂質。10Ｙ R3/3暗褐色シルトをブロック状で10％混入）
8 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（10Ｙ R5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で20％混入）
9 7.5Ｇ Y4/1 暗緑灰色シルト　（部分的に粘土となる）

ＳＫ21
1 10Ｙ R3/4 暗褐色シルト　（10Ｙ R5/3にぶい黄褐色砂質シルト・10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトを斑状に混入。炭化物あり）
2 10Ｙ R4/4 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で５％混入）

0　1 m
1：40

第23図　ＳＫ 10・13・14・21 土坑



S K36

1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を多く含む。10Y R5/6黄褐色シルトを斑状で５％混入）

S D37

1 10Y R3/4 暗褐色シルト　（砂混在）

2 10Y R3/3 暗褐色砂　（10Y R3/4暗褐色シルトをブロック状で10%混入）

S K44

1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（炭化物あり。10Y R6/4 にぶい黄橙色シルトを斑状で５％混入）

2 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で40%混入）

3 10Y R3/1 黒褐色シルト　（ほぼ純層）

4 10Y R3/1 黒褐色シルト　（炭化物を帯状に多く含む）

5 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で20%混入）

6 10Y R6/4 にぶい黄橙色シルト（砂～粗砂混在。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10%混入）

S K43

1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を含む）

S K48

1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を少量含む。酸化鉄を含んだ砂を混在）

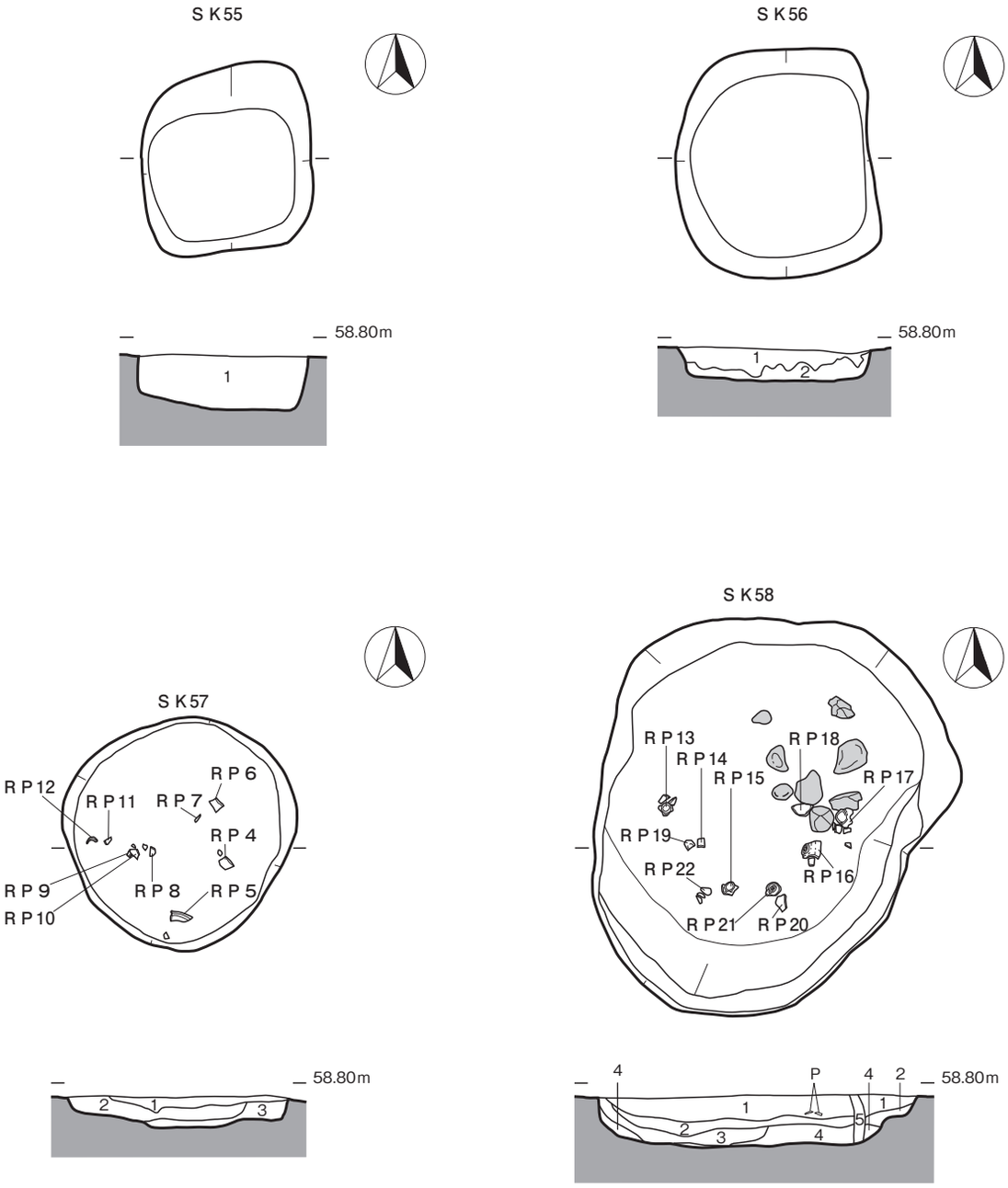
2 10Y R3/1 黒褐色シルト　（炭化物を少量含む。ほぼ純層）

S K49

1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色シルトを斑状で10%混入）

0　1 m
1 : 40

第 24 図　S K 36・43・44・48・49 土坑



ＳＫ55

1 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（炭化物を含む。10Ｙ R5/6 黄褐色砂質シルトをブロック、斑状で 20％混入）

ＳＫ56

1 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R6/4 にぶい黄橙色砂質シルトをブロック、斑状で 10％混入。層下位に酸化鉄が沈殿する）

2 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック、斑状で５％混入）

ＳＫ57

1 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（火山灰と10Ｙ R3/2黒褐色シルトをブロック状で20％混入、固くしまる）

2 10Ｙ R2/1 黒色シルト　（10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトと10Ｙ R6/4にぶい黄橙色砂質シルトを斑状で30％混入）

3 10Ｙ R6/4 にぶい黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で20％混入）

ＳＫ58

1 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を含む。10Ｙ R5/3にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で10％、火山灰を粒子状で１％混入）

2 10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色シルト　（やや粘土質。炭化物を含む。火山灰をブロック状で30％混入）

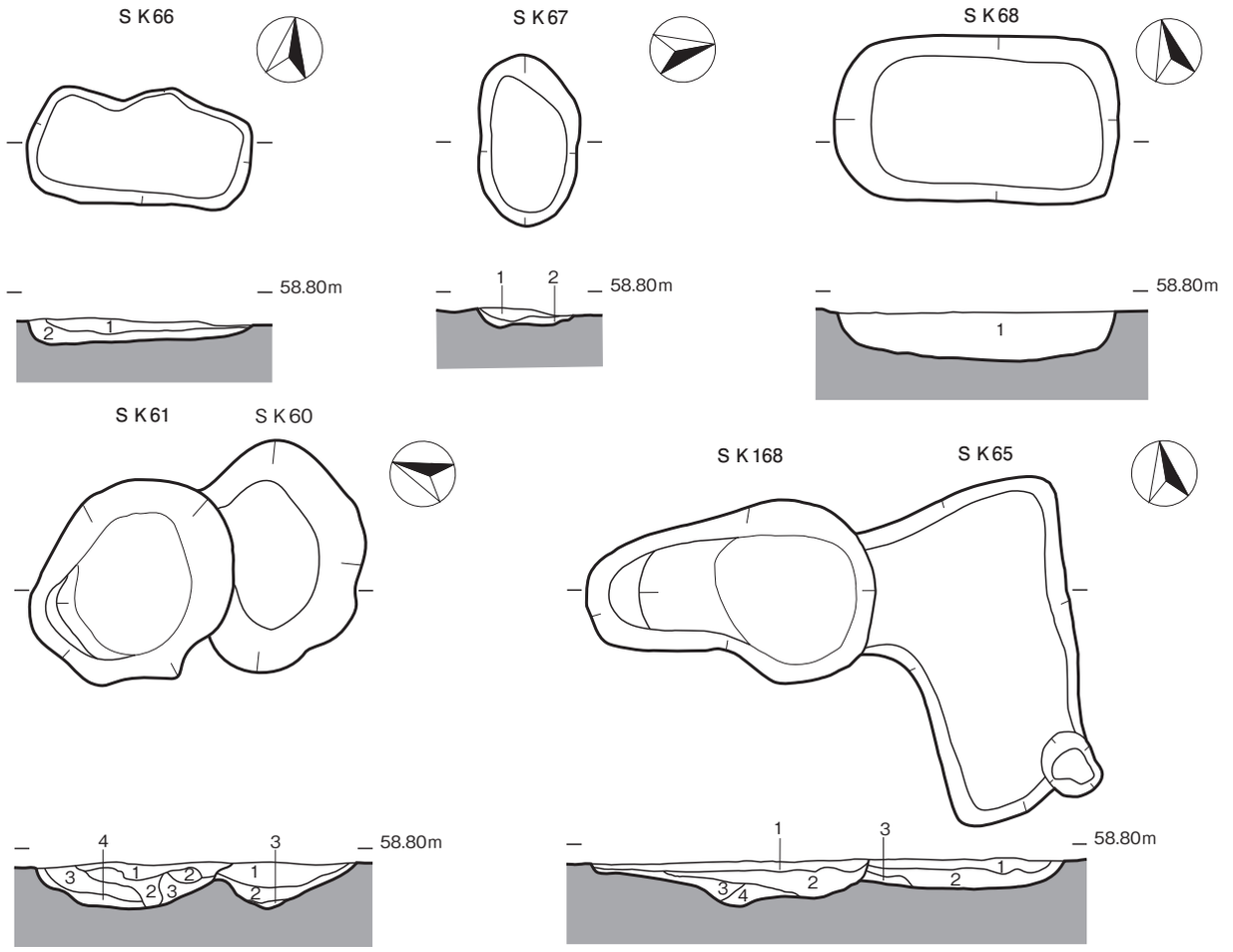
3 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（炭化物を含む。10Ｙ R5/3にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）

4 10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で20％混入）

5 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（純層）

0　1 m
1：40

第 25 図　ＳＫ 55・56・57・58 土坑



ＳＫ66
1 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を少量含む。10Ｙ R6/3にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状で10％混入）
2 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色シルト　（酸化鉄を含んだ砂を多く混在。層下に沈殿する）

ＳＫ67
1 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状で20％混入）
2 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色シルト　（酸化鉄を含んだ砂を多く混在。層下に沈殿する）

ＳＫ68
1 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（10Ｙ R3/2黒褐色シルトを斑状で30％混入）

ＳＫ65
1 10Ｙ R2/1 黒色シルト　（炭化物を含む。酸化鉄に富む。10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
2 10Ｙ R2/1 黒色シルト　（炭化物を帯状に含む。中央域で焼土ブロックを含む。10Ｙ R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状に20％混入）
3 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（純層）

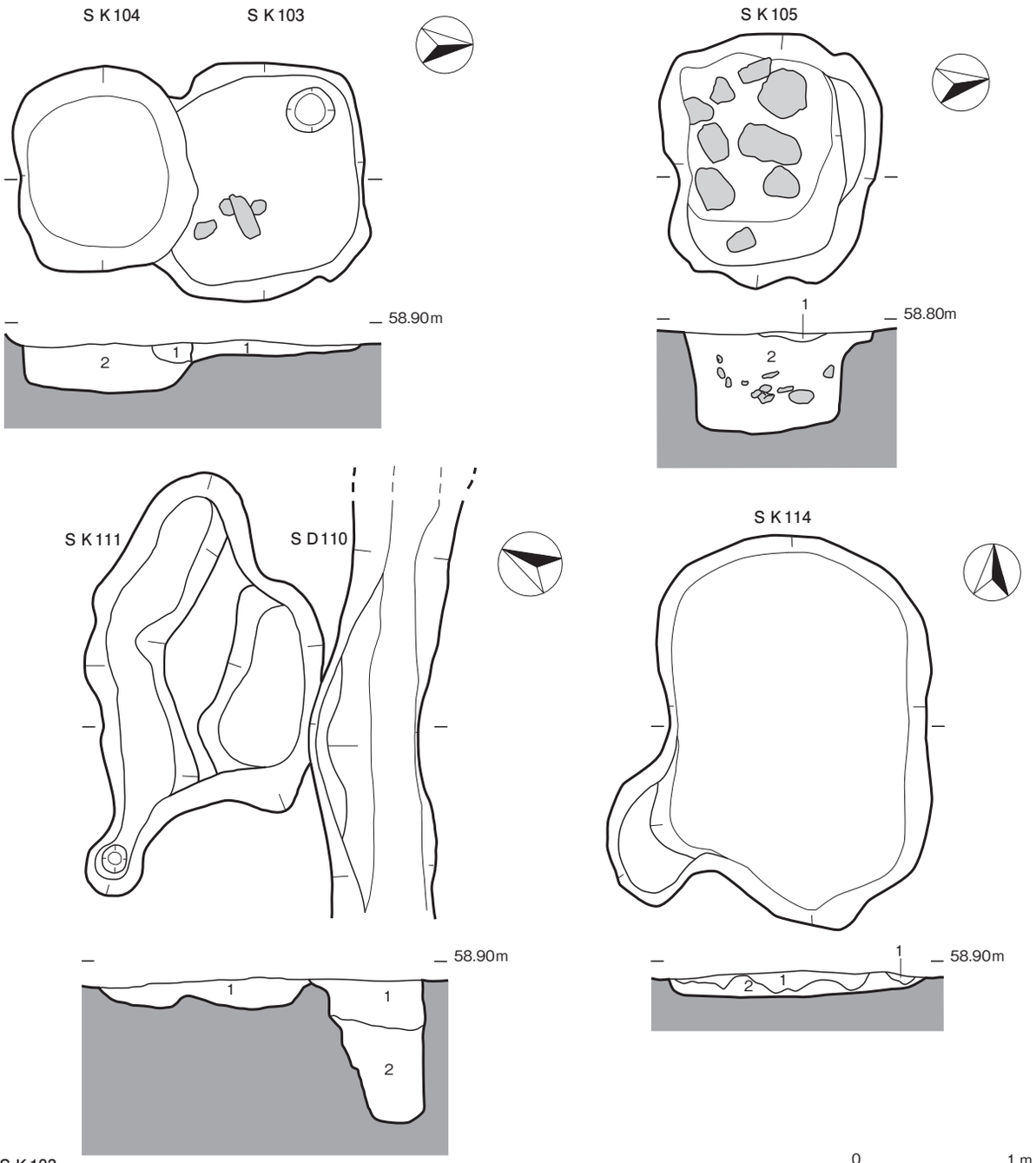
ＳＫ168
1 10Ｙ R2/1 黒色シルト　（炭化物を多く含む。10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
2 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R2/1黒色シルトを縞状で20％混入）
3 10Ｙ R6/3 にぶい黄褐色シルト　（酸化鉄に富む。10Ｙ R2/1黒色シルトを筋状で３％混入）
4 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（純層）

ＳＫ60
1 10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色シルト　（炭化物を含む）
2 10Ｙ R5/4 にぶい黄褐色細砂　（10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトを縞状で20％混入）
3 10Ｙ R4/6 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で20％混入）

ＳＫ61
1 10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色シルト　（層下位に酸化鉄が沈殿する）
2 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（砂質。10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
3 10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色シルト　（10Ｙ R3/3暗褐色細砂を混在。10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）
4 10Ｙ R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10YR4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状で20％混入）

0　1 m
1：40

第 26 図　ＳＫ 60・61・65・66・67・68・168 土坑



ＳＫ103
1 10ＹＲ3/3　暗褐色シルト　（10ＹＲ5/6黄褐色シルトをブロック状で20％含む）

ＳＫ104
1 10ＹＲ4/2　灰黄褐色シルト　（酸化鉄を含む。10ＹＲ6/4にぶい黄橙色砂質シルトを斑状で10％含む）
2 10ＹＲ3/3　暗褐色シルト　（10ＹＲ5/6黄褐色シルトを斑状で30％含む。炭化物を含む）

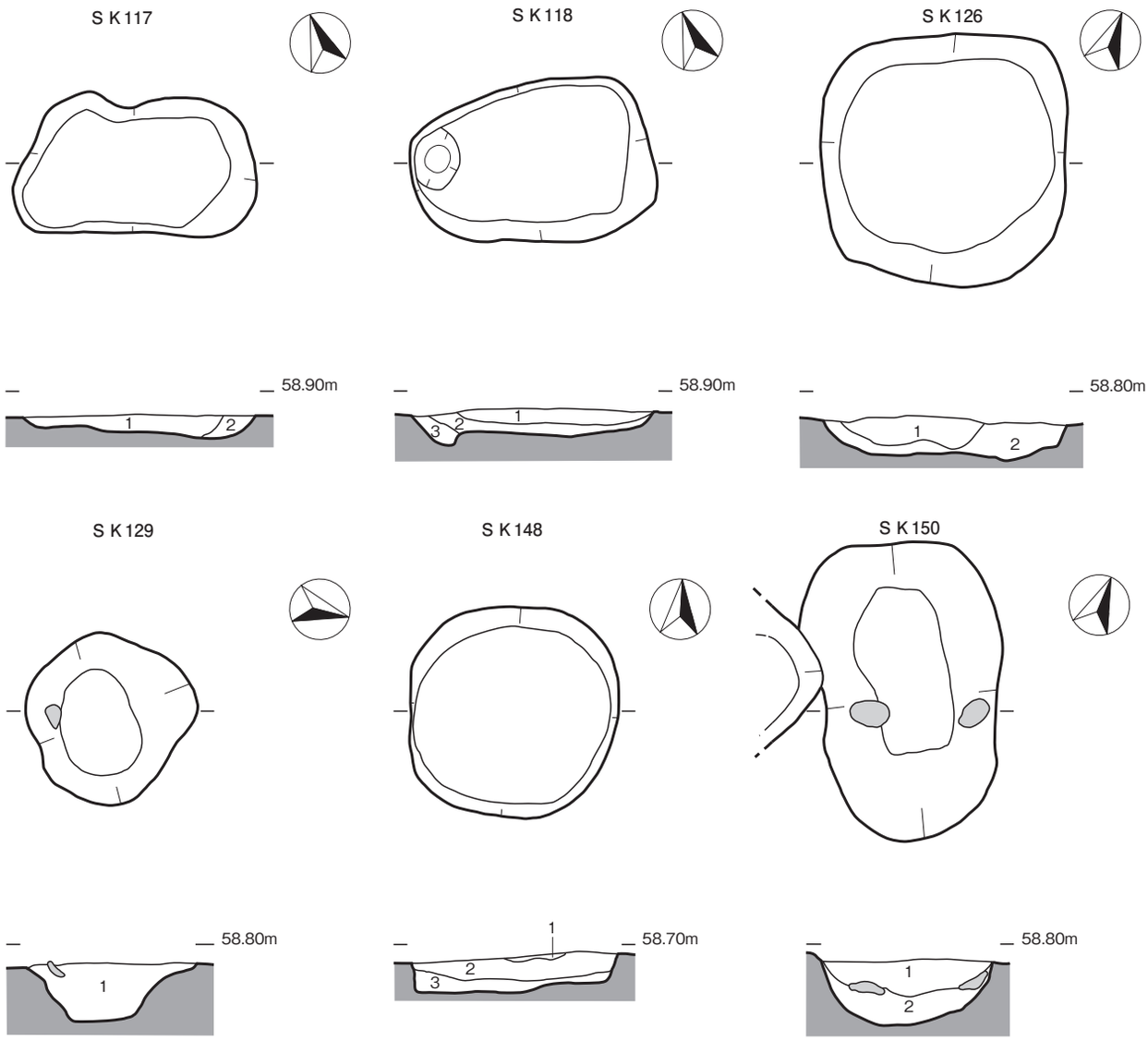
ＳＫ105
1 10ＹＲ4/2　灰黄褐色シルト　（酸化鉄）
2 10ＹＲ3/3　暗褐色シルト　（10ＹＲ5/6黄褐色シルトを霜降り状で10％混入。礫層）

ＳＤ110
1 10ＹＲ6/4　にぶい黄褐色シルト（砂質。酸化鉄を筋状に含む）
2 10ＹＲ6/3　にぶい黄褐色シルト（粘土質。酸化鉄を筋状に含む）

ＳＫ111
1 10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　（酸化鉄に富む。10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトを斑状に40%混入）

ＳＫ114
1 10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　（層下位に酸化鉄が沈殿する。炭化物を少量含む。10ＹＲ4/6褐色シルトを斑状で20％混入）
2 10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　（10ＹＲ4/6褐色シルトを霜降り状で30％混入）

第27図　ＳＫ103・104・105・111・114土坑・ＳＤ110溝跡



S K 117
1　10Y R6/4　にぶい黄橙色シルト　（砂質。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で20%混入）
2　10Y R4/6　褐色シルト　（10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で５％混入）

S K 118
1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を含む。10Y R6/4にぶい黄橙色粘土質シルトをブロック状で20%混入）
2　10Y R6/4　にぶい黄褐色シルト　（粘土質。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10%混入）
3　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を含む。10Y R6/4にぶい黄橙色粘土質シルトをブロック状で20%混入）

S K 126
1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状で10%混入）
2　10Y R3/2　黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状で５％混入）

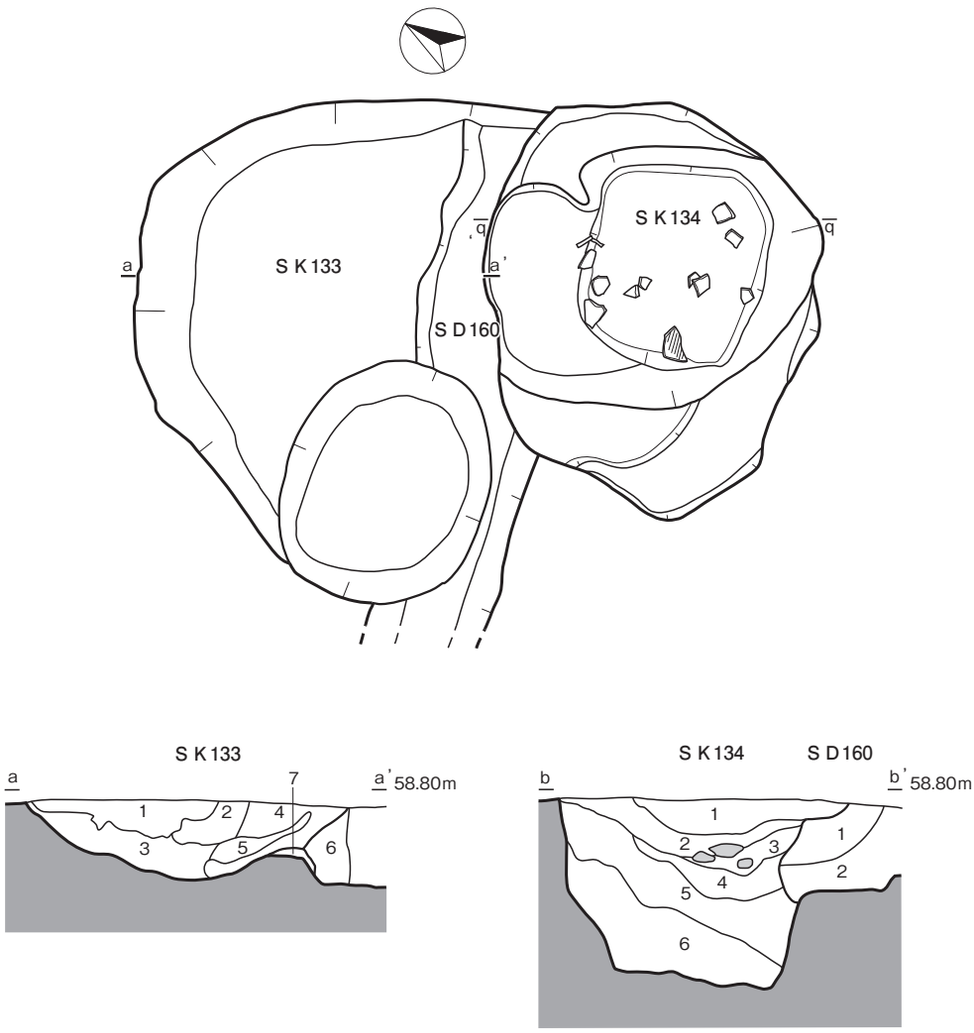
S K 129
1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で５％混入。炭化物を含む）

S K 148
1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を少量含む。10Y R4/6褐色砂質シルトを斑状で40%混入）
2　10Y R4/6　褐色シルト　（砂質。炭化物を少量含む。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10%混入）
3　地山

S K 150
1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を含む。10Y R6/4にぶい黄橙色砂質シルトをブロック状で10%混入）
2　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を含む）

0　1 m
1 : 40

第 28 図　S K 117・118・126・129・148・150 土坑



S K 133

1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で20%混入。層下位に酸化鉄が沈殿する）
2　10Y R3/2　黒褐色シルト　（10Y R4/6褐色シルトをブロック状で10%混入）
3　10Y R3/3　暗褐色シルト　（粗砂をブロックや塊で50%混入）
4　10Y R4/2　灰黄褐色シルト　（10Y R6/2灰黄褐色粘土と10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で10%混入）
5　7.5Y R3/3　暗褐色粗砂　（10Y R4/2灰黄褐色シルトと10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で30%混入）
6　10Y R5/3　にぶい黄褐色細砂（酸化鉄に富む。S D160覆土）
7　地山

S K 134

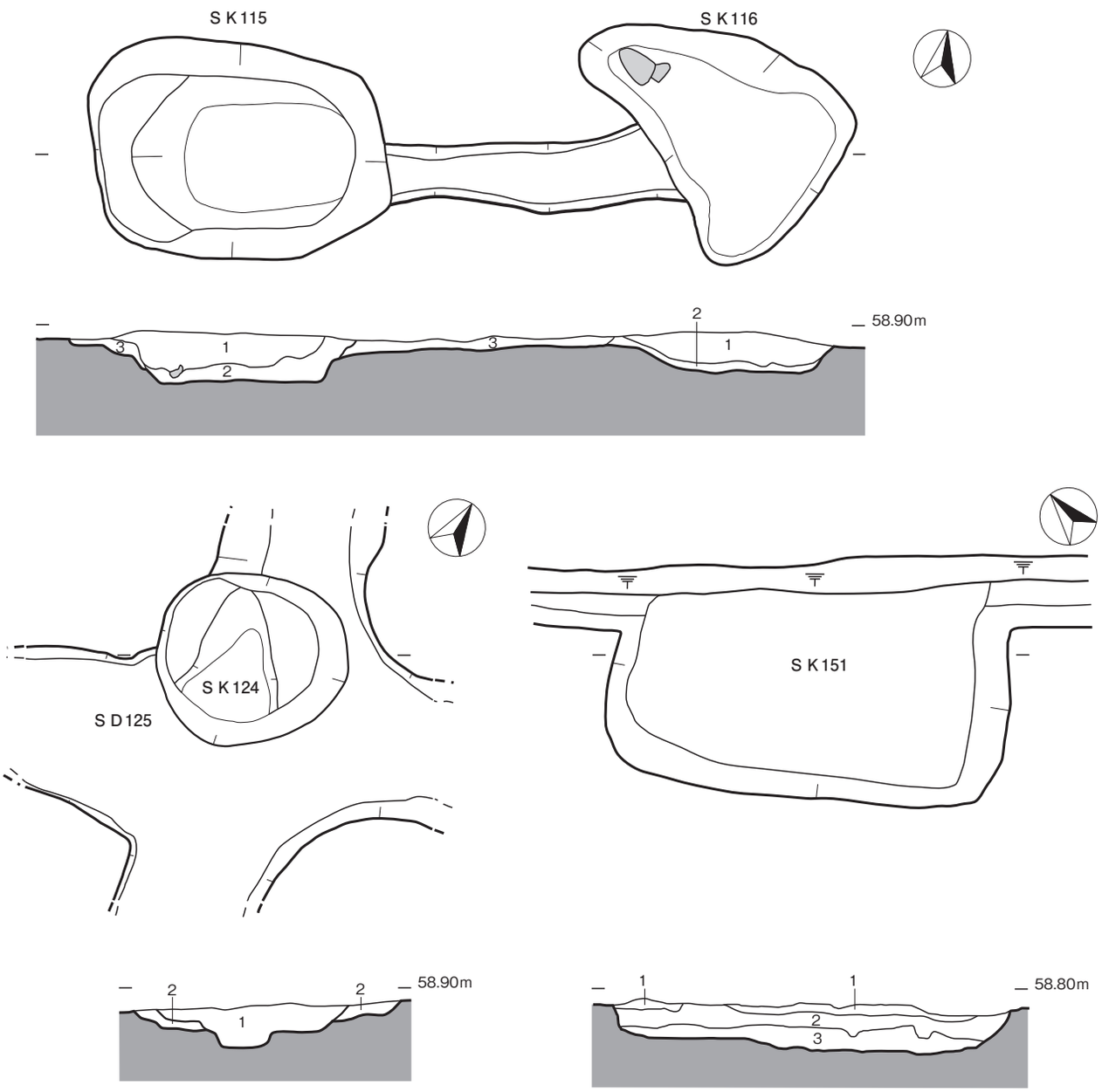
1　10Y R3/3　暗褐色シルト　（10Y R4/6褐色シルトをブロック状で10%混入）
2　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を含む。10Y R4/6褐色シルトを斑状で３%混入）
3　10Y R3/3　暗褐色シルト　（10～20mm大の礫を包含する）
4　10Y R4/6　褐色シルト　（砂質。10Y R3/3暗褐色シルトを帯状で10%混入）
5　10Y R3/4　暗褐色シルト　（砂質。10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で５%混入）
6　10Y R3/4　暗褐色シルト　（砂質。10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で20%混入）

S D 160

1　10Y R6/4　にぶい黄橙色細砂（10Y R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で10%混入）
2　10Y R5/4　にぶい黄褐色細砂（10Y R3/2黒褐色シルトと10Y R6/4にぶい黄橙色細砂を斑状で30%混入。炭化物を少量含む）

0　1 m
1 : 40

第 29 図　S K 133・134 土坑



ＳＫ115
1　10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　（酸化鉄を筋状に含む。炭化物を少量含む）
2　10ＹＲ3/3　暗褐色シルト　（10ＹＲ3/2黒褐色シルトをブロック状で５％、10ＹＲ4/6褐色シルトをブロック状で20％混入）
3　10ＹＲ4/6　褐色シルト　（酸化鉄を筋状に含む。10ＹＲ3/2黒褐色シルトをブロック状で５％混入）

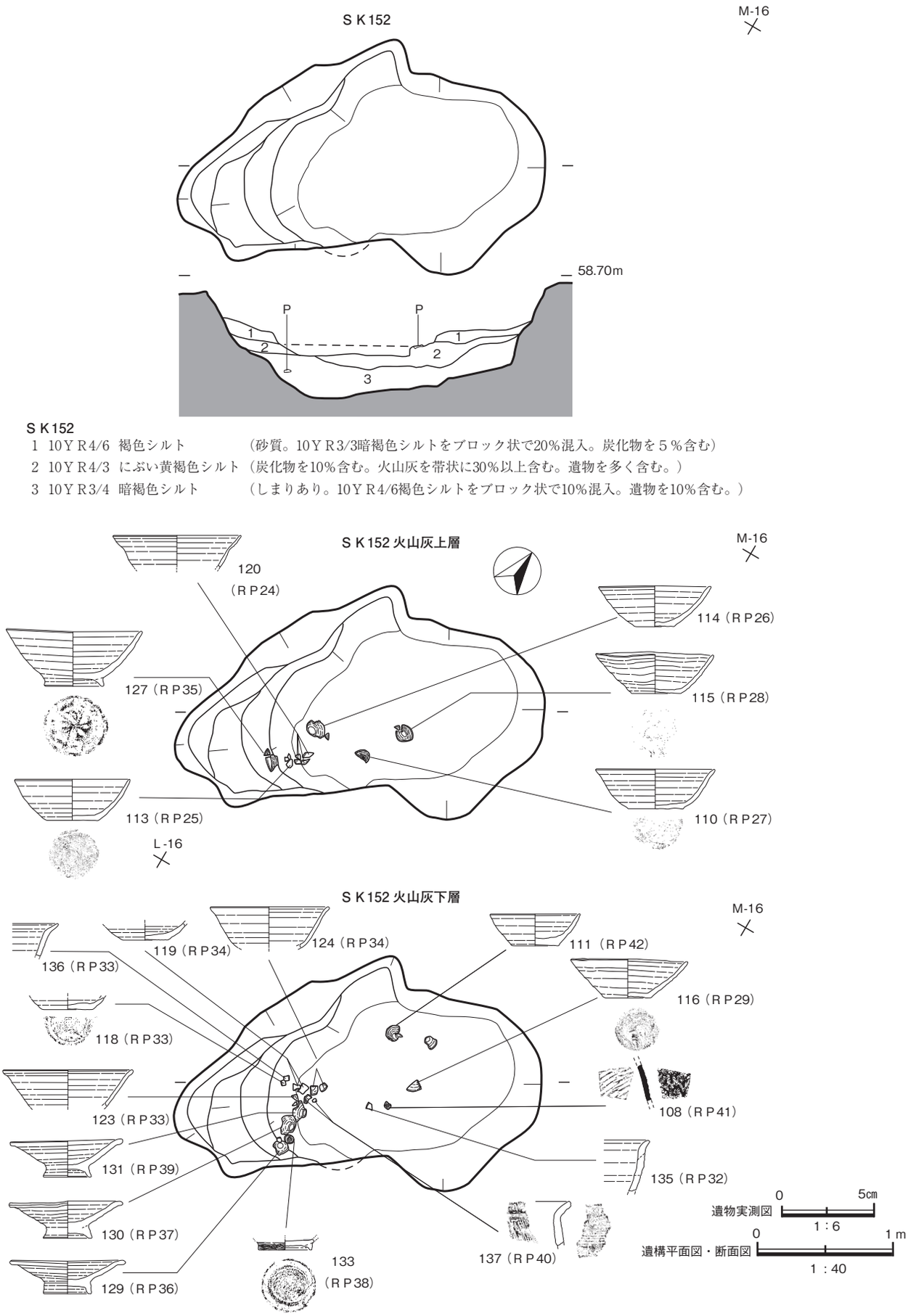
ＳＫ116
1　10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　（10ＹＲ6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で５％混入。炭化物を含む）
2　地山

ＳＫ124
1　10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　（砂礫層。10ＹＲ6/3にぶい黄橙色粘土質シルトを斑状で10％混入）
2　10ＹＲ6/4 にぶい黄褐色シルト　（砂質。下位に酸化鉄が沈殿する。ＳＤ125覆土）

ＳＫ151
1　10ＹＲ3/1 黒褐色粘土　（10ＹＲ3/3暗褐色シルトをブロック状で20％含む。炭化物を５％混入）
2　10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　（炭化物を10％混入。遺物を20％含む）
3　10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　（しまりあり。10ＹＲ4/6褐色シルトをブロック状で10％混入）

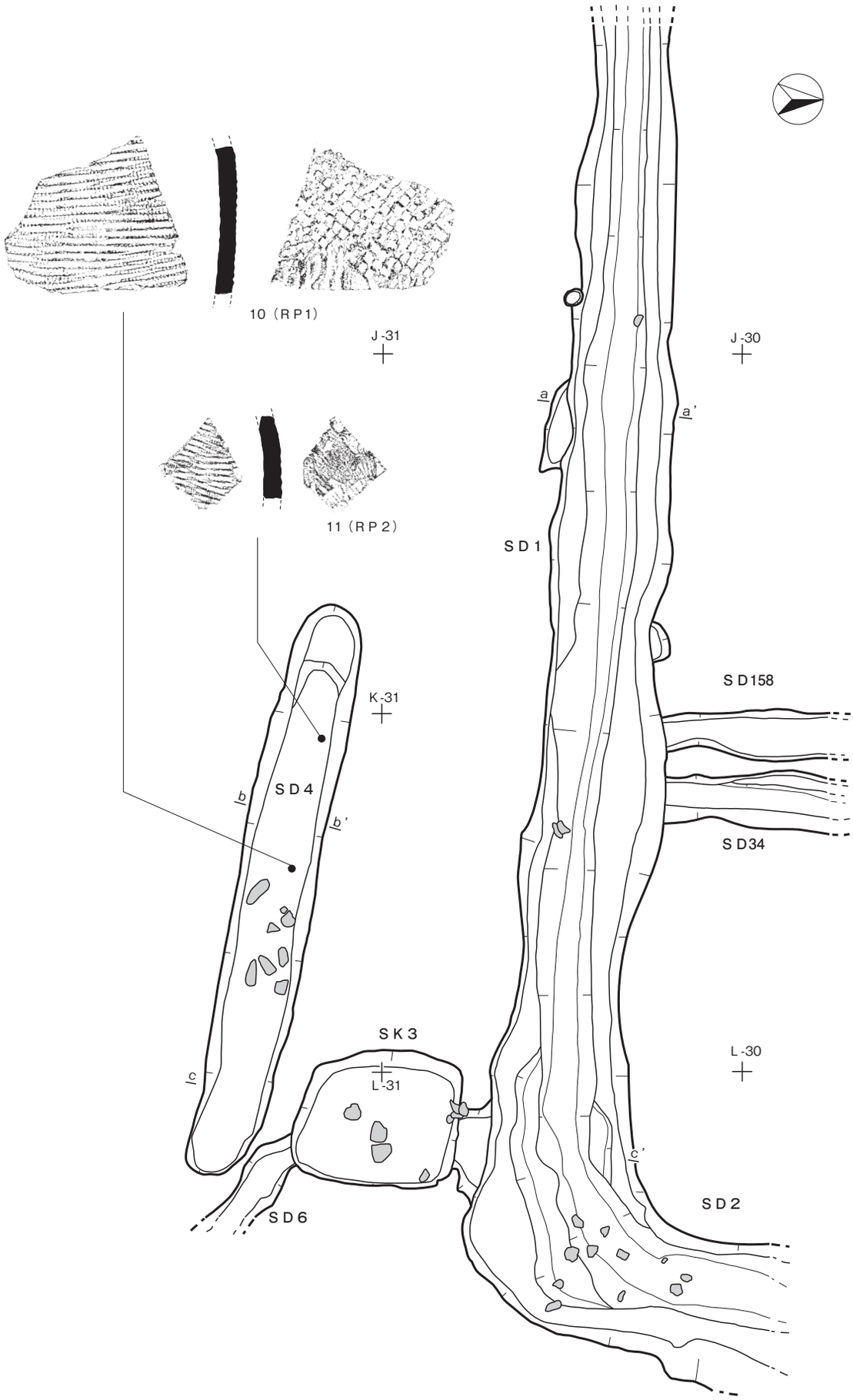
0　1 m
1：40

第30図　ＳＫ 115・116・124・151 土坑



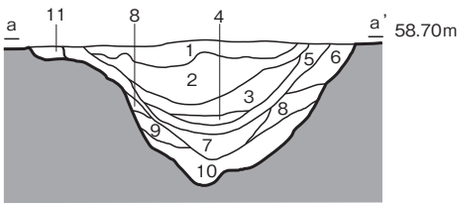
ＳＫ152
1　10ＹＲ4/6　褐色シルト　　（砂質。10ＹＲ3/3暗褐色シルトをブロック状で20％混入。炭化物を５％含む）
2　10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色シルト（炭化物を10％含む。火山灰を帯状に30％以上含む。遺物を多く含む。）
3　10ＹＲ3/4　暗褐色シルト　　（しまりあり。10ＹＲ4/6褐色シルトをブロック状で10％混入。遺物を10％含む。）

第31図　ＳＫ152土坑



第32図　ＳＤ１・２・４溝跡・ＳＫ３土坑（１）

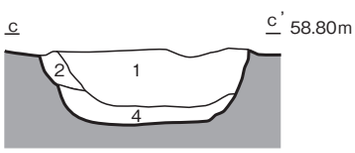
ＳＤ１



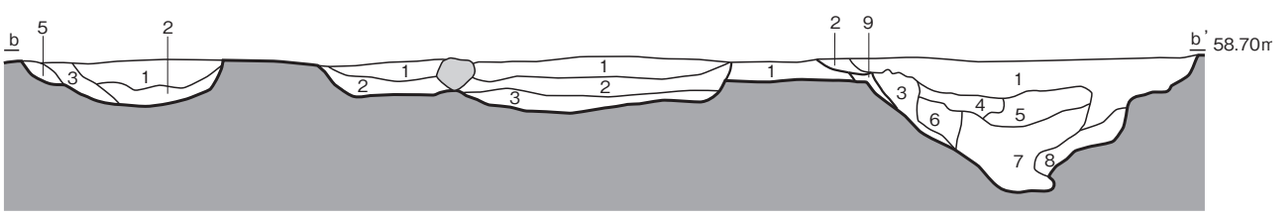
ＳＤ1

1 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（ほぼ炭化した有機物。未分解有機物を含む）
2 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（10Ｙ R5/3にぶい黄褐色細砂を混在。炭化物を含む。ほぼ粘土化した有機物を含む）
3 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（10Ｙ R4/1褐灰色粘土を帯状に含む。10Ｙ R5/6黄褐色シルトを斑状で５％混入）
4 10Ｙ R4/6 褐色砂　（酸化鉄に含む。10Ｙ R4/2灰黄褐色粘土質シルトを縞状で10％混入）
5 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（粘土質。ほぼ順層。炭化物を粒子状で微量含む）
6 10Ｙ R4/4 褐色シルト　（砂質。10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で５％混入）
7 10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色シルト（粘土質。酸化鉄を帯びた10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトを塊状で40％混入）
8 10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色シルト（酸化鉄を帯びた10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトを塊状で40％混入）
9 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（粘土質。サビにより赤褐色化した砂を帯状に含む）
10 7.5Ｙ R4/4 褐色砂　（赤褐色～黒褐色した鉄サビを含む）
11 地山

ＳＤ４



ＳＤ４　ＳＫ３　ＳＤ６　ＳＤ２



ＳＤ２

1 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R6/3にぶい黄橙色細砂と10Ｙ R4/2灰黄褐色粘土質シルトのブロックを斑状に混在）
2 10Ｙ R4/4 褐色砂　（酸化鉄に富む）
3 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（酸化鉄溶脱で固まる）
4 10Ｙ R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトを雲状で20％混入）
5 2.5Ｇ Ｙ 暗オリーブ灰色シルト（粘土質。2.5Ｙ R5/4にぶい赤褐色砂質シルトをブロック状で20％混入）
6 10Ｙ R4/4 褐色シルト　（砂質。Ｎ３/暗灰色粘土をブロック状で10％、10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で３％混入）
7 Ｎ３/ 暗灰色粘土　（2.5Ｙ5/4黄褐色細砂のブロックあり）
8 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色　（砂質シルトと10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトの撹乱層）
9 地山

ＳＫ３

1 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（砂質。10Ｙ R6/2灰黄褐色粘土質シルトをブロック・塊状で30％混入。炭化物を含む）
2 10Ｙ R4/1 褐灰色シルト　（粘土質で硬くしまる。10Ｙ R4/2灰黄褐色砂質シルトを筋・縞状で10％混入）
3 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色細砂　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色粘土の撹乱層。酸化鉄に富む）

ＳＤ４

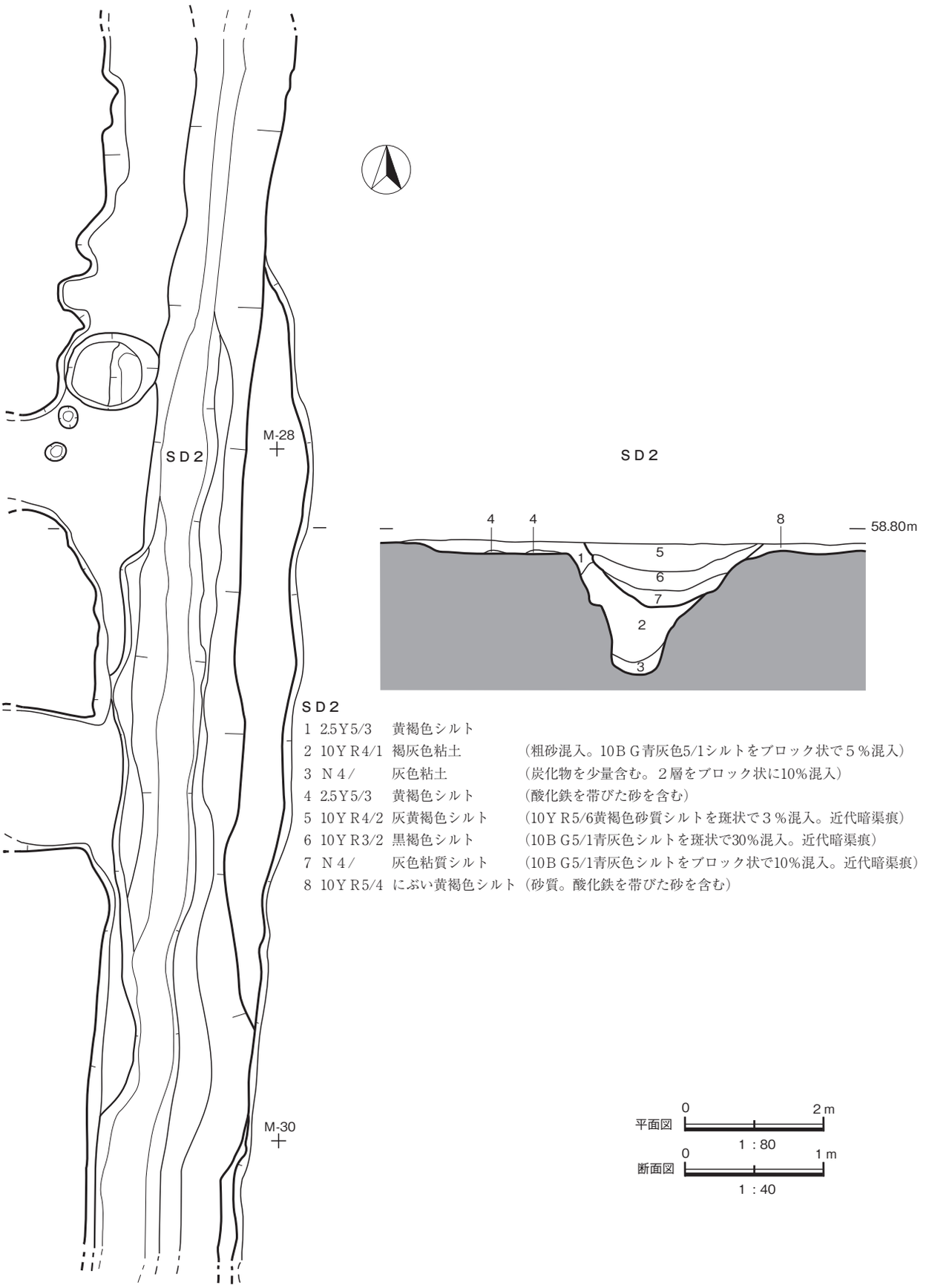
1 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（粘土質。炭化物を粒子状で微量含む。酸化鉄を溶脱）
2 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック縞状で10％混入）
3 10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルト　（10Ｙ R5/3にぶい黄褐色シルト砂質シルトをブロック状で40％混入）
4 2.5Ｙ4/2 暗灰黄色シルト　（砂質。10Ｙ R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で10％混入）
5 10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色シルト　（砂質。地山）

ＳＤ６

1 7.5Ｙ R4/4 褐色砂　（小礫を混入）

遺物実測図　0　5㎝　1：3
遺構平面図　0　2ｍ　1：80
遺構断面図　0　1ｍ　1：40

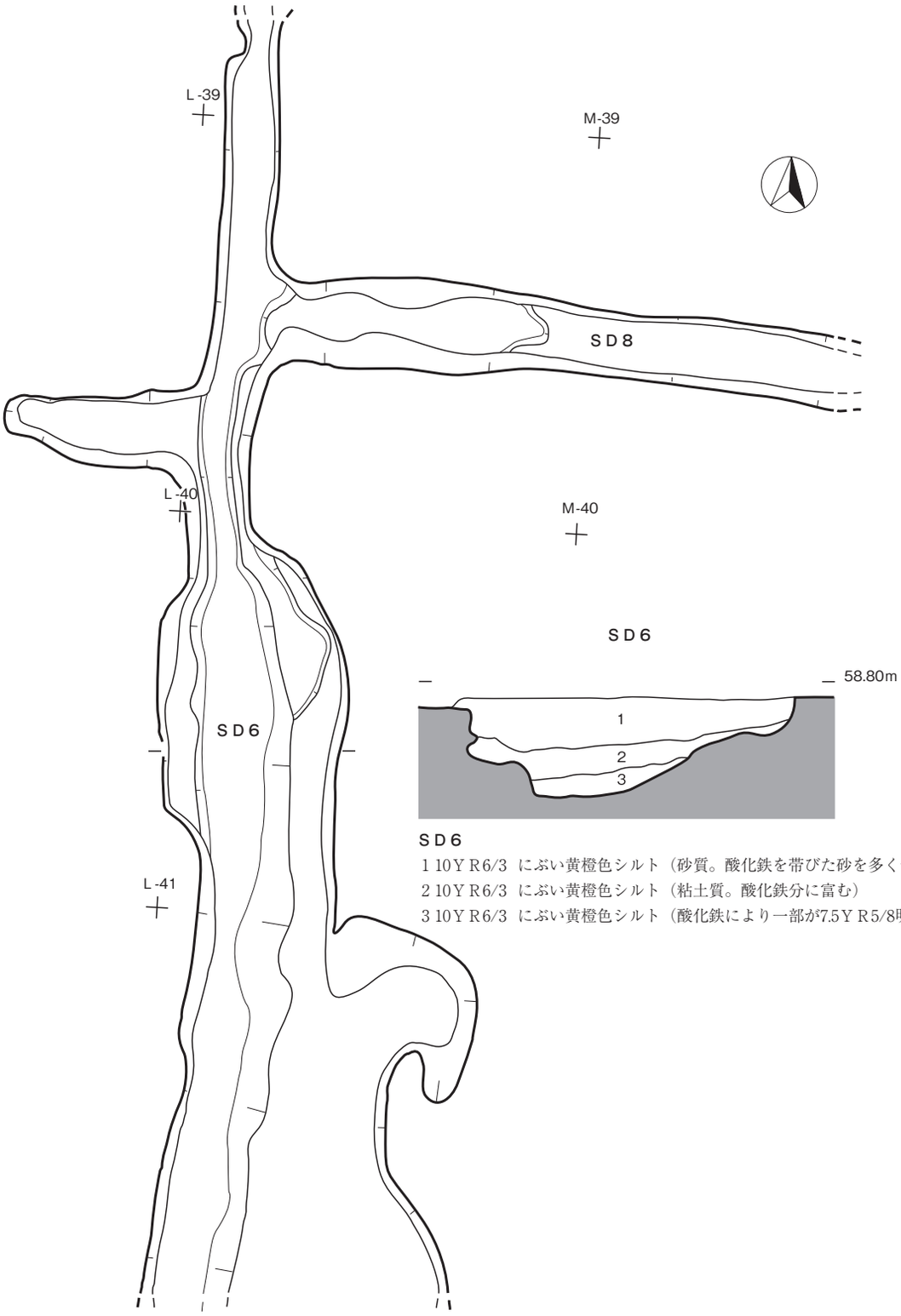
第33図　ＳＤ１・２・４溝跡・ＳＫ３土坑（２）



SD2

1	2.5Y5/3	黄褐色シルト	
2	10YR4/1	褐灰色粘土	（粗砂混入。10BG青灰色5/1シルトをブロック状で５％混入）
3	N4/	灰色粘土	（炭化物を少量含む。２層をブロック状に10％混入）
4	2.5Y5/3	黄褐色シルト	（酸化鉄を帯びた砂を含む）
5	10YR4/2	灰黄褐色シルト	（10YR5/6黄褐色砂質シルトを斑状で３％混入。近代暗渠痕）
6	10YR3/2	黒褐色シルト	（10BG5/1青灰色シルトを斑状で30％混入。近代暗渠痕）
7	N4/	灰色粘質シルト	（10BG5/1青灰色シルトをブロック状で10％混入。近代暗渠痕）
8	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	（砂質。酸化鉄を帯びた砂を含む）

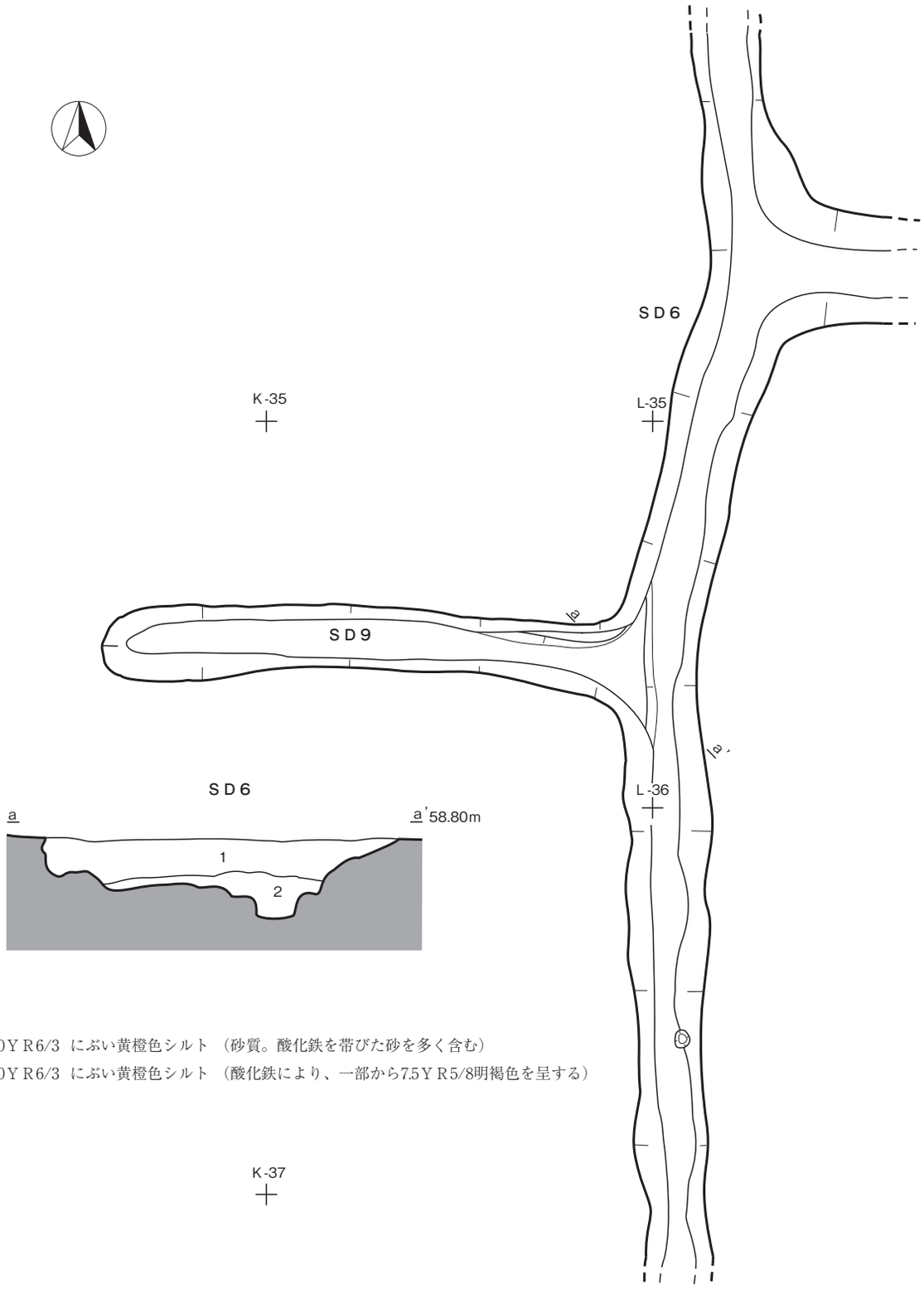
第34図　ＳＤ２溝跡



SD6
1 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（砂質。酸化鉄を帯びた砂を多く含む）
2 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（粘土質。酸化鉄分に富む）
3 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（酸化鉄により一部が7.5YR5/8明褐色を呈する）

平面図 0 2m 1：80
断面図 0 1m 1：40

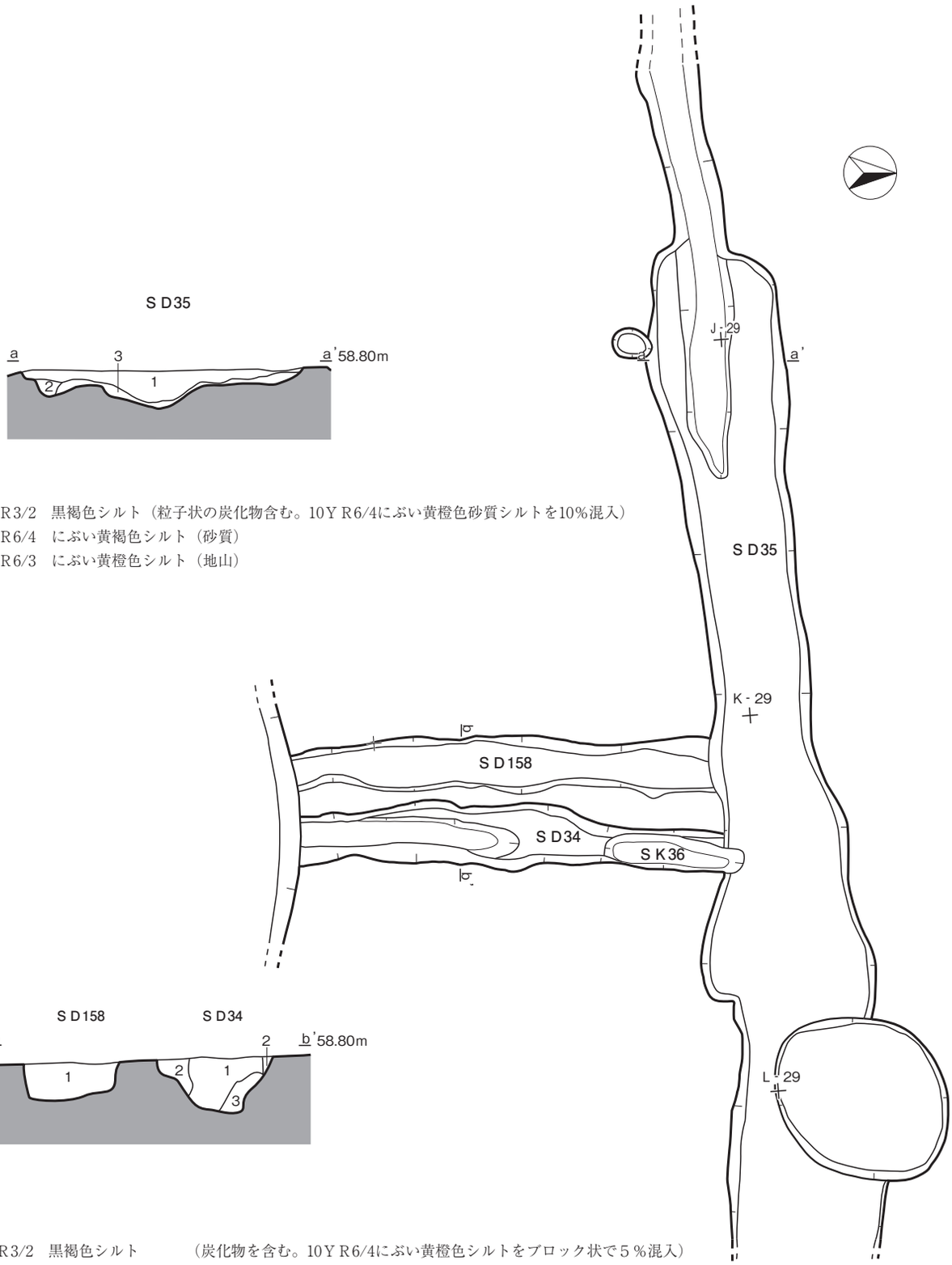
第35図　SD6溝跡（1）



SD6
1　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト （砂質。酸化鉄を帯びた砂を多く含む）
2　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト （酸化鉄により、一部から7.5YR5/8明褐色を呈する）

平面図 0 2m 1：80
断面図 0 1m 1：40

第36図　SD6溝跡（2）



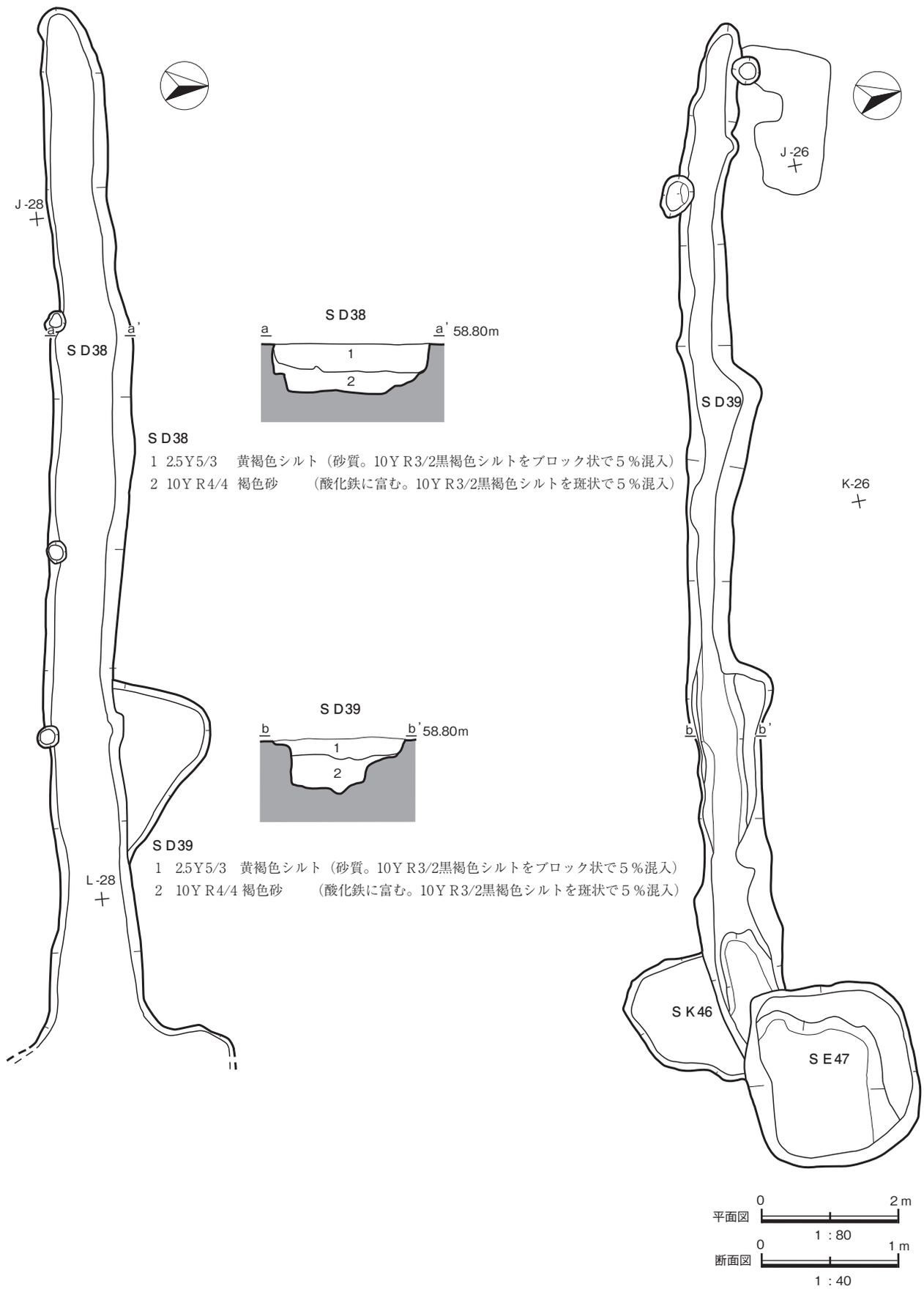
S D35
1　10Y R3/2　黒褐色シルト（粒子状の炭化物含む。10Y R6/4にぶい黄橙色砂質シルトを10%混入）
2　10Y R6/4　にぶい黄褐色シルト（砂質）
3　10Y R6/3　にぶい黄橙色シルト（地山）

S D34
1　10Y R3/2　黒褐色シルト　（炭化物を含む。10Y R6/4にぶい黄橙色シルトをブロック状で５％混入）
2　10Y R6/4　にぶい黄褐色シルト（やや粘土質。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10%混入。酸化鉄に富む）
3　10Y R3/3　暗褐色シルト　（10Y R4/6褐色シルトをブロック状で５％混入）

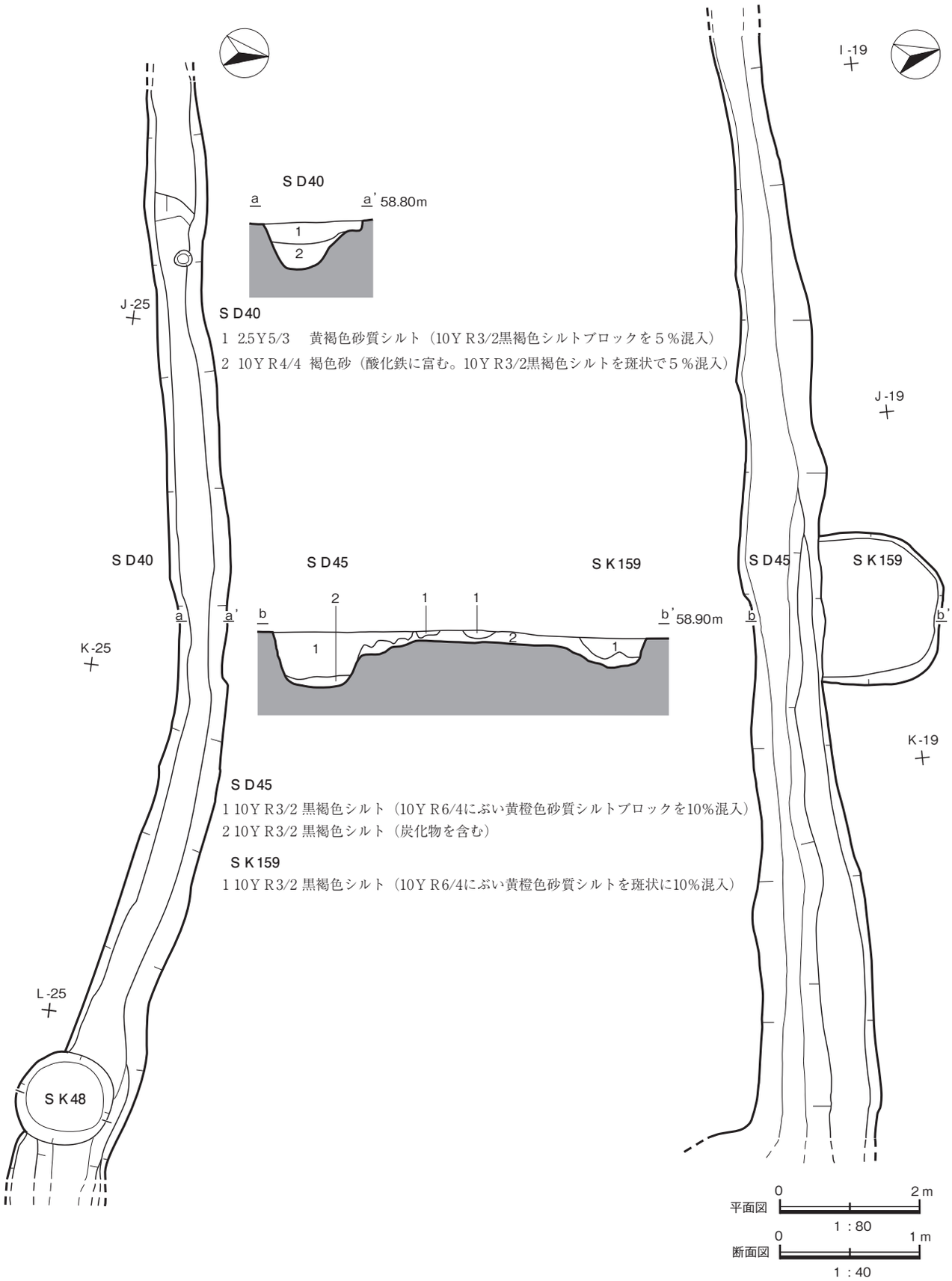
S D158
1　2.5Y5/3　黄褐色シルト　（ほぼ炭化した有機物・未分解有機物を含む）

平面図　0　2 m　1 : 80
断面図　0　1 m　1 : 40

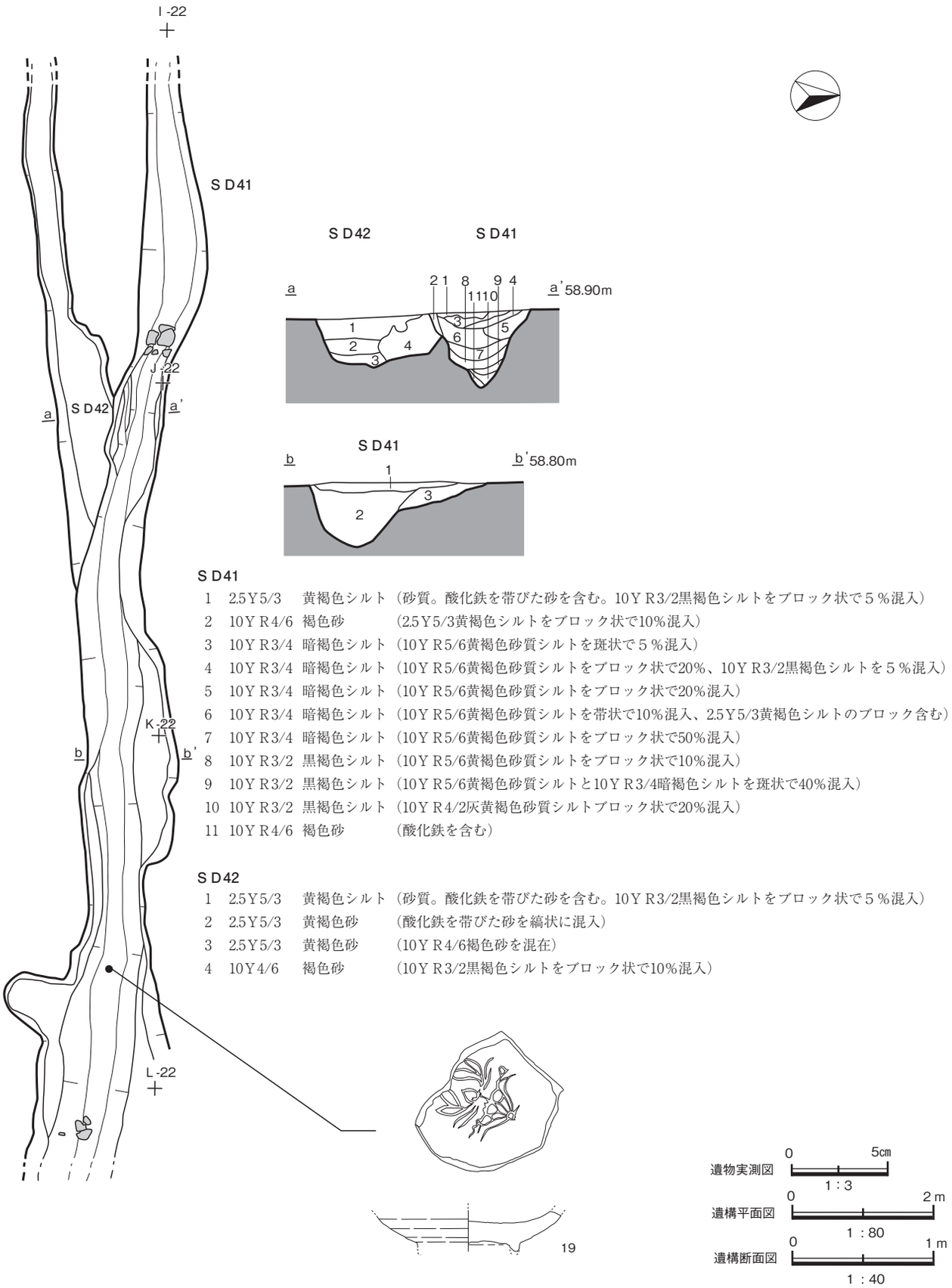
第 37 図　S D 34・35・158 溝跡



第 38 図　S D 38・39 溝跡



第 39 図　ＳＤ 40・45 溝跡・ＳＫ 159 土坑



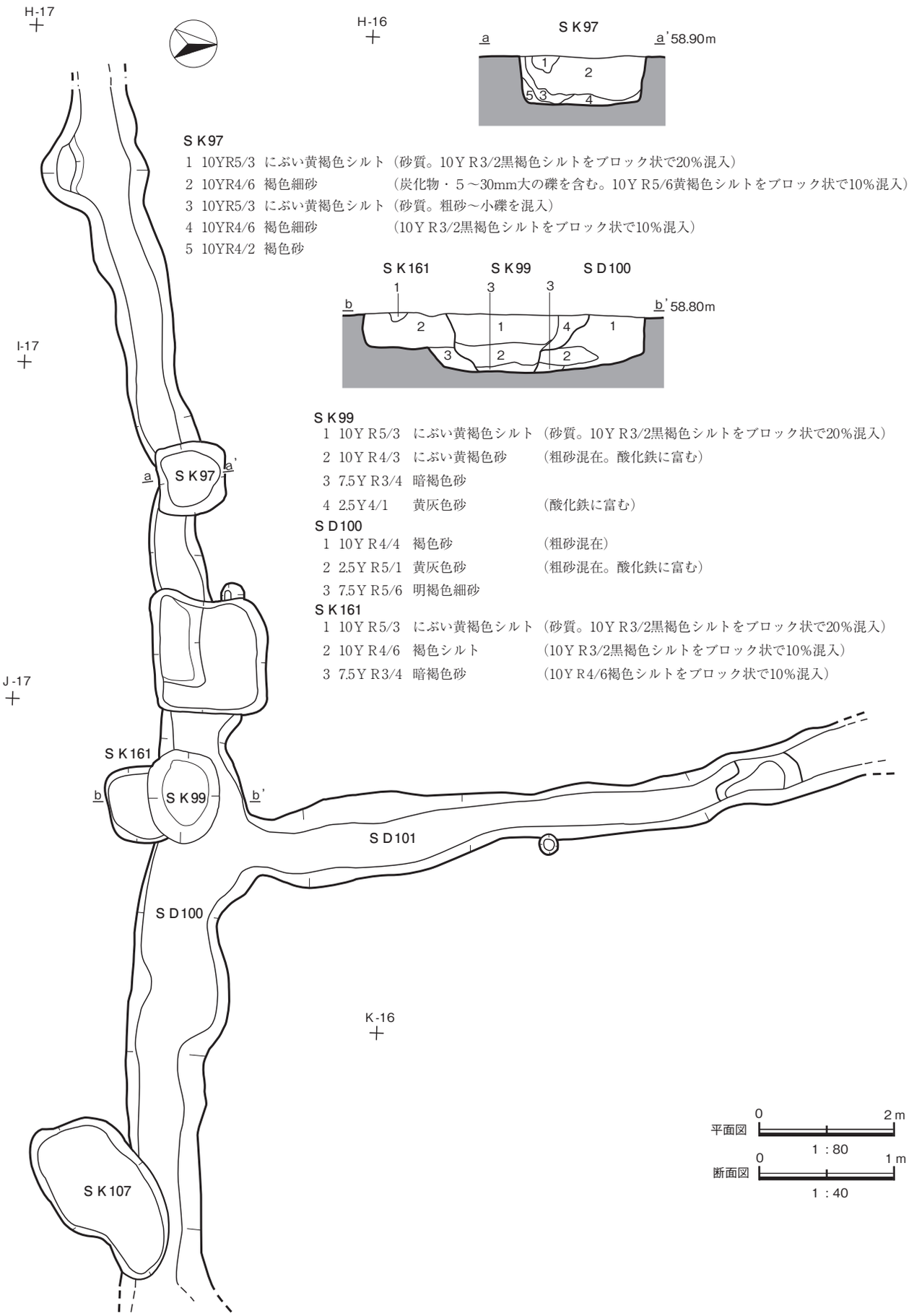
S D41

1	2.5Y5/3	黄褐色シルト	（砂質。酸化鉄を帯びた砂を含む。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で５％混入）
2	10Y R4/6	褐色砂	（2.5Y5/3黄褐色シルトをブロック状で10％混入）
3	10Y R3/4	暗褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で５％混入）
4	10Y R3/4	暗褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で20％、10Y R3/2黒褐色シルトを５％混入）
5	10Y R3/4	暗褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で20％混入）
6	10Y R3/4	暗褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトを帯状で10％混入、2.5Y5/3黄褐色シルトのブロック含む）
7	10Y R3/4	暗褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で50％混入）
8	10Y R3/2	黒褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
9	10Y R3/2	黒褐色シルト	（10Y R5/6黄褐色砂質シルトと10Y R3/4暗褐色シルトを斑状で40％混入）
10	10Y R3/2	黒褐色シルト	（10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトブロック状で20％混入）
11	10Y R4/6	褐色砂	（酸化鉄を含む）

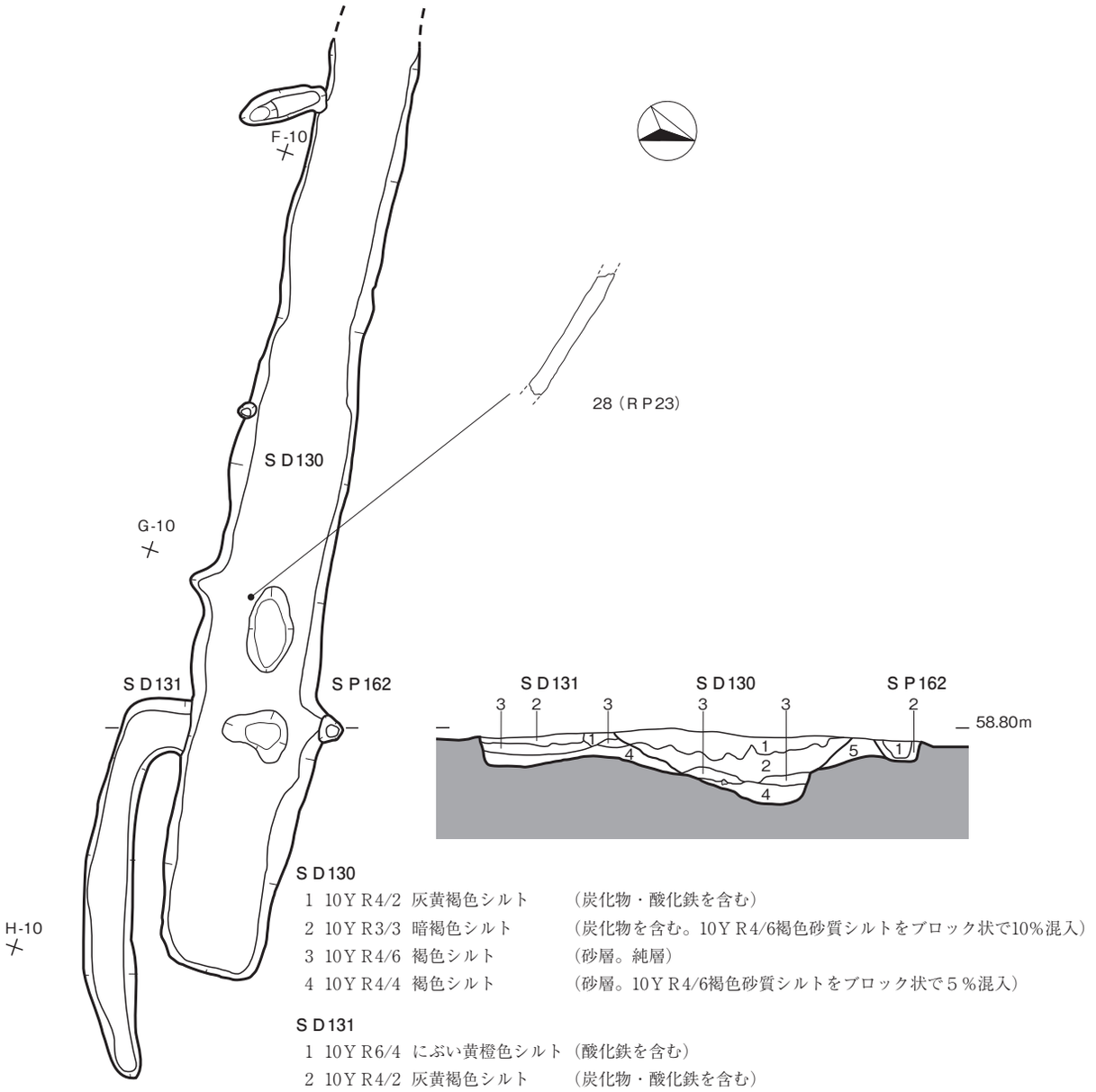
S D42

1	2.5Y5/3	黄褐色シルト	（砂質。酸化鉄を帯びた砂を含む。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で５％混入）
2	2.5Y5/3	黄褐色砂	（酸化鉄を帯びた砂を縞状に混入）
3	2.5Y5/3	黄褐色砂	（10Y R4/6褐色砂を混在）
4	10Y4/6	褐色砂	（10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10％混入）

第 40 図　S D 41・42 溝跡



第 41 図　S D 100・101 溝跡　S K 97・99・161 土坑



ＳＤ130

1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト	（炭化物・酸化鉄を含む）
2	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト	（炭化物を含む。10ＹＲ4/6褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
3	10ＹＲ4/6 褐色シルト	（砂層。純層）
4	10ＹＲ4/4 褐色シルト	（砂層。10ＹＲ4/6褐色砂質シルトをブロック状で５％混入）

ＳＤ131

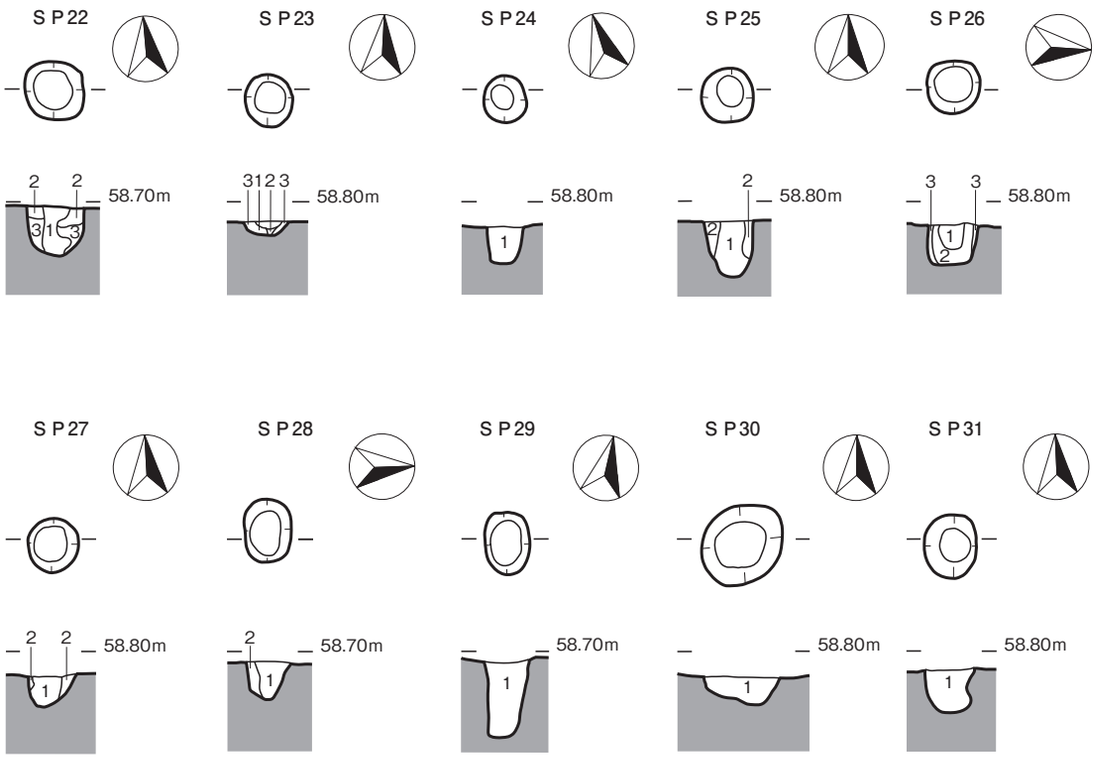
1	10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色シルト	（酸化鉄を含む）
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト	（炭化物・酸化鉄を含む）
3	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト	（砂～粗砂を混在。酸化鉄を含む）
4	10ＹＲ4/4 褐色砂	（５～30mm大の小礫を混入）
5	10ＹＲ4/6 褐色シルト	（10ＹＲ3/3暗褐色シルトをブロック状で５％混入）

ＳＰ162

1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト	（炭化物・酸化鉄を含む）
2	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト	（炭化物を含む。10ＹＲ4/6褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）

遺物実測図　0　5cm　1：3
遺構平面図　0　2m　1：80
遺構断面図　0　1m　1：40

第42図　ＳＤ130・131溝跡・ＳＰ161柱穴



S P 22
1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で10%混入）
2 10Y R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Y R3/2黒褐色シルトを斑状で５%混入）
3 10Y R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10%混入）

S P 23
1 10Y R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Y R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で10%混入）
2 7.5Y R4/4 褐色シルト　（砂質）
3 10Y R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Y R4/2灰黄褐色シルトを斑状で５%混入）

S P 24
1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で40%混入）

S P 25
1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（粒子状の炭化物を多く含む）
2 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で30%混入）

S P 26
1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（炭化物を含む）
2 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で20%混入）
3 10Y R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Y R3/2黒褐色シルトをブロック状で10%混入）

S P 27
1 10Y R4/2 灰黄褐色シルト　（やや粘土質。10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状で５%混入）
2 10Y R5/4 にぶい黄褐色シルト（砂質。10Y R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で５%混入）

S P 28
1 10Y R4/2 灰黄褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で50%混入）
2 10Y R5/6 黄褐色シルト　（砂質。10Y R4/2灰黄褐色シルトをブロック状で５%混入）

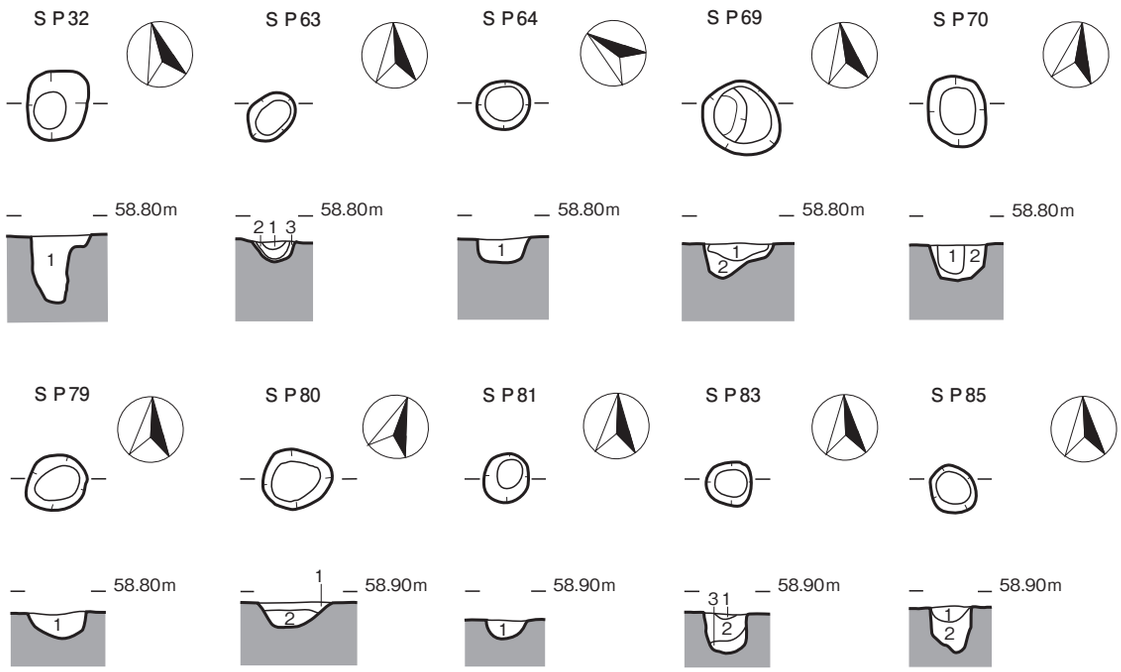
S P 29
1 10Y R3/3 暗褐色シルト　（10Y R4/6褐色シルトを斑状で５%混入）

S P 30
1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトを斑状で40%混入）

S P 31
1 10Y R3/2 黒褐色シルト　（10Y R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10%混入）

0　1 m
1 : 40

第 43 図　柱穴（1）



ＳＰ32
１ 10Ｙ R4/4 褐色シルト　（粒子状の炭化物を多く含む）

ＳＰ63
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で５％混入）
２ 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色シルト（酸化鉄によるサビを生じる。10Ｙ R3/2黒褐色シルトをブロック状で５％混入）

ＳＰ62
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R4/6褐色砂質シルトを斑状で10％混入）

ＳＰ69
１ 10Ｙ R2/1 黒色シルト　（10Ｙ R4/6褐色砂質シルトを斑点状で５％混入）
２ 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色シルト（酸化鉄が沈殿する）

ＳＰ70
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
２ 10Ｙ R3/3 暗褐色シルト　（10Ｙ R5/6黄褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）

ＳＰ79
１ 10Ｙ R3/2　黒褐色シルト　（10Ｙ R4/6褐色砂質シルトを斑状で10％混入）

ＳＰ80
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（しまりあり。炭化物を多く含む）
２ 10Ｙ R3/3 黒褐色シルト　（炭化物を含む。銭貨を少量出土）

ＳＰ81
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で５％混入）

ＳＰ83
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（純層）
２ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R4/6褐色砂質シルトをブロック状で10％混入）
３ 10Ｙ R6/3 にぶい黄橙色シルト（砂質。酸化鉄を縞状に含む）

ＳＰ85
１ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色シルトをブロック状で20％混入。層下位に酸化鉄が沈殿する）
２ 10Ｙ R3/2 黒褐色シルト　（10Ｙ R6/3にぶい黄橙色シルトを斑状10％混入）

0　1 m
1 : 40

第 44 図　柱穴（２）

Ⅳ　出土遺物

整理箱８箱分の遺物が出土し、主だったものを第45～56図に示した。遺物の種別には石器･土器･陶磁器と、石・木・金属の各製品がある。遺物の分布状況は前述したとおり、調査区中央～北半の東側に位置する遺構内からある程度まとまって出土した他、包含層出土のものは中央部東側で集中的に認められた。

掲載に当たっては遺構単位と包含層出土品とに分別したが、石器・金属製品・木製品については第56図に一括している。土器ではＳＫ58・152等の火山灰堆積遺構から出土した坏類に、全形が窺える資料が存在した。以下では､図版番号に従って遺物個々の概要を述べていく。

1　遺構内出土遺物

第45・46図は溝跡からの出土遺物である。１・９は石材が緑色凝灰岩の砥石で、四面とも砥ぎ面として使用されてり、先端部には敲打痕が認められる。須恵器は坏や壺の破片６点（２・３・10～12・26）を図化したが、いずれも細片で器形が窺えるものはない。２は回転糸切りの底部に、脚の短い高台が付く。３は長頸壺の口辺部片で、丸みを帯びた口縁を垂直につまみ上げている。甕の胴部片である10には外面に木目状のタタキ目、内面に格子状のアテ痕が付される。12は長頸壺の高台、26は外面に自然釉が掛かる肩部の資料である。鉢や擂鉢の須恵器系陶器は７点（４～６･22･24･25･29）を数える。４は一単位15条の卸目が刻まれた擂鉢で、内面が擂り下ろしにより円滑である。５の外面下半には、横位のヘラケズリ痕が明瞭に残る。22は口唇に平坦な面を有し、24の底部には静止糸切り痕が認められる。25は条・間隔とも幅の広い卸目が特徴的である。

７は袴腰形の香炉の底辺部と認識され、外面には自然釉が被る。８は白磁碗の底辺部で、内面には陽刻で花文が施される。13は中国産青磁碗の体部片であり、14～15世紀の所産と認識される。磁器口辺部資料の15は、染付による雨降り雷文が描写される。16には表面に灰白色の施釉が薄く塗られる。17は胎土に粗砂を多量に含んだ、赤焼土器甕または鉢の底部である。18は円筒形の中心が穿孔することから､土錘の一部と考えられる。19は龍泉窯系の青磁碗であり、見込みには蓮華が印刻される。20は丁寧なナデにより底部切離痕を消している。23は黒色土器甕の胴部片と目されるが、内面の黒色処理が被熱によりかなり薄れている。外面に縦方向のハケメ、内面には横位のミガキが観察される。

第47図には竪穴建物跡と井戸跡出土の遺物をまとめた。建物跡出土土器では、赤焼土器坏の底部片である30・34のうち、前者は焼成が堅牢であるのに対し、後者は軟質なために磨滅が著しい。31は砂岩を素材にした砥石であり、三面が砥ぎ面として使用されている。33の内面に見られるミガキは、２㎜幅で入念に施される。36は摩耗により判然としないが、底部外縁に三角形様の低い高台を貼り付けている。37～43は井戸跡出土の土器であり、須恵器･黒色土器･瓦質土器･陶磁器によって組成される。38の擂鉢は口縁下22㎜の位置より一単位10条の卸目が付され、一単位の幅は26㎜を測る。39は瀬戸美濃産の尊式花瓶であり、破片は頸部の付根の部位に当たるものと思われ、外面には被熱痕が見受けられる。40は須恵器壺の底辺部の一片で、短い高台が底部外縁に沿って付され、外見からは高台の存在が見分け難い。43は白磁の皿で、図上復元した口径は98㎜を測る。外面下半が無釉となる。

第48～54図には、土坑として登録した遺構の遺物を掲載した。44は須恵器系陶器の甕片で、内面には放射状に広がる菊花文風のアテ具が用いられる。47は擂鉢片と考えられ、内面に引かれた曲沈線が擂目となっている。48は瀬戸美濃産の筒形香炉である。施釉は外面に認められ、口縁内側の張り出し部位より、脚の取り付け上部までを対象とする。49・50はＳＫ55出土の赤焼土器で、有台坏の同一個体である。高台貼り付け後、底面は菊花状のナデ整形を受ける。51～57はＳＫ57から出土した７点の赤焼土器で、坏・堝・甕の器種が認められる。52は高台内面に49と同様の菊花文を施すタイプで、49より丁寧な調整が行われる。55は甕の底辺部で、外面には粗いヘラケズリ痕を残す。56・57は堝の口縁

～体部の資料で、56の外面下半部は煤で覆われる。

第49図58～78は、ＳＫ58の一括出土土器である。須恵器の壺、赤焼土器の坏・鉢・堝、それに黒色土器の坏によって組成される。58は壺の体部下半に当たり、外面はヘラケズリの痕をナデ消している。59は丸みを帯びた低い付け高台を有し、破損後に底部の内外面ともに転用硯として二次利用されている。60～74は赤焼土器の坏類で、器壁が厚い75を鉢の底部として扱った。坏類は法量の相違から、口径が130～140㎜の値を有するもの（60～62等）と、160㎜を超える大形品（63・72）に二大別され、前者が主体を占める。これら二者とも底径は60㎜前後、器高が50㎜内外であるため、法量差は口径の大小に拠るところが大きいと判断される。76は赤焼土器堝の体部片で､内外面とも煤が付着しており、内面はハケメによって器面調整される。77・78は黒色土器の有台坏である。77は底辺部に稜を築く器形を呈し、直立した短い高台が貼り付く。

第50図82は龍泉窯系青磁碗の口辺部片で、外面の口縁直下に線描された蓮弁文が見られる。85は珠洲系陶器の甕片で、外面のタタキ目は綾杉文を描出している。86・87は瓦質の擂鉢であり、86は口縁に注口が付く片口形態を呈する。口唇には１条の沈線を巡らし、一単位８条からなる卸目は斜位に交差している。

第50図90～第52図106は、ＳＫ134から出土したのである。種別的には須恵器の甕、赤焼土器の皿、瓦質土器の擂鉢があり、量的には須恵器が主体を占める。須恵器は大甕の口辺や胴部片であり、92～95に示した肩部片の相違から、４個体以上の存在が知られる。胴部片に見られるタタキ痕には木目状の平行文や格子目文、アテ痕には青海波文･平行文･格子目文などのバリエーションがあり、内外面とも同種の成形具を用いる例（101・102）も認められる。104は長脚の高台を有する赤焼土器の皿である。105・106は同一個体の擂鉢で、口縁部形態から瓦質土器と判断され、底辺部の外面はヘラナデによって整形される。

第53図108～第54図137はＳＫ152出土の一括土器で、須恵器の貯蔵器、赤焼土器と黒色土器の食膳器、土師器の煮沸器で組成される。中でも赤焼土器の食膳器が圧倒的多数を占め、完形品も含んでいる。109は須恵器長頸壺の肩部片で、外面をカキメにより調整している。赤焼土器の坏類は器形的に見て、口縁部が外反するもの（110・123・122・124・125）と体部から口縁までが直線的なもの（111～117・126・127）に大別される。後者では体部が内弯ぎみのもの（111･113）を他と細分でき、また前者では口縁が短く外反するタイプ（123・124・125）と、体部上半が括れて口縁に至るもの（121・112）とに二分できそうである。法量的な大小では、小形を呈する111・114と大形の125・127、及びそれ以外の中形に区別できる。中形品は口径130～140㎜、底径50～60㎜の範疇に収まり、一般的な普及サイズと認識される。129～131の皿は器形・法量ともほぼ同一で、規格的な生産品として捉えられる。３点とも口縁部が外反して水平になる器形で､前出の104と異なり法量が大きい。130は底部の器壁が厚く作られることから、どっしりした重量感がある。132･133は内外面とも黒色処理された、両黒タイプの有台坏である。薄手の作りで、両面とも丹念なミガキにより器面調整され、ミガキは高台にまで及ぶ。134～137は土師器の甕片で、ハケメを施すものがある。135の口辺部片はナデ以外の調整を受けず、輪積み痕が明瞭に残る。

２　包含層出土遺物

第54図141～第55図には、包含層での取り上げ遺物を種別ごとに図示した。

141は周辺地域からの紛れ込みと思われる続縄文土器であり、長頸壺の口辺部資料と認識される。口縁部文様帯として口縁直下からＲＬの単節縄文を縦位に施す他、口唇にも施文される。その後、横走沈線による２条の連続山形文が引かれ、その下には口縁平行の沈線を１本引いている。胎土には石英が含まれ、外面には頸部を主体に煤が付着している。

144～150は赤焼土器無台・有台の坏で、図上復元にて全形が窺えるものも存在する。144は口径に対して底径が大振りなため、体部の傾斜がやや急角度で立ち上がる。146は口縁が短く外反して開くタイプの有台坏で、底部外縁に高台の剥落痕が見られる。147は推定口径が150㎜を測る大形品である。底部資料のうち、148は無台坏ながら体部下端に切り込みによる沈線を巡らせており、擬似高台風の器形を作り出している。149は長脚の高台から察して、皿の可能性も考えられる。151は赤焼

土器の堝片で、口縁が外側に肥厚し、内面に１条の沈線が認められる。

152 ～ 156 には黒色土器の坏類を図化した。153 は体部下半に膨らみをもつ、埦状の器形が想定される。155 は両黒タイプの土器であるが、二次的な焼成を受けており、ミガキ等の痕跡は確認できない。底径 36 ㎜規模の小形品で、削り出しによる高台を備える。

157 ～ 160 は須恵器系陶器の擂鉢もしくは鉢、161 は瓦質土器の擂鉢である。須恵器系陶器の大方は、珠洲を産地とするものかと思われる。底辺部片である 159 は底部の切離法が静止糸切りによるもので、内面の一端に加熱により黒く焦げた部分が見受けられる。160 は内削ぎ形態の口縁を有している。瓦質の擂鉢である 161 は焼成不良のために軟質で、割れ口の断面観察では中心部まで熱が伝わっていない状況が看取される。器面は内外面とも炭素吸着による黒色処理を施している。

162 は龍泉窯系青磁碗の口辺部で、切彫りにより内面に草花文、外面には蓮弁文が線描される。施釉は比較的厚く掛けられる。163 は内面が施釉された白磁碗の底部片で、高台は削り出しによって作られている。

164 ～ 173 には陶器の細片資料を掲載した。164 は天目茶碗の口辺部片である。体部に丸みを有して口縁部が垂直に立ち上がる器形を呈し、内面と外面の体部上半に鉄釉が施され、下半と底部は無地であったと理解される。168・169 は瀬戸美濃産の碗で内外面に灰釉が掛かる 168 はロクロ回転の水引き整形により、口縁部が開く平碗の口縁部である。169 は口縁部がわずかに残るのみであるが、釉薬の光沢から近世に相当すると認識される。

170 は内面には目跡が認められる。171 は透明釉が施された染付の碗で、外面に草花文が描写される。172・173 は鉄釉の陶器で、172 は砂目積み痕を有し、断面には漆継ぎの痕が見て取れる。

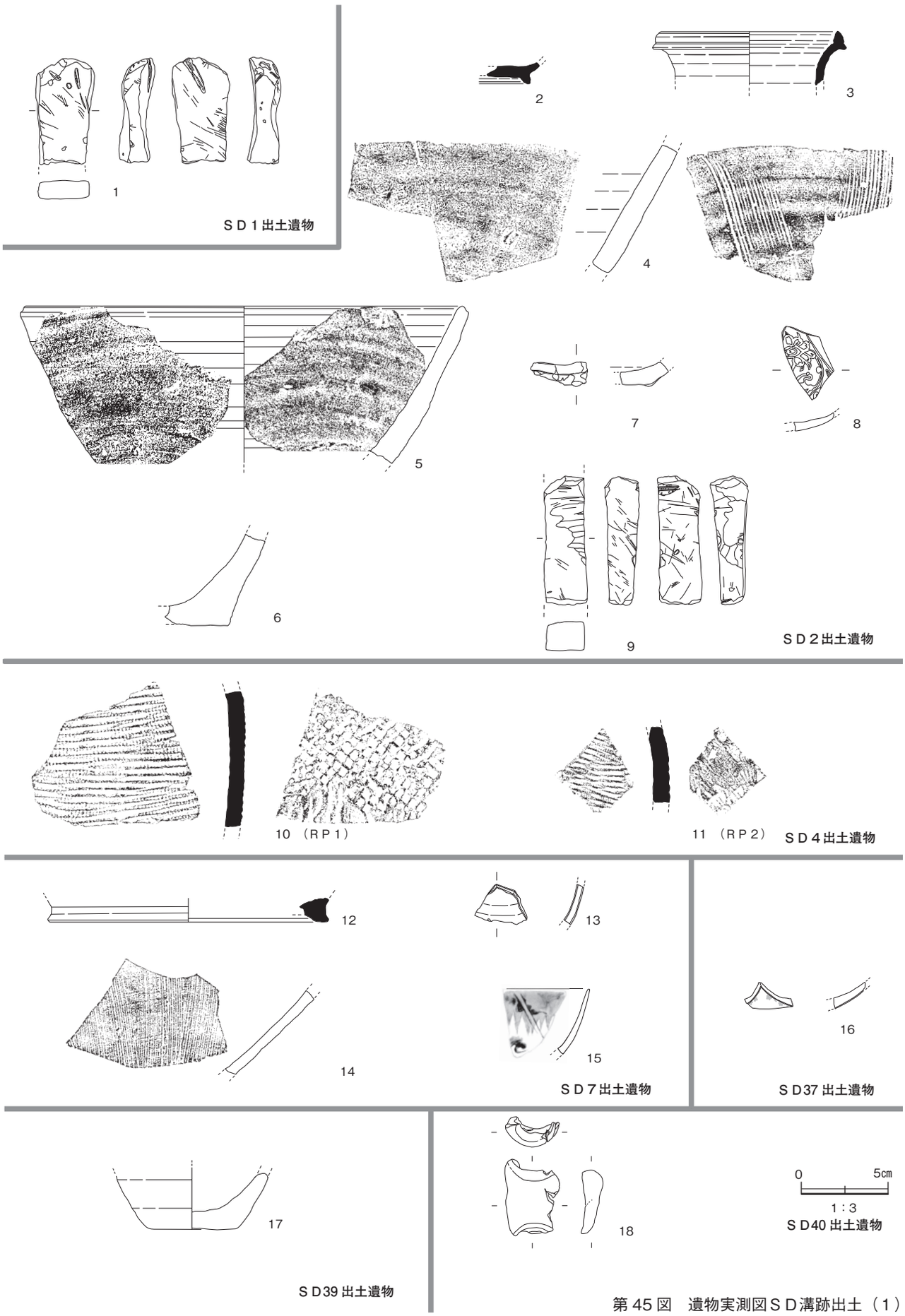
3　石器・貨幣・木製品

第 56 図には続縄文土器に付随すると考えられる石器５点、金属製品として貨幣２点、それに井戸跡からまとまって出土した木製品を掲載した。

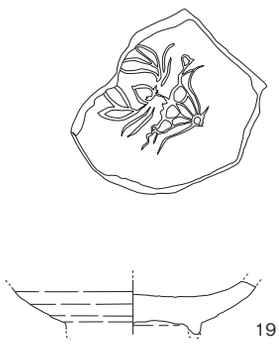
石器はいずれも未成品、もしくは辺部に微細な剥離痕が認められる剥片資料である。174 ～ 176 の３点が遺構内出土、177・178 は包含層から出土している。174 は横長剥片を素材とし、弯曲する末端部に微小な剥離を施して刃部を作り出してしる。175 は方形様の短冊形を呈し、背面側の末端部に押圧剥離が認められる。176 は横長剥片の一側辺に調整加工を施し、凹部の刃部（ノッチ）を作り出している。177・178 は尖頭部を有することから、石錐の役割が考えられる。177 は基部と尖頭部の区分が明瞭な形態で、尖頭部背面側の両側辺に加工が施される。棒状形態を呈する 178 は基部と錐部の境が不明確で、もう一方の先端も尖頭を形成している。

貨幣はＳＫ 148 から出土した２点の「皇宋通寶」(179・180）を図示した。２点とも原形を留めるものではなく、欠損部分もあるため遺存状況はよくない。北宋において 11 世紀中頃の鋳造年代が知られている。

木製品はＳＥ 108 から出土した４点がある。181 はヘラ状の製品で、身部は矢羽形に成形され、先端を山形に加工している。柄部は断面が隅丸長方形を呈し、木取りは板目である。182 は差歯形態の下駄の歯部で、歯先はさほど摩耗していない。183 は断面楕円形の長径が８㎜を測る箸の折損品である。184 は一寸角の方形杭の先端部位で、二方面から面取りを行って鋭角な先端に仕上げている。

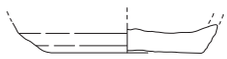


第 45 図　遺物実測図ＳＤ溝跡出土（1）

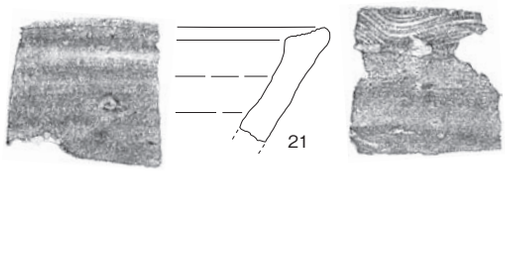


19

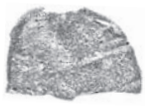
ＳＤ41 出土遺物

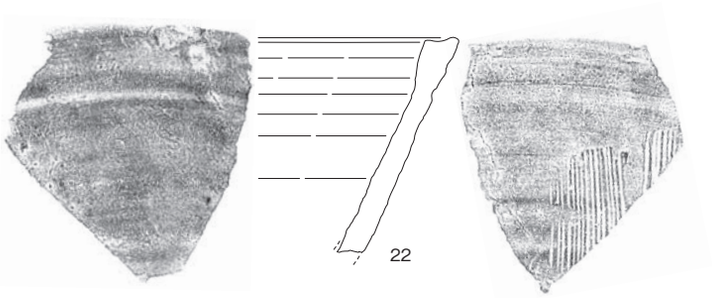


20



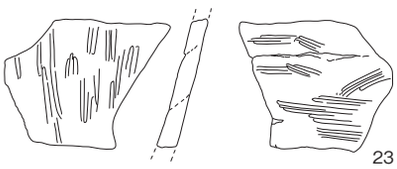
21



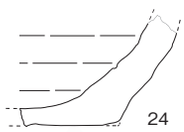


22

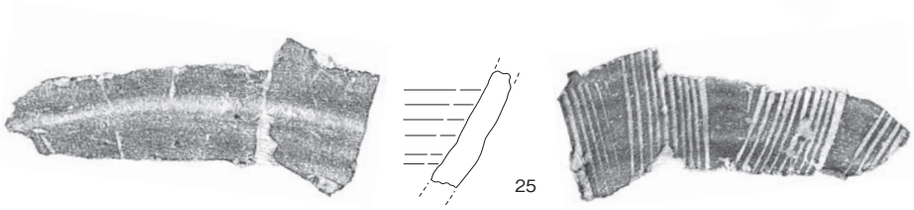
ＳＤ42 出土遺物



23

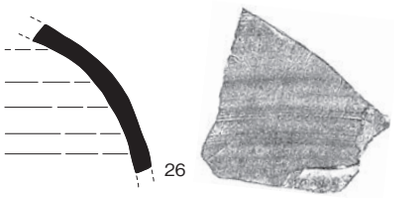


24

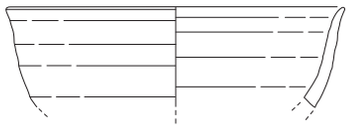


25

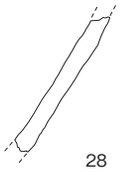
ＳＤ100 出土遺物



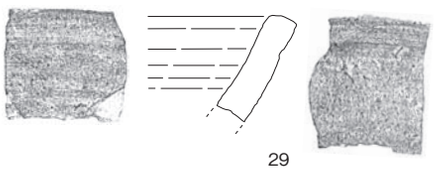
26



27



28 （ＲＰ23）



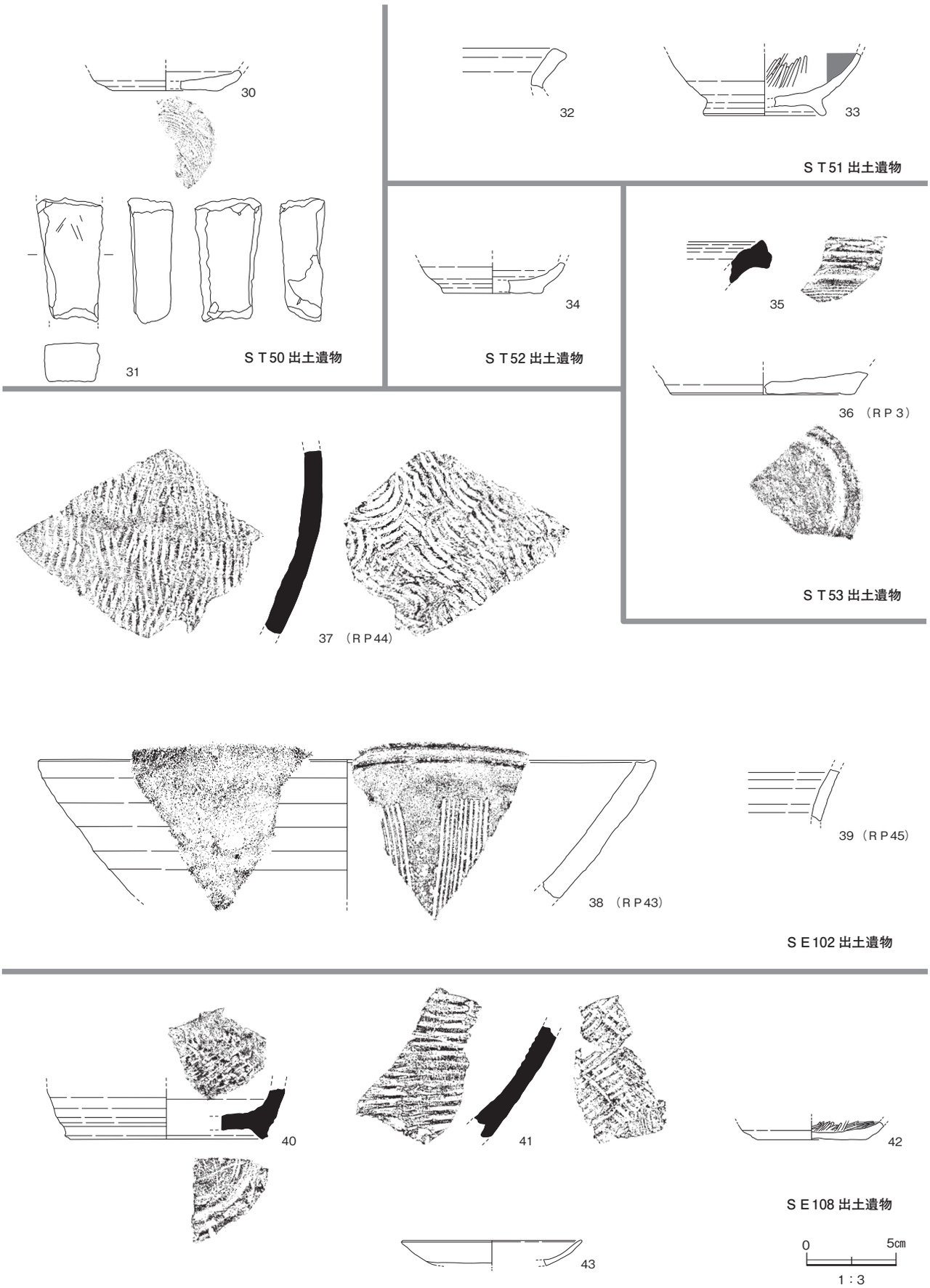
29

ＳＤ130 出土遺物

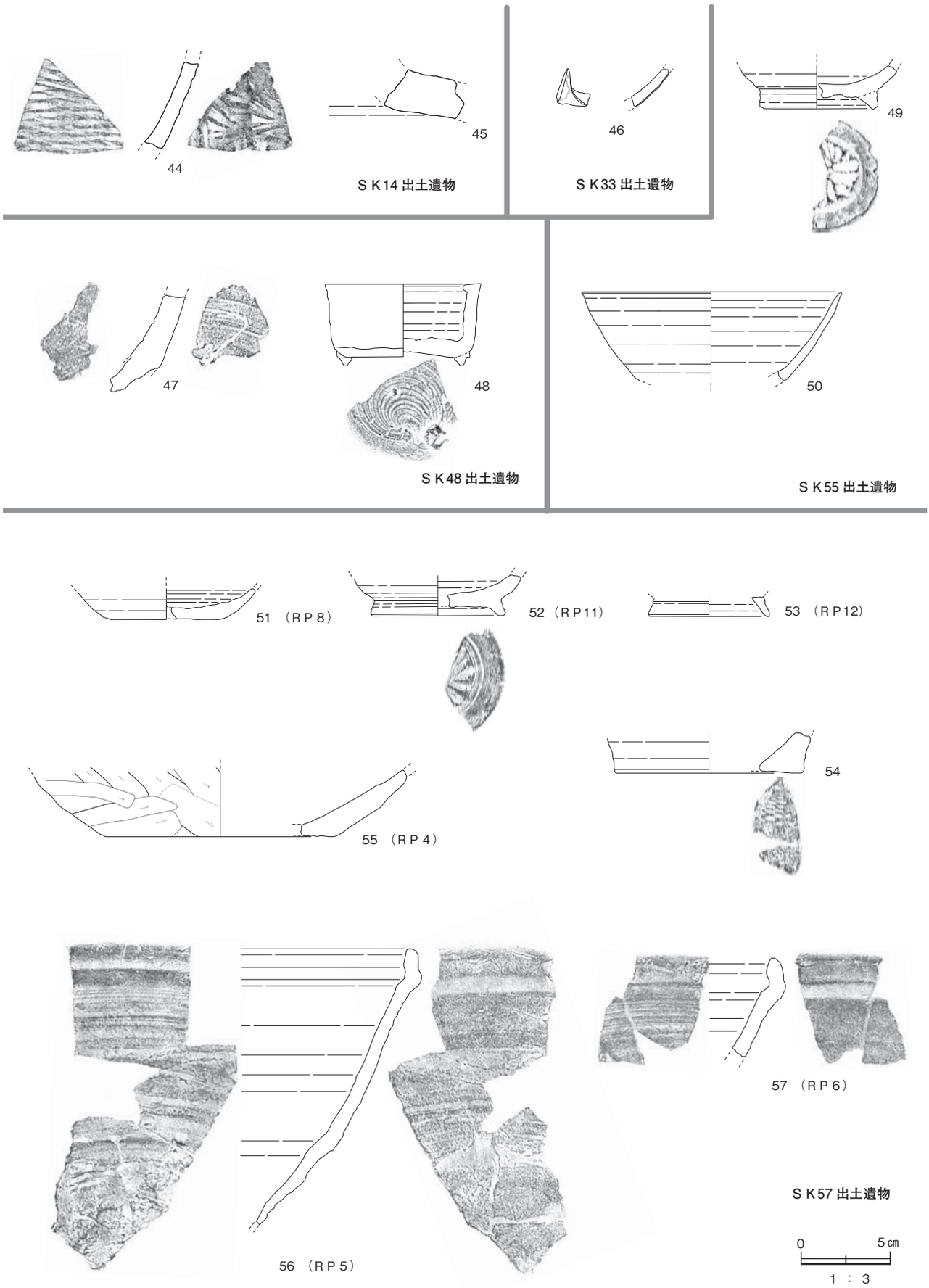
0　5cm

1：3

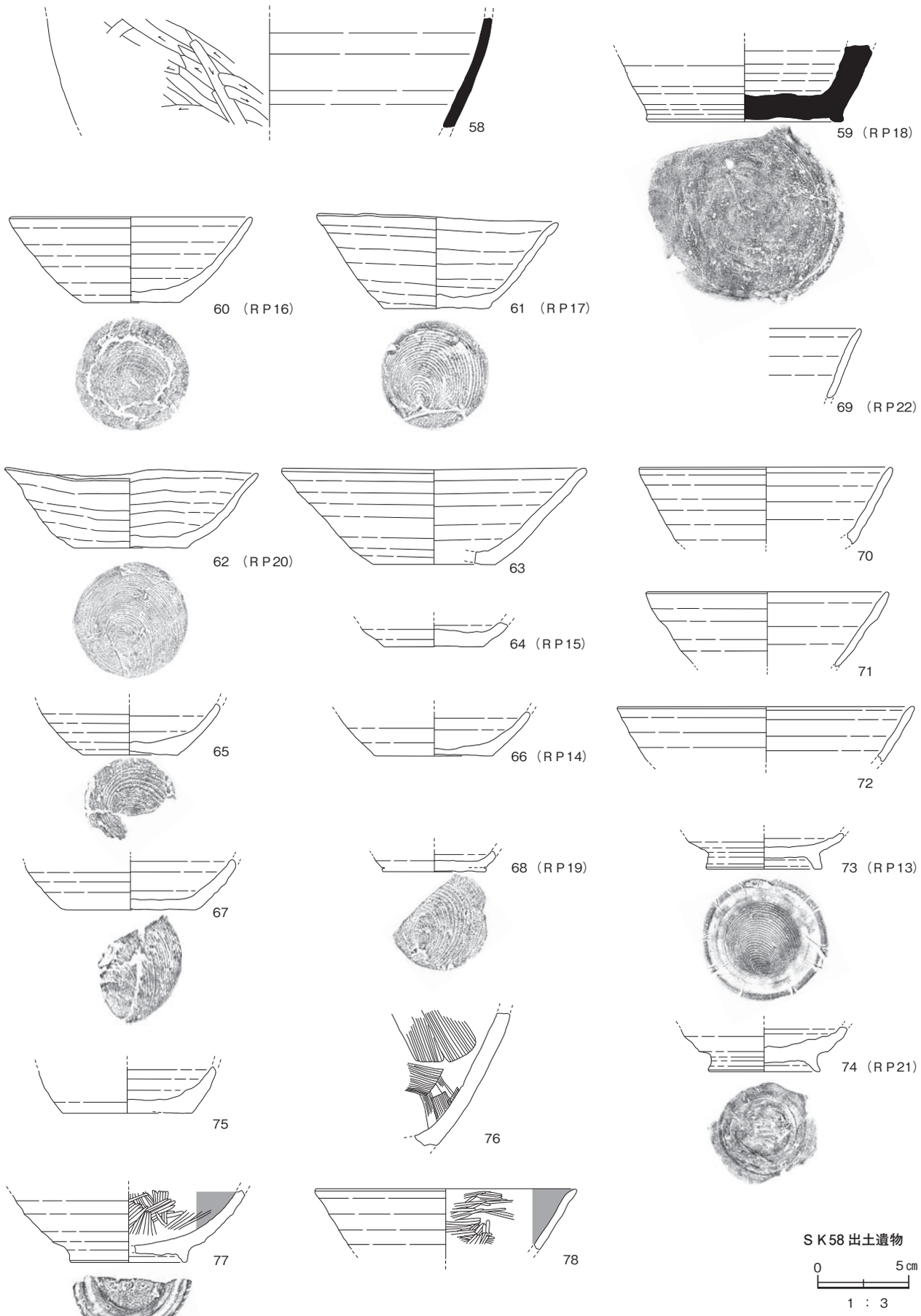
第 46 図　遺物実測図ＳＤ溝跡出土（２）



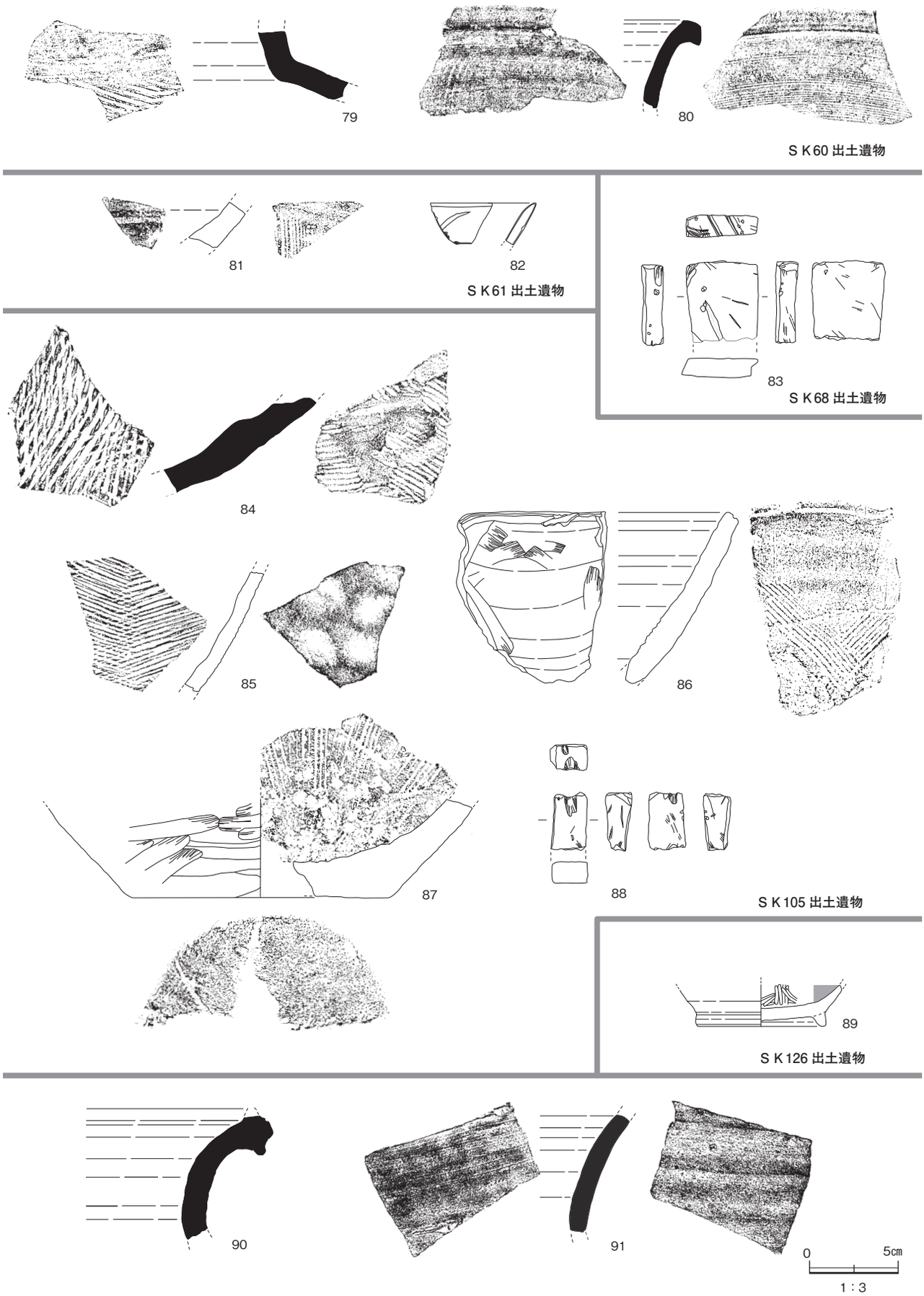
第 47 図　遺物実測図ＳＴ竪穴建物跡・ＳＥ井戸跡出土



第 48 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（１）



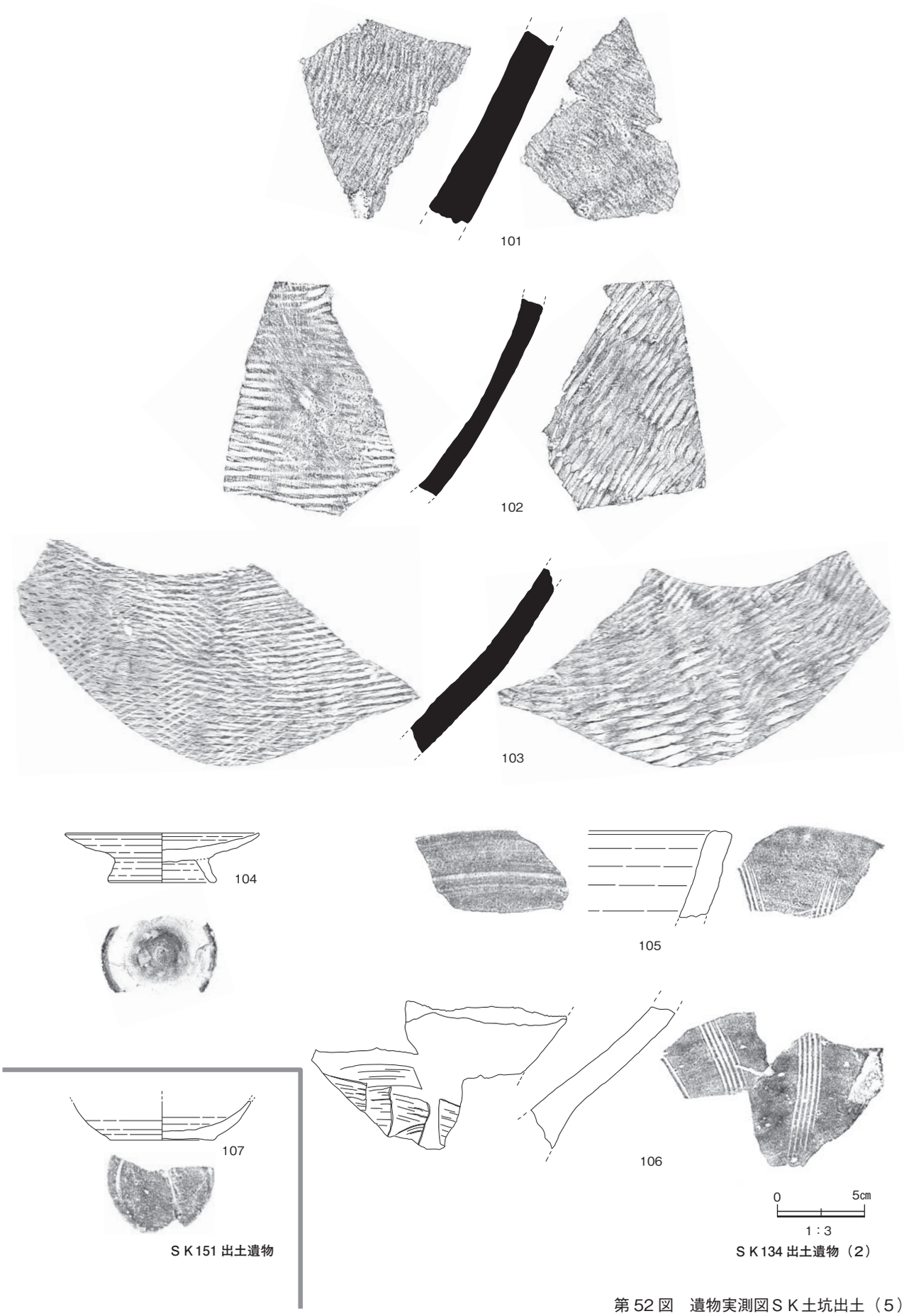
第 49 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（２）



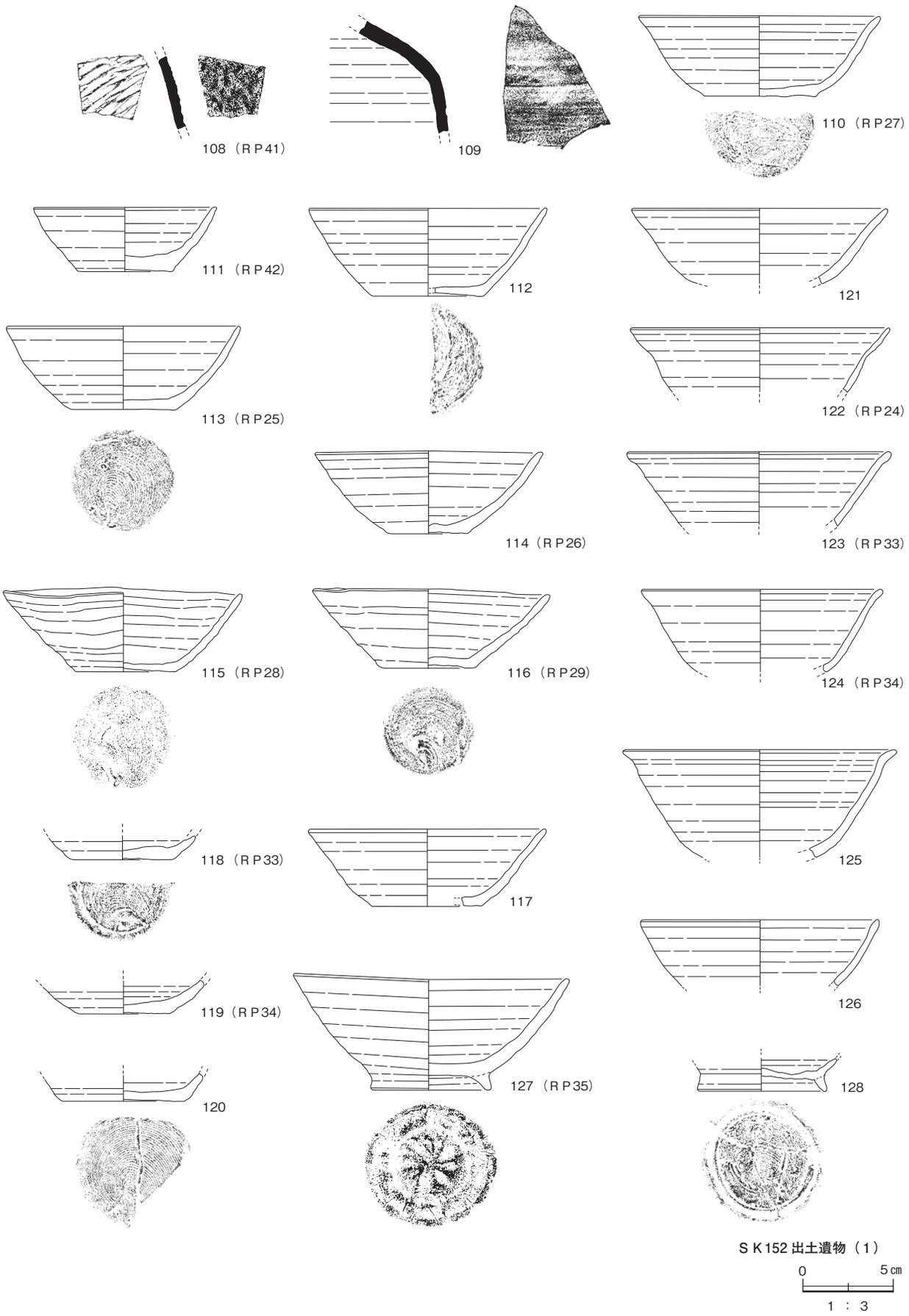
ＳＫ134 出土遺物（1）

第 50 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（3）

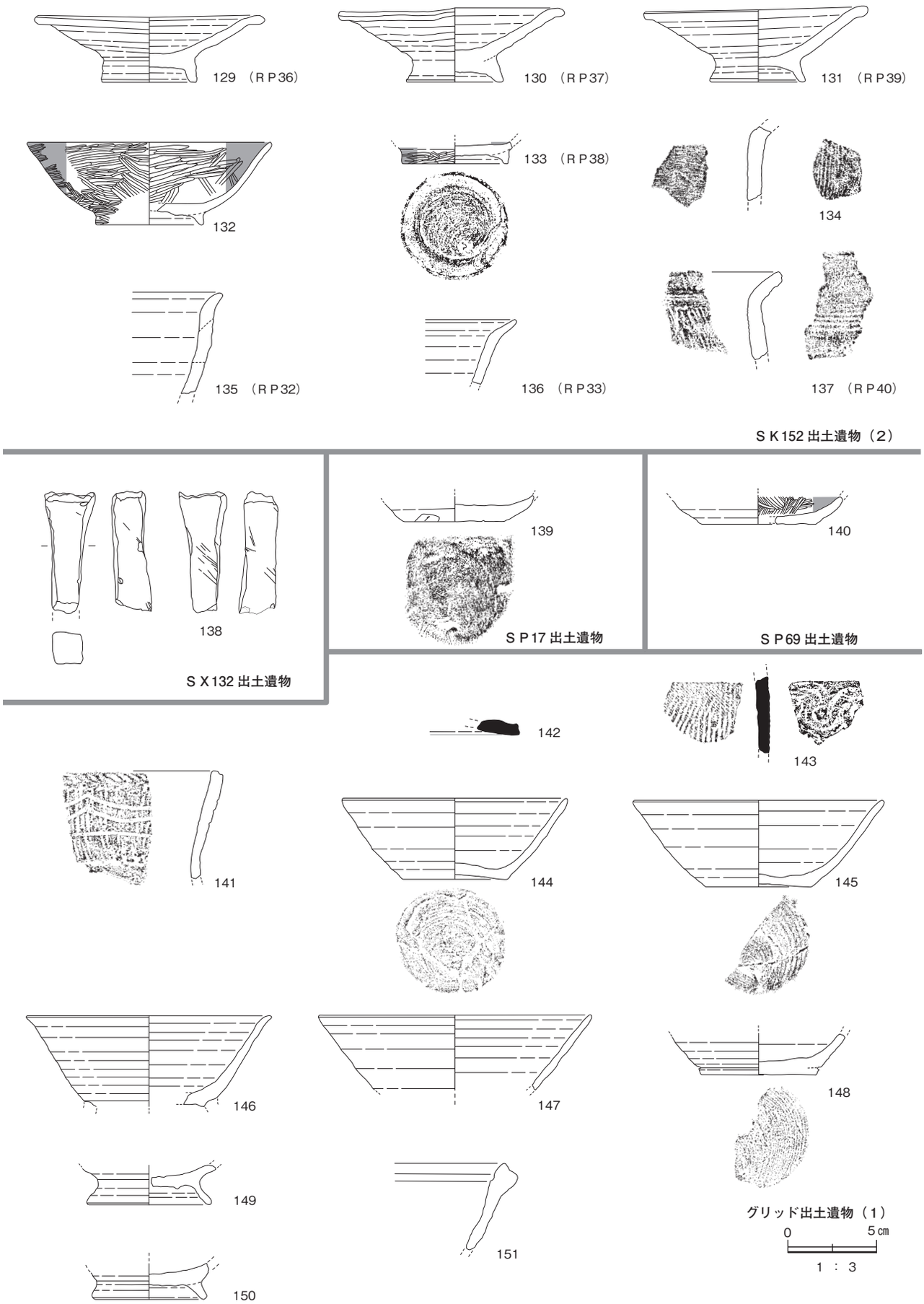
第 51 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（4）



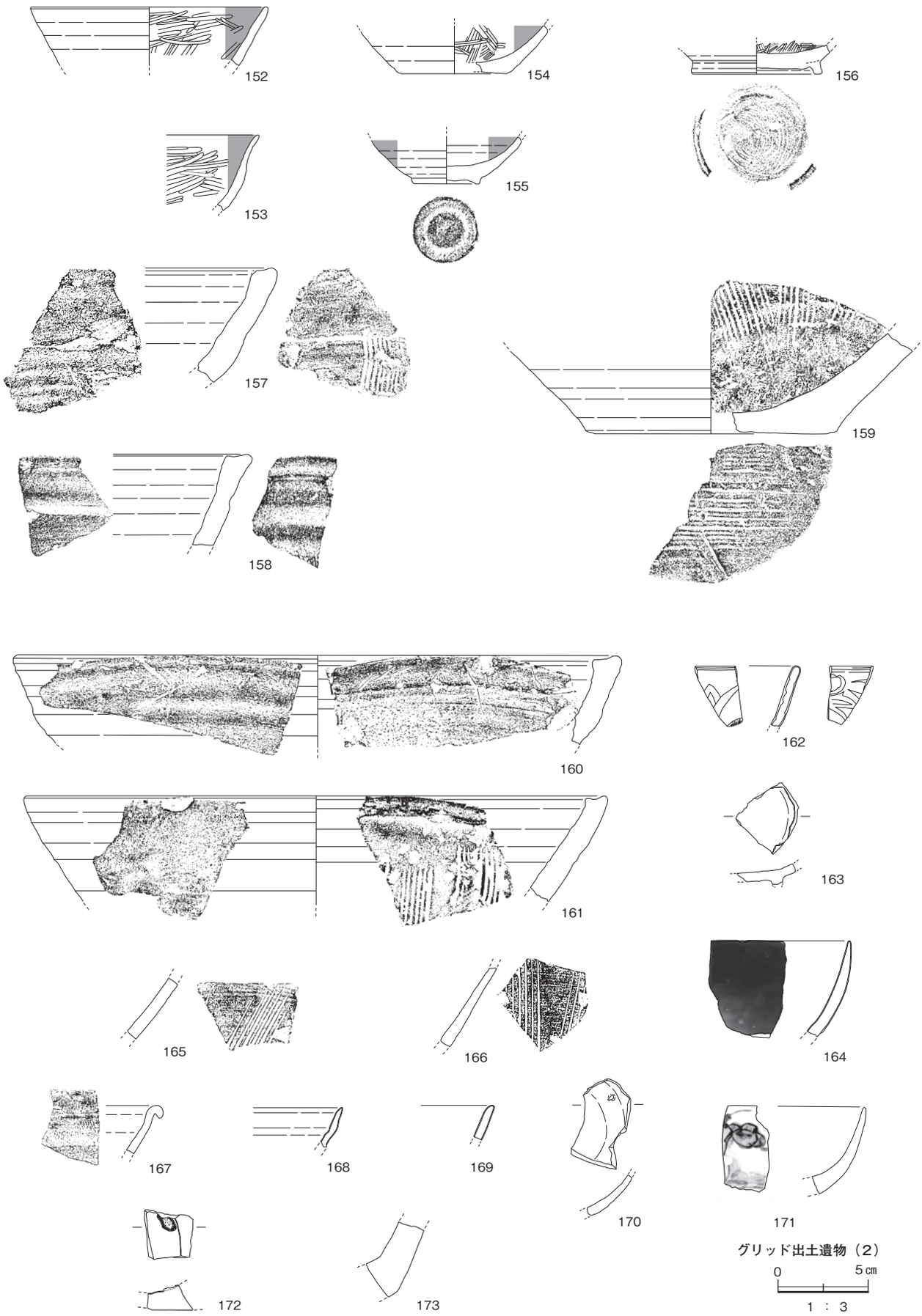
第 52 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（５）



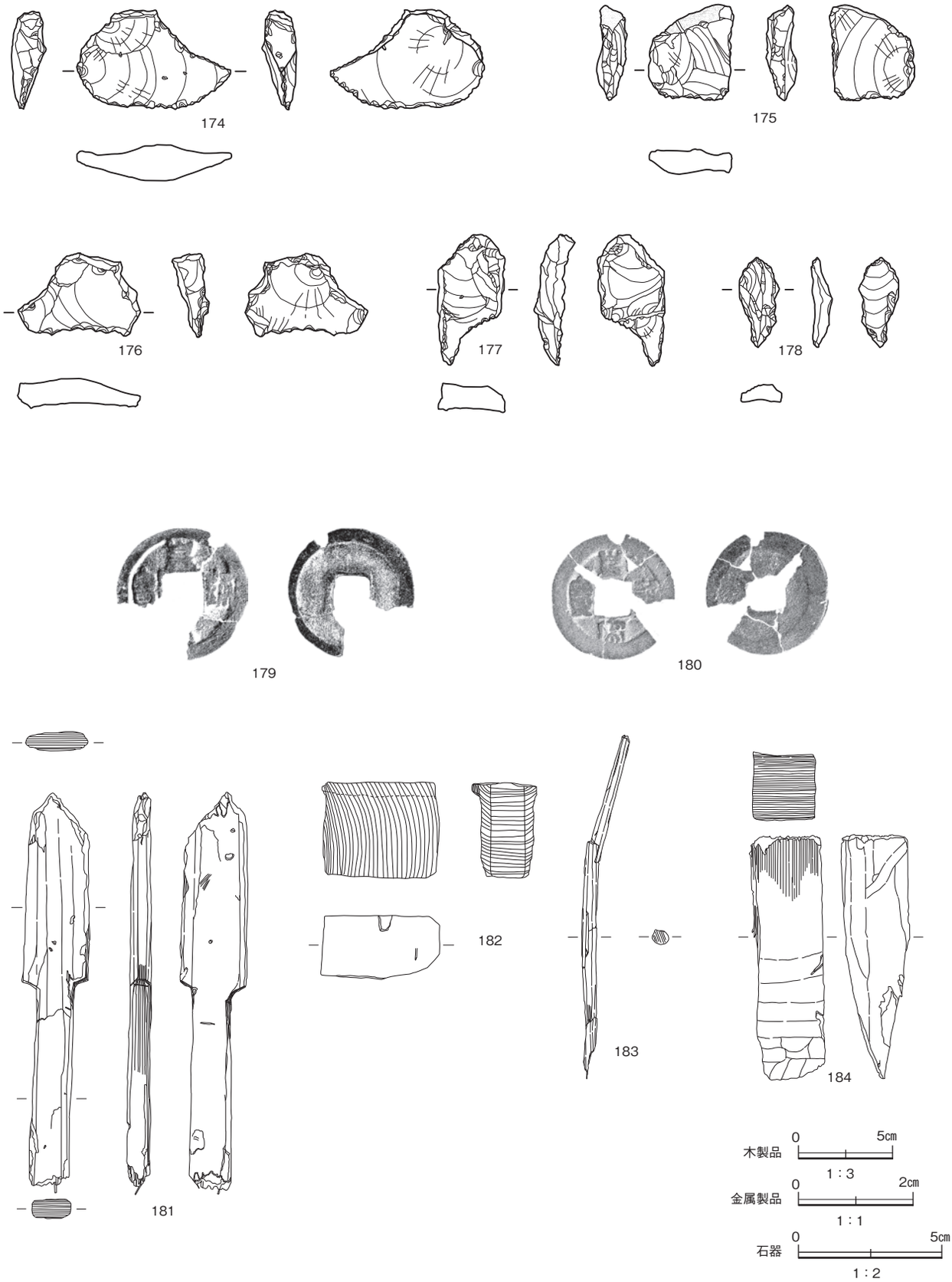
第 53 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（６）



第 54 図　遺物実測図ＳＫ土坑出土（７）・遺構外出土（１）



第 55 図　遺物実測図遺構外出土（2）



第 56 図　遺物実測図石器・金属製品・木製品

表６　遺物観察表（１）

凡例：計測値（　）は口径・底径は復元値を、器高・器厚の場合は、残存する最大値を示す
胎土（粗：粗砂、細砂：細、緻密：緻、白色粒：白、黒色粒：黒、石英：英、海面骨針：海）

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値（㎜） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様 外面	内面	底部	胎土	備考
45	1	SD1-F1	砥石		長 60	幅 33	厚 11		成形：研磨 4 面研磨				色調：10Y4/1 灰
	2	SD2-F1	須恵器	有台坏	-	-	(12)	(6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細 / 白：少	
	3	SD2-F3	須恵器	壺	-	-	(30)	(12)	ロクロ	ロクロ		緻 / 白：少	
	4	SD2-F2	須恵器系陶器	擂鉢	-	-	-	(12)	ロクロ	ロクロ		細 / 海：多	№22 同一個体か？
	5	SD2-F2	須恵器系陶器	鉢	-	-	(89)	(14)	ロクロ	ロクロ		細 / 英：少	
	6	SD2-F3	須恵器系陶器	鉢	-	-	(52)	(26)	ロクロ	ロクロ		細 / 白：多 / 海：多	
	7	SD2-F1	陶器	香炉	-	-	(14)	(11)	ロクロ	ロクロ		緻	
	8	SD2-F2	白磁（白磁Ｂ群）	皿	-	-	-	(5)	ロクロ	花文陽刻		緻 / 黒：少	施釉色調：5GY8/1 灰白
	9	SD2-F3	砥石		長 703	幅 220	厚 19		成形：４面研磨				色調：10Y4/1 灰
	10	SD4-Y	須恵器	甕	-	-	-	(9)	タタキ	アテ		細 / 白：少	RP1
	11	SD4-Y	須恵器	甕	-	-	-	(9)	タタキ	アテ		細 / 礫：微	RP2
	12	SD7-F1	須恵器	壺	-	-	(13)	(13)	ロクロ	ロクロ		緻 / 白：微	
	13	SD7-F1	青磁	碗	-	-	(22)	(5)	ロクロ	ロクロ		緻	施釉色調：内外面 2.5GY オリーブ灰 6/1
	14	SD7-F1	陶器	擂鉢	-	-	-	(5)	ロクロ	ロクロ		緻	櫛目：15 条（35 ㎜幅）
	15	SD7-F1	磁器	染付碗	-	-	(15)	(4)	雨降雷文	ロクロ		緻	産地不明
	16	SD37-F1	炻器	壺	-	-	-	(6)	ロクロ	ロクロ		緻	施釉色調：外面 2.5GY8/1 灰白
	17	SD39-F2	赤焼土器	甕・鉢	-	54	(31)	16	ロクロ	ロクロ		粗 / 英：多	
	18	SD40-F2	土製品	土錘	44	35	-	12				細 / 白：少	
46	19	SD41-F2	青磁（龍泉窯系）	碗	-	(52)	(21)	(13)	ロクロ	ロクロ		緻 / 黒：少	施釉色調：5GY7/1 明オリーブ灰
	20	SD42-F2	赤焼土器	無台杯	-	(60)	(12)	9				粗	
	21	SD42-F2	珠洲系陶器	擂鉢	-	-	(46)	(12)	ロクロ	ロクロ		細 / 海：少	
	22	SD42-F1	須恵器系陶器	擂鉢	(252)	-	(95)	(14)	ロクロ	ロクロ		細 / 海：多	櫛目 15 条　№4 同一個体か？
	23	SD100-F1	黒色土器	甕	-	-	-	8	ロクロハケメ	ミガキ		細 / 黒：少	
	24	SD100-F1	須恵器系陶器	鉢	-	-	(44)	(19)	ミガキ	ロクロ		細 / 海：多	
	25	SD100F1	須恵器系陶器	擂鉢	-	-	(46)	(11)	ロクロ			粗 / 海：多	櫛目：10 条（33 ㎜間）
	26	SD130-F1	須恵器	壺	-	-	-	(7)	ロクロ	ロクロ		細 / 黒：多	
	27	SD130-F1	赤焼土器	坏	(136)	-	-	(6)	ロクロ	ロクロ		細 / 黒：微	
	28	SD130-Y	赤焼土器	甕	-	-	-	(8)	ロクロ	ロクロ		細 / 黒：多	ＲＰ 23
47	29	SD130-F1	須恵器系陶器	鉢	-	-	(43)	(13)	ロクロ	ロクロ		細 / 英：少	
	30	ST50-F2	赤焼土器	無台杯	-	(60)	(11)	(7)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細 / 白：微	
	31	ST50-F2	砥石		長 68	幅 37	厚 26		成形：３面研磨				色調：10Y7/1 灰白
	32	ST51-F1	赤焼土器	鉢	-	-	23	8	ロクロ	ロクロ		粗 / 英：少	
	33	ST51-F1	黒色土器	有台坏	-	(66)	(22)	(8)	ロクロ	ミガキ	回転糸切	細	
	34	ST52-F1	赤焼土器	無台杯	-	(54)	(17)	(8)	ロクロ	ロクロ		細 / 黒：多	
	35	ST53-F1	須恵器	甕	-	-	(23)	(12)	ロクロ	ロクロ		細	
	36	ST53-Y	赤焼土器	甕	-	(100)	-	(12)			高台	粗	ＲＰ３
	37	SE102-F1	須恵器	甕	-	-	-	(11)	タタキ	アテ		粗 / 白：多	ＲＰ 44
	38	SE102-F2	瓦質土器	擂鉢	(340)	-	(7.6)	13	燻し	燻し		緻	ＲＰ 43 櫛目：10 条（26 ㎜幅）
	39	SE102-F1	陶器（瀬戸美濃産）	尊式花瓶	-	-	-	(6)	ロクロ	ロクロ		緻	ＲＰ 45　施釉色調：内面 7.5Y6/3 オリーブ黄
	40	SE108-F1	須恵器	壺	-	-	(33)	(13)	ロクロ		高台	粗	
	41	SE108-F2	須恵器	甕	-	-	-	(12)	タタキ	アテ		細 / 赤：少	
	42	SE108-F2	黒色土器	無台杯	-	(60)	(10)	6	ロクロ	ミガキ		粗 / 黒：少	
	43	SE108-F3	白磁	皿	(98)	-	-	(3)	ロクロ	ロクロ		緻 / 黒：少	外面下部無釉
48	44	SK14-F2	須恵器系陶器	甕	-	-	-	(10)	タタキ	アテ		細 / 白：少	
	45	SK14-F2	須恵器系陶器	甕	-	-	-	(23)	ロクロ	ロクロ		細 / 海：少	
	46	SK33-F1	炻器	壺？	-	-	(20)	(6)	ロクロ	ロクロ		緻	施釉色調：外面 2.5GY8/1 灰
	47	SK48-F2	須恵器系陶器	擂鉢	-	-	-	(17)	ロクロ	ロクロ		細 / 海：多	内面に沈線１条
	48	SK48-F2	陶器（瀬戸美濃産）	筒形香炉	(85)	(56)	(45)	(9)	ロクロ	ロクロ		緻	施釉色調：7.5GY5/3 灰オリーブ
	49	SK55-F1	赤焼土器	有台坏	-	(60)	(24)	9	ロクロ	ロクロ	菊花ナデ	粗 / 海：少	№50 と同一個体
	50	SK55-F1	赤焼土器	有台坏	(140)	-	(49)	(5)	ロクロ	ロクロ		粗 / 海：少	№49 と同一個体
	51	SK57-F1	赤焼土器	無台杯	-	(60)	(17)	(8)	ロクロ	ロクロ		粗	ＲＰ８
	52	SK57-F1	赤焼土器	有台坏	-	(74)	(22)	(9)	ロクロ	ロクロ	菊花ナデ	緻 / 白：少	ＲＰ 11

表７　遺物観察表（２）

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値（㎜）口径	底径	器高	器厚	調整・文様 外面	内面	底部	胎土	備考
	53	SK57-F2	赤焼土器	有台坏	-	(66)	(11)	(5)	ロクロ	ロクロ		細	ＲＰ 12
	54	SK57-F1	赤焼土器	鉢	-	(102)	22	-	ロクロ		網代痕	細	
	55	SK57-F1	赤焼土器	甕	-	(128)	(37)	13	ロクロ	ロクロ		粗／英：多	ＲＰ４
	56	SK57-F1	赤焼土器	堝	-	-	151	10	ロクロ	ロクロ		粗／英：多	ＲＰ５　№.57と同一個体
	57	SK57-F1	赤焼土器	堝	-	(54)	-	(12)	ケズリ	ロクロ		粗／英：多	ＲＰ６　№.56と同一個体
	58	SK58-F1	須恵器	壺	-	-	-	(5)	ロクロ	ロクロ ナデ		細／海：微	
	59	SK58-F1	須恵器	壺	-	(104)	-	(14)	ロクロ	ロクロ	高台	細／白：少／海：微	ＲＰ 18　底部転用硯
	60	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	(130)	(52)	46	8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細／黒：少	内面底部に指頭痕
	61	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	132	56	49	7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細／英：少	ＲＰ 17
	62	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	136	60	44	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗／英：微	ＲＰ 20
	63	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	(166)	(66)	52	9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細	
	64	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	-	(54)	(13)	(9)	ロクロ	ロクロ	ナデ	細	ＲＰ 15
49	65	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	-	(52)	(27)	9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細／英：多／海：微	
	66	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	-	(64)	(23)	(8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗	ＲＰ 14
	67	SK58-F1	赤焼土器	無台杯	-	(70)	(27)	8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗	
	68	SK58-F2	赤焼土器	無台杯	-	56	(11)	(6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細／英：少	ＲＰ 19　底部貼付高台
	69	SK58-F2	赤焼土器	坏	-	-	-	(5)	ロクロ	ロクロ		細／英：少	ＲＰ 22
	70	SK58-F1	赤焼土器	坏	(138)	-	(41)	5	ロクロ	ロクロ		粗	
	71	SK58-F1	赤焼土器	坏	(130)	-	(40)	(4)	ロクロ	ロクロ		細／英：少	
	72	SK58-F1	赤焼土器	坏	-	-	(30)	5	ロクロ	ロクロ		細	
	73	SK58-F1	赤焼土器	有台坏	-	62	(19)	(6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細／海：微	ＲＰ 13　底部貼付高台
	74	SK58-F2	赤焼土器	有台坏	-	(60)	(14)	(1)	ロクロ	ロクロ		粗／赤：多	ＲＰ 21
	75	SK58-F1	赤焼土器	鉢	-	(70)	(25)	12	ハケ	ロクロ	回転糸切	細／黒：少	外面底部に被熱痕
	76	SK58-F1	赤焼土器	堝	-	-	(71)	(13.)	ロクロ	ハケメ		細	
	77	SK58-F2	黒色土器	有台坏	-	(62)	(38)	9	ケズリ	ミガキ	回転糸切	細／海：微	
	78	SK58-F2	黒色土器	坏	(140)	-	(32)	(4)	タタキ	ミガキ		粗／赤：少	
	79	SK61-F1	須恵器	甕	-	-	-	(14)	ロクロ	アテ		細／白：微	
	80	SK61-F1	須恵器	甕	-	-	-	(19)	ロクロ	ナデ		粗／礫：微	
	81	SK60-F1	須恵器系陶器	擂鉢	-	-	-	(14)	ロクロ	タタキ		粗／海：多	櫛目：11条以上
	82	SK61-F1	青磁（龍泉窯系）	碗	-	-	-	(5)	線描蓮弁文			緻	施釉色調：内外面7.5Y5/3灰オリーブ
	83	SK68-F1	砥石		長46	幅39	厚12		成形：５面研磨				色調：10GY7/1灰白
	84	SK105-F2	須恵器	甕	-	-	-	(19)	タタキ	アテ		細／白：微	
50	85	SK105-F1	珠洲系陶器	甕	-	-	-	9	タタキ	小礫アテ		細	珠洲産？外面：綾杉文タタキ
	86	SK105-F2	瓦質土器	擂鉢（片口鉢）	-	-	(95)	(15)	ロクロ ナデ	ロクロ		粗／英：多	櫛目：８条（20㎜幅）口唇部に１条沈線
	87	SK105-F2	瓦質土器	擂鉢	-	(140)	(55)	(25)	燻し	燻し		粗	櫛目７本（23㎜幅）
	88	SK105-F2	砥石		長325	幅200	幅15		成形：５面研磨				色調：10GY7/1明緑灰
	89	SK126-F1	黒色土器	有台坏	-	(75)	(22)	8	ロクロ	ミガキ		粗／英：少	
	90	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(13)	ロクロ	ロクロ		粗／黒：多	
	91	SK134-F2	須恵器	甕	-	-	-	(11)	ロクロ	ロクロ		細／黒：多	
	92	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(10)	タタキ	アテ		細／海：微	
	93	SK134-F2	須恵器	壺	-	-	-	(9)	タタキ	アテ		細／海：微	
	94	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	(79)	(17)	タタキ	アテ		細／黒：少	
	95	SK134-F1	須恵器	壺	-	-	-	(16)	タタキ	アテ		細／英：微	
51	96	SK134-F2	須恵器	甕	-	-	-	(13)	タタキ	アテ		微／白：少	
	97	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(8)	タタキ	アテ		細／黒：多	
	98	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(16)	タタキ	アテ		細	
	99	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(12)	タタキ	アテ		細／英：多	
	100	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(12)	タタキ	アテ		細／海：微	

表８　遺物観察表（３）

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値（㎜） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様 外面	内面	底部	胎土	備考
52	101	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(24)	タタキ	アテ		粗／黒：多	
	102	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(12)	タタキ	アテ		細／黒：微	
	103	SK134-F1	須恵器	甕	-	-	-	(15)	タタキ	アテ		細／海：微	
	104	SK134-F1	赤焼土器	有台皿	108	60	28	7	ロクロ	ロクロ		細／黒：少	
	105	SK134-F1	瓦質土器	擂鉢	(262)	-	(48)	(14)	ロクロ	ロクロ		細／英：少	№106と同一個体
	106	SK134-F1	瓦質土器	擂鉢	-	-	(80)	(24)	ロクロ ナデ	ロクロ		細／英：少	櫛目：５条（13㎜幅） №105と同一個体
	107	SK151-F1	赤焼土器	無台杯	-	58	(22)	8	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	粗／英：多	
53	108	SK152-F2	須恵器	甕	-	-	-	(4)	タタキ	アテ		細／白：微	ＲＰ41
	109	SK152-F1	須恵器	壺	-	-	-	(8)	ロクロ カキメ	ロクロ		緻／黒：少	
	110	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	(130)	(60)	44	6.5	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／白：少	ＲＰ27
	111	SK152-F2	赤焼土器	無台杯	(100)	52	35	9	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	粗	ＲＰ42
	112	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	(130)	(60)	48	5	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／黒：多	
	113	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	(126)	(56)	45	7	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／赤：少	ＲＰ25
	114	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	122	42	40	7	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	粗／英：多／ 赤：少	ＲＰ26
	115	SK152-F2	赤焼土器	無台杯	129	56	44	5	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／英：少／ 海：微	ＲＰ28
	116	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	129	48	43	6	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／英：多	ＲＰ29
	117	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	(128)	(58)	42	6	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／黒：微	
	118	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	-	(52)	(13)	(8)	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細	ＲＰ33
	119	SK152-F2	赤焼土器	無台杯	-	(50)	(18)	(7)	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細／黒：微	ＲＰ34
	120	SK152-F1	赤焼土器	無台杯	-	66	(14)	7	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細	
	121	SK152-F1	赤焼土器	坏	(140)	-	(41)	5	ロクロ	ロクロ		細／英：少	
	122	SK152-F1	赤焼土器	坏	(138)	-	-	(3)	ロクロ	ロクロ		細／赤：少	ＲＰ24
	123	SK152-F2	赤焼土器	坏	(132)	-	(41)	(4)	ロクロ	ロクロ		細／黒：少	ＲＰ33
	124	SK152-F2	赤焼土器	坏	(134)	-	(49)	(5)	ロクロ	ロクロ		細	ＲＰ34
	125	SK152-F1	赤焼土器	坏	(150)	-	(57)	(6)	ロクロ	ロクロ		粗	
	126	SK152-F2	赤焼土器	坏	(130)	-	(36)	(4)	ロクロ	ロクロ		細／海：微	
	127	SK152-F1	赤焼土器	有台坏	149	64	63	8	ロクロ	ロクロ	菊花 ナデ	粗／白：多／ 海：微	ＲＰ35
	128	SK152-F1	赤焼土器	有台皿	-	69	(23)	5	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	細	
54	129	SK152-F1	赤焼土器	有台皿	(122)	(52)	37	10	ロクロ	ロクロ		細／英：多	ＲＰ36
	130	SK152-F1	赤焼土器	有台皿	126	54	43	12	ロクロ	ロクロ		細	ＲＰ37
	131	SK152-F2	赤焼土器	有台坏	120	52	42	12	ロクロ	ロクロ		粗／英：少	ＲＰ39
	132	SK152-F1	黒色土器	有台坏	(134)	(60)	46	5	ミガキ	ミガキ		細／海：微	
	133	SK152-F2	黒色土器	有台坏	-	58	(12)	(8)	ミガキ	ミガキ	回転 糸切	細／海：少／ 白：微	ＲＰ38
	134	SK152-F2	土師器	甕	-	-	-	9	ハケメ	ハケメ		細／英：多	
	135	SK152-F2	土師器	甕	-	(72)	-	(7)	ロクロ	ロクロ		細／礫	ＲＰ32
	136	SK152-F2	土師器	鉢	-	-	(36)	(6)	ロクロ	ロクロ		緻／赤：微	
	137	SK152-F2	土師器	甕？	-	-	-	(9)	ハケメ	ロクロ ハケメ		粗／英：多	ＲＰ40
	138	SX132-F1	砥石		長78	幅28	厚18	成形：研磨　４面摩滅					色調：10Y5/1灰
	139	SP17-F2	赤焼土器	無台杯		56	(14)	(10)	ナデ			粗／黒：少	
	140	SP69-F1	黒色土器	無台杯	-	(62)	(15)	(5)	ロクロ	ミガキ		粗／海：微	
	141	Ｉ－20	続縄文土器	甕	-	-	(60)	(6)	連孤文 ＲＬ			粗／英：多	赤穴式
	142	Ｍ－19	須恵器	蓋	-	-	(70)	5	ロクロ			粗／黒：微	
	143	Ｉ－19	須恵器	甕	-	-	-	(6)	タタキ	タタキ		細／黒：多	

表９　遺物観察表（４）

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値（mm）口径	底径	器高	器厚	調整・文様 外面	内面	底部	胎土	備考
54	144	M - 21	赤焼土器	無台杯	126	58	45	7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗 / 英：多	
	145	N - 21 V	赤焼土器	無台杯	(138)	(58)	48	8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細 / 英：微	
	146	N - 24	赤焼土器	有台坏	(138)	40	50	6	ロクロ	ロクロ		粗 / 赤：少	
	147	M - 12	赤焼土器	坏	(150)	-	(42)	4	ロクロ	ロクロ		微	
	148	M - 20	赤焼土器	有台坏	-	(64)	(22)	9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗	貼付高台
	149	N - 24	赤焼土器	有台坏	-	68	22	7	ロクロ	ロクロ		細 / 白：多	
	150	J - 14	赤焼土器	有台坏	-	(60)	(20)	8	ロクロ	ミガキ		細	
	151	N - 23	赤焼土器	塊	-	-	(45)	(13)				粗 / 白：多	内面に沈線１条
55	152	N - 35	黒色土器	坏	(130)	-	(32)	(5)	ロクロ	ミガキ		細 / 黒：少	
	153	N - 22	黒色土器	坏	-	-	-	(5)	ロクロ	ミガキ		緻	
	154	M - 19	黒色土器	無台杯	-	(58)	(26)	10	ロクロ	ミガキ		細	
	155	M - 22	黒色土器	有台坏	-	36	30	8	ロクロ			細 / 海：少	
	156	N - 22	黒色土器	有台坏	-	(70)	(16)	(10)	ロクロ	ミガキ	回転糸切	細 / 白：少	貼付高台
	157	K - 21	須恵器系陶器	鉢	-	-	(50)	(14)	ロクロ	ロクロ		細 / 海：多	櫛目：15 条（30 ㎜幅）
	158	M - 22	須恵器系陶器	擂鉢	-	-	(62)	(13)	ロクロ	ロクロ		粗 / 海：少	櫛目：条以上
	159	J - 13	須恵器系陶器	擂鉢	-	(128)	(55)	(26)	ロクロ	ロクロ	静止糸切	細 / 黒：多	
	160	K - 16	須恵器系陶器	擂鉢	-	-	-	13	ロクロ	タタキ		細 / 海：多	
	161	K - 16	瓦質土器	擂鉢	(314)	-	(60)	(13)	燻し	燻し		細 / 英：少	櫛目：10 条（26 ㎜幅）
	162	I - 12	青磁（龍泉窯系）	碗	-	-	-	(6)	線描蓮弁文	線描草花文		緻	施釉色調：内外面 7.5Y5/3 灰オリーブ
	163	K - 16	白磁（白磁Ｄ群）	碗	-	-	(11)	(8)			削り高台	緻	
	164	M - 31	陶器	天目茶碗	-	-	(52)	(7)	ロクロ	ロクロ		緻	内外面：鉄釉　外面下部無釉
	165	N - 29	陶器	擂鉢	-	-	-	(7)	ロクロ	ロクロ		細	櫛目：６条以上
	166	N - 24	陶器	擂鉢	-	-	-	(6)	ロクロ	ロクロ		緻	櫛目：６条以上
	167	N - 21	陶器	擂鉢	-	-	-	(8)	ロクロ	ロクロ		緻	櫛目：６条以上　外面：灰釉
	168	I - 18	陶器（瀬戸美濃産）	平碗	-	-	-	(5)	ロクロ	ロクロ		緻	施釉色調：内外面 5GY7/1 明オリーブ灰
	169	N - 24	陶器（瀬戸美濃産）	碗	-	-	-	(5)	ロクロ	ロクロ		緻	施釉色調：内外面 5Y7/3 浅黄
	170	H - 17	陶器	碗	-	-	(22)	(5)	目積痕	ロクロ		緻	内外面に施釉 外面下部は無釉
	171	N - 23	磁器	染付碗	-	-	-	(9)	草花絵	ロクロ		黒：多	産地：肥前系か？
	172	K - 41	陶器	不明	-	-	(14)	(14)				緻	内面：鉄釉　断面：漆継ぎ痕
	173	G - 12	陶器	甕・鉢？	-	-	-	(22)				緻	内外面：鉄釉

表 10　石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	石材	計測値（mm）長	幅	厚	備考
56	172	SK36-F1	剥片	頁岩	34	53.5	12	未製品
	173	SK44-F1	剥片	頁岩	33	30	9	未製品
	174	ST130-F1	剥片	頁岩	29	43	9	未製品
	175	I - 28	剥片	頁岩	46	24	10	石錐？
	176	K - 19	剥片	頁岩	31	14	6	石錐？

表 11　金属製品観察表

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	銭名	鋳造国	計測値（mm）径	厚	重量	備考
56	178	SK148-F1	貨幣	皇宋通寶	北宋	22.5	1.0	1.6	篆書体　初鋳年 - 1038 年（寶元元）
	179	SK148-F1	貨幣	皇宋通寶	北宋	22	1.0	1.8	篆書体　初鋳年 - 1038 年（寶元元）

表 12　木製品観察表

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値（mm）長	幅	厚	重量（g グラム）
56	181	SE108-F2	木製品	棒状木製品	210	32	10	44
	182	SE108-F2	木製品	下駄歯	33	62	50	78
	183	SE108-F2	木製品	箸	178	8	7	5
	184	SE108-F2	木製品	杭	127	35	33	104

Ⅴ　理化学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

今回は、遺構から土器と共に出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代資料を得る。また、遺構の覆土で確認された火山灰（テフラ）とされる堆積物の分析を行い、テフラである場合には給源火山と噴出年代に関する情報を得る。さらに遺跡から出土した赤焼土器および須恵器の胎土分析を実施し、県内の分析例との比較を行った。

2　放射性炭素年代測定

A　試　　料

分析試料を表13に示す。いずれも平安時代～中世と考えられる４基の土坑と竪穴状遺構１基からそれぞれ出土した炭化材計５点である。試料にはNo. １～５までの番号が付されている。これらのうち、No. ２は竪穴状遺構のＳＴ50から出土した炭化材である。また、No. ３とNo. ５がそれぞれ出土したＳＫ58とＳＫ152の各土坑の覆土からは、火山灰とされる堆積物が確認されている。

B　分析方法

土壌や根など目的物以外の土壌や根などを超音波洗浄やピンセットなどで物理除去する。その後、酸・アルカリ・酸処理（塩酸HCI、水酸化ナトリウムNaOH、塩酸HCI）により、不純物の除去を行う。試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインに二酸化炭素を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した二酸化炭素と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC　Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。

測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M tuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（OneSigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730 ± 40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値

表13　放射性炭素年代測定結果

試料番号	出土遺構	種類（樹種）	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
1	ＳＫ48－Ｆ２	炭化材（サカキ）	630 ± 30	-25.19 ± 0.52	630 ± 30	IAAA-81898
2	ＳＴ50	炭化材（ブナ属）	850 ± 30	-25.47 ± 0.47	860 ± 30	IAAA-81899
3	ＳＫ58－Ｆ２	炭化材（ブナ属）	1,140 ± 30	-28.25 ± 0.69	1,200 ± 30	IAAA-81900
4	ＳＫ148	炭化材（ブナ属）	700 ± 30	-26.50 ± 0.77	720 ± 30	IAAA-81901
5	ＳＫ152－Ｆ２	炭化材（広葉樹）	1,150 ± 30	-25.48 ± 0.69	1,160 ± 30	IAAA-81902

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いて、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合に、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、今回の報告では1年単位で表された値を記す。

C　結　　果

同位体効果による補正を行った測定結果を表14に示す。測定された中で最も古い年代は、No. 5の1,150±30BPであり、No. 3もそれとほぼ同様の1,140±30BPを示す。最も新しい年代はNo. 1の630 ± 30BPであり、次いでNo. 4の700 ± 30BP、No. 2の850±30BPとなる。

各試料の較正暦年代を表2に示す。測定誤差をσの年代でみると、No. 5は8世紀末～10世紀後半、No. 3は9世紀後半から10世紀後半となる。また、No. 1とNo. 4は13世紀後半～14世後半、No. 2は12世紀後半～13世紀前半の年代となる。

3　テフラの検出同定・屈折率測定

A　試　　料

テフラ分析用試料と屈折率測定用試料を表15に示す。土坑の覆土中に認められた火山灰とされる堆積物から採取した2点である。テフラ分析試料と屈折率測定用試料は同一である。

B　分析方法

試料約20 gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。さらに火山ガラスについては、その屈

表14　暦年較正結果

試料番号	出土遺構	補正年代(BP)		暦年較正年代（cal）														相対比	Code No.
1	SK 48 - F 2	626 ± 29	σ	cal	AD	1,297	-	cal	AD	1,320	cal	BP	653	-	630	0.385	IAAA-81898
				cal	AD	1,350	-	cal	AD	1,373	cal	BP	600	-	577	0.390	
				cal	AD	1,376	-	cal	AD	1,391	cal	BP	574	-	559	0.225	
			2σ	cal	AD	1,289	-	cal	AD	1,333	cal	BP	661	-	617	0.402	
				cal	AD	1,336	-	cal	AD	1,398	cal	BP	614	-	552	0.598	
2	ST 50	850 ± 28	σ	cal	AD	1,166	-	cal	AD	1,219	cal	BP	784	-	731	1.000	IAAA-81899
			2σ	cal	AD	1,055	-	cal	AD	1,076	cal	BP	895	-	874	0.040	
				cal	AD	1,154	-	cal	AD	1,259	cal	BP	796	-	691	0.960	
3	SK 58 - F 2	1,143 ± 32	σ	cal	AD	872	-	cal	AD	907	cal	BP	1,078	-	1,043	0.343	IAAA-81900
				cal	AD	911	-	cal	AD	971	cal	BP	1,039	-	979	0.657	
			2σ	cal	AD	780	-	cal	AD	791	cal	BP	1,170	-	1,159	0.030	
				cal	AD	806	-	cal	AD	980	cal	BP	1,144	-	970	0.970	
4	SK 148	696 ± 29	σ	cal	AD	1,273	-	cal	AD	1,297	cal	BP	677	-	653	0.922	IAAA-81901
				cal	AD	1,373	-	cal	AD	1,377	cal	BP	577	-	573	0.078	
			2σ	cal	AD	1,264	-	cal	AD	1,309	cal	BP	686	-	641	0.780	
				cal	AD	1,361	-	cal	AD	1,386	cal	BP	589	-	564	0.220	
5	SK 152 - F 2	1,154 ± 30	σ	cal	AD	784	-	cal	AD	787	cal	BP	1,166	-	1,163	0.021	IAAA-81902
				cal	AD	822	-	cal	AD	842	cal	BP	1,128	-	1,108	0.143	
				cal	AD	861	-	cal	AD	900	cal	BP	1,089	-	1,050	0.405	
				cal	AD	918	-	cal	AD	963	cal	BP	1,032	-	987	0.430	
			2σ	cal	AD	779	-	cal	AD	793	cal	BP	1,171	-	1,157	0.056	
				cal	AD	801	-	cal	AD	971	cal	BP	1,149	-	979	0.944	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5）相対比はσ、2σの各々を1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

折率を測定することで、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

C　結　　果

結果を表15に示す。No. 1には多量、No. 2には中量の細砂～極細砂径の火山ガラスが検出された。火山ガラスの大半は無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在し、微量の無色透明のバブル型も認められる。さらに極めて微量の黒曜石片も認められた。スコリア・軽石はいずれの試料からも認められなかった。また、火山ガラスの屈折率測定結果を示す（第57図）。No. 1はn1.502～1.509のレンジを示し、n1.506～1.507にモードがある。No. 2はn1.501～1.509のレンジを示し、モードはNo. 1と同様である。

以上に述べた砕屑物の特徴と覆土中に薄層をなすという産状から、No. 1およびNo. 2が採取された土坑覆土中の堆積物は、いずれも火山ガラスからなるテフラの降下堆積物と判断される。下大曽根遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981;1984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（2003）など）との比較から、テフラは、十和田aテフラ（To-a）であると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981）。また、その噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町田・新井（2003）に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、n1.496～1.508の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている（町田ほか,1981）。今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当すると考えられる。

D　考　　察

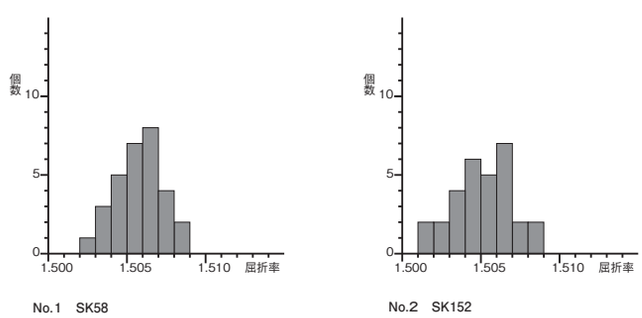
今回の分析により、ＳＫ58とＳＫ152の各土坑では、暦年で9世紀から10世紀までの年代を示す炭化材が出土し、その覆土中部付近にはTo-aの降下堆積物が挟まれていることが確認された。これらのことから、ＳＫ58とＳＫ152の各土坑の構築年代は、To-aの噴出したＡＤ915年よりも古く、おそらく9世紀頃である可能性が高いと考えられる。

一方、To-aの降下堆積物が認められていないＳＫ48とＳＫ148については、出土した炭化材の年代から、ＳＫ58やＳＫ152よりも400～500年ほど新しい中世の遺構である可能性がある。また、同様にTo-aの認められていない竪穴状遺構のＳＴ50は、ＳＫ48や148よりも若干古い12～13世紀頃の遺構である可能性がある。

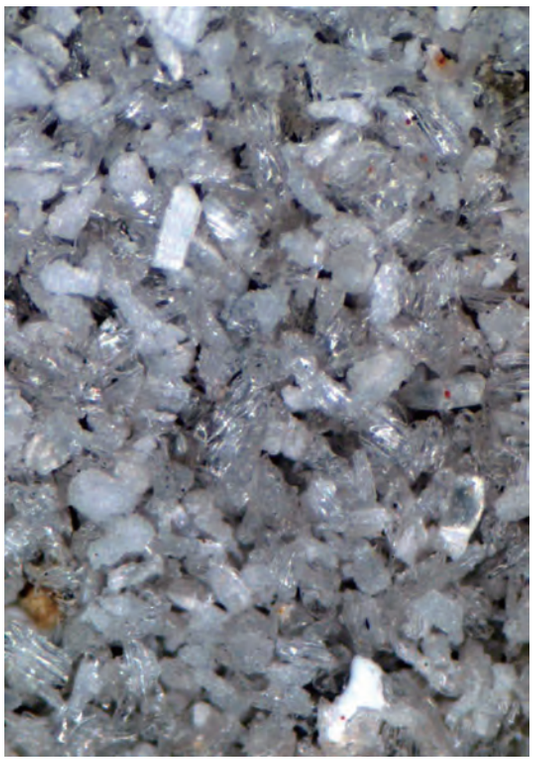
表15　テフラの検出同定結果

試料番号	出土遺構	スコリア	火山ガラス		軽 石
		量	量	色調・形態	量
No. 1	ＳＫ58	－	＋＋＋＋	cl･pm>>cl･bw>>ob	－
No. 2	ＳＫ152	－	＋＋＋	cl･pm>>cl･bw>>ob	－

凡例　－：含まれない．（+）：きわめて微量．＋：微量．＋＋：少量．＋＋＋：中量．＋＋＋＋：多量．
cl: 無色透明．br: 褐色．bw: バブル型．md: 中間型．pm: 軽石型 ob: 黒曜石片．



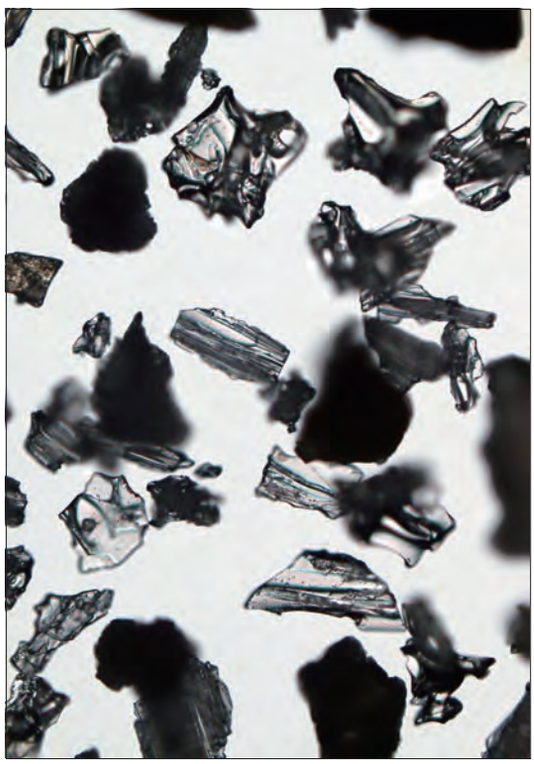
第57図　火山ガラスの屈折率測定結果



1.砂分の状況（No.1;SK58）

2.砂分の状況（No.2;SK152）

3.火山ガラス（No.1;SK58）



4.火山ガラス（No.2;SK152）

0.5mm　0.2mm

（1,2）　（3,4）

第 58 図　テフラ分析図

4　胎土蛍光Ｘ線分析

Ａ　試　　料

胎土分析試料は、平安時代とされる赤焼土器と須恵器の計 15 点である（表 16）。器種の内訳は、赤焼土器が坏５点、鉢２点、甕１点であり、須恵器は全点とも甕である。

Ｂ　分 析 方 法

これまでに山形県内の遺跡や須恵器窯跡から出土した古墳時代から平安時代にあたる須恵器試料について、薄片作製観察および蛍光Ｘ線分析による胎土分析が行われている。薄片観察では、胎土に含まれる砂粒の鉱物や岩石の種類構成を、蛍光Ｘ線分析では胎土の化学組成が明らかにされている。両分析のうち、特に蛍光Ｘ線分析では、特定の元素を選択してグラフ上で比較することにより、有意な結果が得られている。今回の胎土分析でも蛍光Ｘ線分析を用いる。測定の対象とする元素は、SiO2、Al2O3、TiO2、Fe2O3、MnO、MgO、CaO、Na2O、K2O、P2O5 の主要 10 元素および Rb、Sr、Y、Zr、Ba の微量５元素である。以下に各分析条件を記す。

１）装置

理学電機工業社製 RIX1000

（FP 法のグループ定量プログラム）

２）試料調製

試料を振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）で微粉砕し、105℃で４時間乾燥する。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成する。

なお、胎土表面に塗彩や釉薬が確認される試料については、これらを除去し、試料として供する。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率

融剤（ホウ酸リチウム）5.000g: 試料 0.500g

剥離剤；LiI（溶融中１回投入）

溶融温度；1200℃　約７分

３）測定条件

Ｘ線管；Cr（50Kv － 50mA）

スペクトル；全元素Ｋ α

分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge 検出器；F-PC,SC

計数時間；PeaK40sec,Back20sec

Ｃ　結　　果

結果を表 17 に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した（第 59 図）。

ａ）化学組成中で最も主要な元素（SiO2,Al2O3）

ｂ）粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石、斜長石）の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素である CaO、Na2O、K2O の３者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合（Na2O ＋ K2O）／（CaO ＋ Na2O ＋

表 16　蛍光Ｘ線分析試料一覧

試料番号	出土地点	層　位	種　別	器　種	部　位	備　考
No. 1	ＳＫ 57		赤焼土器	甕	底部	RP ４、報告遺物№ 55 と同一個体
No. 2	ＳＫ 152		赤焼土器	坏	口縁部	RP34、報告遺物№ 126
No. 3	ＳＴ 51	Ｆ２	赤焼土器	甕	体部	報告遺物№ 32 と同一個体か？
No. 4	ＳＫ 58	Ｆ１	赤焼土器	鉢	体部	報告遺物№ 76 と類似
No. 5	ＳＫ 58	Ｆ２	赤焼土器	無台坏	底部	回転糸切痕無調整
No. 6	ＳＫ 152	Ｆ２（テフラ下）	赤焼土器	坏	口縁部	
No. 7	Ｎ－21		赤焼土器	坏	口縁部	
No. 8	Ｎ－23		赤焼土器	無台坏	底部	回転糸切痕無調整
No. 9	ＳＤ７	Ｆ１	須恵器	甕（体部）	体部	
No.10	ＳＫ 134	Ｆ２	須恵器	甕（体部）	体部	
No.11	Ｃ－４①		須恵器	甕（体部）	頸部～体部	
No.12	Ｃ－４②		須恵器	甕（体部）	体部	報告遺物№ 96 と胎土類似
No.13	Ｊ－14		須恵器	甕（体部）	体部	報告遺物№ 90 と胎土類似
No.14	Ｎ－24		須恵器	甕（体部）	体部	
No.15	Ｏ－25		須恵器	壺（体部）	体部	

K2O）を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K2O/（Na2O ＋ K2O）を縦軸とする。

c）輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO2、Fe2O3、MgO を選択し、Fe2O3 を分母とした TiO2、MgO の割合を見る。

d）各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-Sr と Zr-Ba とする。また、これらの散布図では、赤焼土器と須恵器とで分けて、それぞれ異なる記号で示した。

下大曽根遺跡出土試料による５つの散布図を概観すると、どの散布図においても赤焼土器と須恵器の組成は、一部重複はするものの傾向としては有意に異なっていることが読み取れる（第 59 図）。

赤焼土器の試料間では、各散布図におけるばらつきが大きく、今回の８点の試料のなかでは、特にグルーピングをすることはできない。一方、須恵器試料では、長石類主要元素および Rb-Sr において No.12 と No.15 が、有色鉱物主要元素において No.11 が、Zr-Ba において No.13 が、それぞれ他の試料の分布範囲よりも離れた位置にプロットされている。すなわち、No. 9、10、14 の３点からなる類似した組成の胎土グループがあり、そのグループの胎土とは異なる組成を有する胎土の No.11 ～ 13、15 が存在する。ただし、No.11 ～ 13、15 の４点間での共通性はなく、互いに異なる胎土を示す。

D　考　　察

蛍光Ｘ線分析による胎土分析では、消費地と生産地の両者から得られた化学組成を今回の結果のような散布図に表して、その図上の位置から生産地の可能性を議論することが一般的である。今回は、現時点で得られている山形県内の各地域の須恵器および赤焼土器の生産地遺跡出土試料の分析例との比較から、下大曽根遺跡の試料の考察を行ってみたい。

なお、ここで比較対照とする生産地遺跡の所在地は、庄内平野、山形盆地、長井盆地および米沢盆地の各地であり、現時点では新庄盆地に所在する生産地遺跡の分析例は得られていない。具体的には、庄内平野南部の鶴岡市に所在する万治ヶ沢遺跡および荒沢遺跡、山形盆地東部の天童市に所在する二子沢古窯跡、山形盆地西部の寒河江市に所在する平野山窯跡、山形盆地南縁の丘陵地に位置するオサヤズ、小松原、三本木の各窯跡、長井市に所在する蛇崩窯跡、米沢盆地北部の南陽市に所在する平野古窯跡の各生産地遺跡である。これらのうち、オサヤズ遺跡は平安時代の瓦窯とされ、万治ヶ沢遺跡は平安時代の赤焼土器の生産地とされている。それ以外の各窯跡は、いずれも平安時代の須恵器窯とされている。また、三本木窯跡および二子沢古窯跡では赤焼土器も出土している。これら各窯跡の分析例を、今回の下大曽根遺跡の分析と同様に散布図にして示す（第 60 ～ 64 図）。なお、蛇崩窯跡、平野山窯跡と山形盆地南縁の窯跡および二子沢古窯跡では、微量元素の分析は行っていない。

表 17　蛍光Ｘ線分析結果

試料番号	主要元素												微量元素				
	SiO2 (%)	TiO2 (%)	Al2O3 (%)	Fe2O3 (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na2O (%)	K2O (%)	P2O5 (%)	Ig.loss (%)	合計 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
No. 1	64.23	1.01	21.39	2.83	0.06	1.24	1.06	0.79	1.89	1.07	4.43	100.00	62	99	25	246	362
No. 2	68.27	1.10	19.76	3.87	0.02	1.11	0.41	0.98	1.86	0.11	2.51	100.00	98	87	25	243	465
No. 3	62.79	0.98	19.36	2.93	0.02	0.40	0.74	1.31	1.75	1.37	8.35	100.00	89	93	25	225	413
No. 4	64.28	0.89	19.16	2.18	0.02	0.44	0.90	1.23	1.78	1.71	7.41	100.00	59	101	27	240	451
No. 5	68.35	1.12	19.76	3.30	0.02	0.98	0.36	0.92	1.84	0.19	3.16	100.00	87	80	27	250	438
No. 6	66.50	1.14	19.34	3.87	0.02	0.88	0.45	0.79	2.07	0.54	4.40	100.00	113	78	31	281	456
No. 7	65.47	1.17	18.45	2.43	0.01	0.50	0.28	0.83	2.01	1.28	7.57	100.00	104	84	33	264	597
No. 8	67.21	1.20	20.50	3.33	0.01	0.93	0.31	0.77	1.77	0.18	3.79	100.00	85	76	27	266	435
No. 9	68.81	1.15	20.46	3.76	0.02	1.08	0.45	0.83	1.64	0.07	1.73	100.00	85	83	26	266	390
No.10	69.91	1.19	19.70	2.97	0.02	1.06	0.37	0.74	1.84	0.09	2.11	100.00	97	86	28	283	491
No.11	67.93	0.85	18.61	5.38	0.03	0.86	0.61	1.48	2.15	0.07	2.03	100.00	116	100	22	284	478
No.12	68.58	1.05	19.29	4.44	0.02	0.92	0.93	1.18	1.64	0.07	1.88	100.00	94	148	18	285	342
No.13	68.49	0.69	21.02	3.13	0.02	1.02	0.65	1.09	2.19	0.09	1.61	100.00	111	97	34	187	526
No.14	65.83	0.99	21.95	4.15	0.02	1.14	0.58	0.98	1.84	0.11	2.41	100.00	103	91	31	290	488
No.15	68.63	1.20	21.47	3.01	0.02	1.24	0.30	0.39	1.71	0.04	1.99	100.00	108	63	28	302	340

平安時代の須恵器について、SiO2-Al2O3、長石類主要元素および有色鉱物主要元素の各散布図をみると、各窯跡試料内でのばらつきもあることから、窯跡間の組成の違いはあまり明瞭ではない。特に、米沢盆地から山形盆地に至る最上川沿いの地域に分布する平野古窯跡、蛇崩窯跡、平野山窯跡、二子沢古窯跡では、散布図上では近似した組成の胎土であるということができる。ただしその中で、平野古窯跡については、SiO2-Al２O3 散布図において Al2O3 の量比が他の窯跡よりも高い傾向のあることが看取される。また、最上川沿いの地域からややはずれる山形盆地南縁の三本木窯跡試料では、有色鉱物主要元素における TiO2 の量比が高いことにより、上述の各窯跡試料とは区別される。さらに庄内平野の荒沢遺跡出土須恵器では、長石類主要元素や有色鉱物主要元素において、上述の各窯跡試料とは区別される。微量元素の散布図を見ても、平野古窯跡試料と荒沢遺跡試料との違いは比較的明瞭である。

下大曽根遺跡出土須恵器のうち、グループを構成した No. 9、10、14 の３点の分布範囲と一致する組成は、上述した各窯跡試料の中には認められない。例えば荒沢遺跡試料とは長石類主要元素において異なり、最上川沿いの各遺跡や蛇崩窯跡とは有色鉱物主要元素において異なり、平野古窯跡とは微量元素において違いが認められる。また、No.12 と No.13 については、微量元素に特徴があるが、微量元素の散布図のある荒沢遺跡および平野古窯跡のいずれにも近似しない。

一方、下大曽根遺跡出土須恵器の中でも No.11 の組成は、山形盆地に所在する二子沢古窯跡や平野山窯跡に近似し、No.15 の組成は荒沢遺跡の組成に近似するとみることができる。これらの状況から、下大曽根遺跡出土平安時代須恵器の多くについては産地不明であるが、庄内平野や山形盆地で焼かれた須恵器も混在している可能性があると考えられる。

平安時代の赤焼土器については、庄内平野の万治ヶ沢遺跡、山形盆地東部の二子沢古窯跡、山形盆地南縁の三本木窯跡の３者間の比較になるが、SiO2-Al2O3、長石類主要元素および有色鉱物主要元素の各散布図上において、万治ヶ沢遺跡試料にばらつきはあるものの、有意と思われる３者間の組成の違いを認めることができる。三本木窯跡の傾向として、SiO2 の量比が低いこと、長石類主要元素における K2O の量比が低いことおよび有色鉱物主要元素における TiO2 の量比が高いことあげられ、二子沢古窯跡試料は SiO2 の量比が高く、TiO2 の量比が低いことが特徴となる。万治ヶ沢遺跡の試料は、SiO2 の量比は前２者の中間的な範囲だが、前２者に比べて K2O の量比が高い傾向が認められる。また、有色鉱物主要元素のばらつきが大きいことも特徴と言える。

下大曽根遺跡出土の赤焼土器の組成は、上述した３箇所の中には一致するものは認められない。万治ヶ沢遺跡とは長石類主要元素や有色鉱物主要元素および Rb-Sr において異なり、二子沢古窯跡とは有色鉱物主要元素において明瞭に異なり、三本木窯跡とは SiO2 の量比と有色鉱物主要元素において違いが認められる。

以上に述べた今回の試料についての考察は、いずれも比較資料が不十分な中から、その可能性を指摘したものであり、より確実な産地の推定には、より多くの分析事例の蓄積が必要である。とくに、新庄盆地周辺における分析例を蓄積し、さらに時代や地域、そして土器の器種など、各分類項目においてそれぞれ分析事例を充実することができれば、山形県内の遺跡より出土した土器の生産と流通を考える際に、胎土分析は重要な資料を提供できることが期待される。なお、分析手法としては、今後蛍光Ｘ線分析に加えて薄片観察も行い、地質学的背景を考慮した比較検討を行うことが望まれる。

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.
Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ－ Tephras occurring in Northeast HonshuandHokkaido － .Geographical reports of TokyoMetropolitanUniversity No.21,223

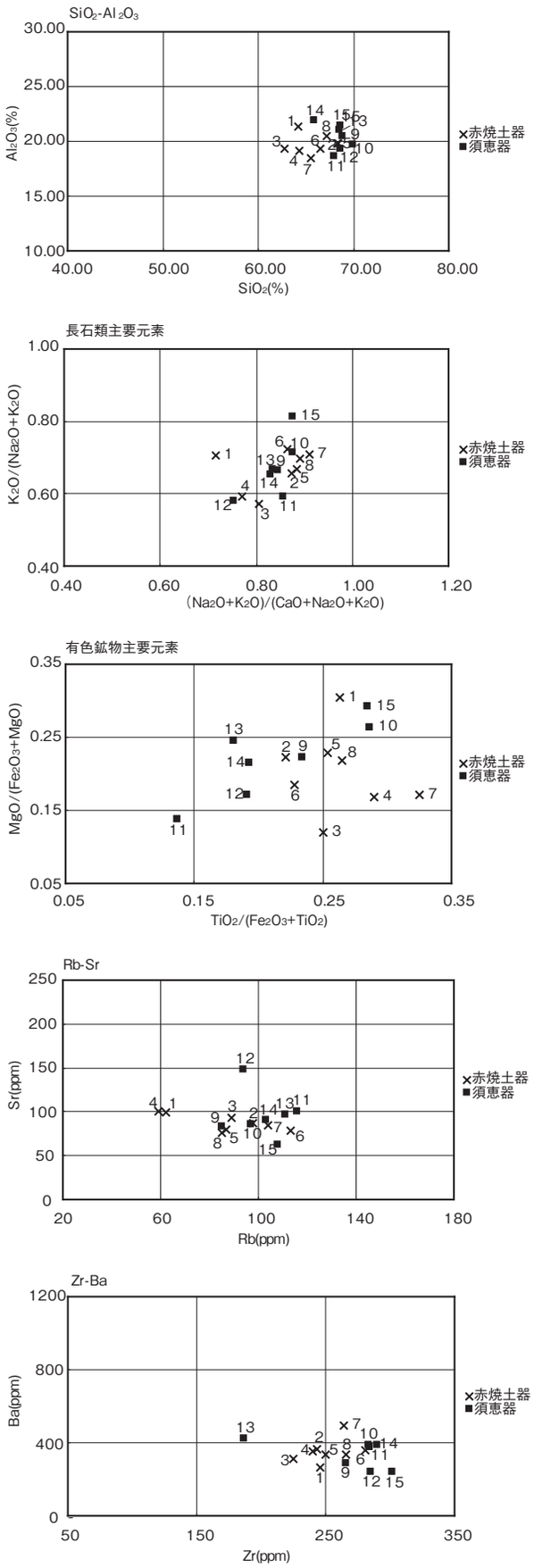
古澤明　1996　火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.

早川由紀夫・小山真人 ,1998, 日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－火山 ,43,403-407.

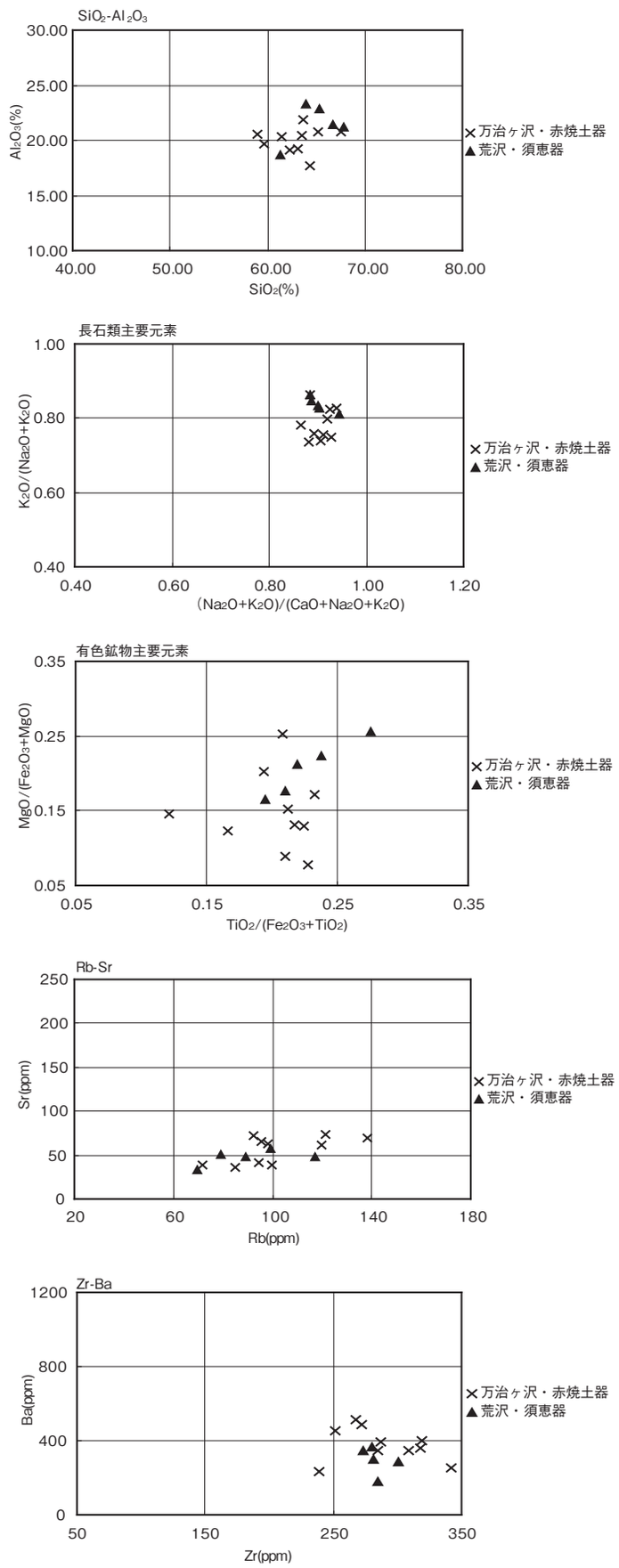
町田洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

町田洋・新井房夫・森脇広 ,1981, 日本海を渡ってきたテフラ . 科学 ,51,562-569.

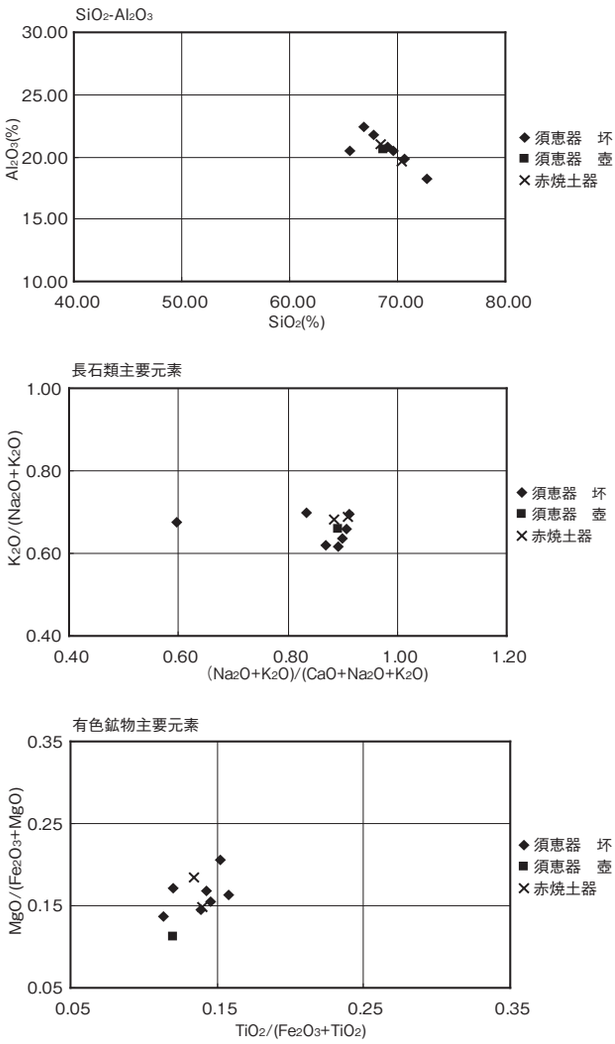
町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 ,1984, テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－ 渡辺直経（編）古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 . 同朋舎 ,865-928



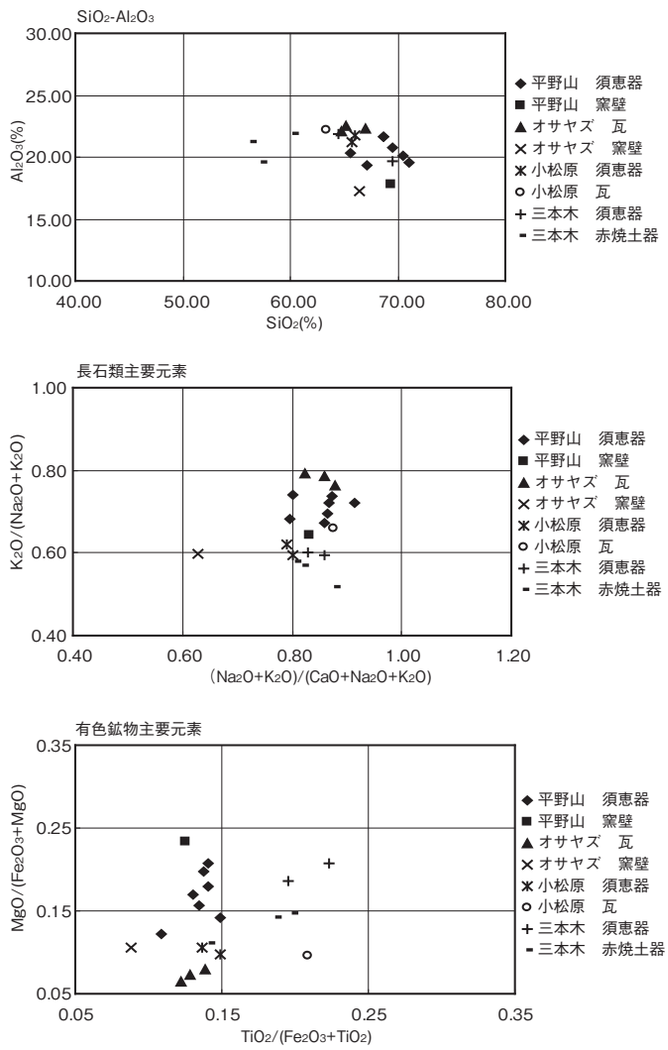
第59図　下大曽根遺跡出土試料の胎土組成散布図



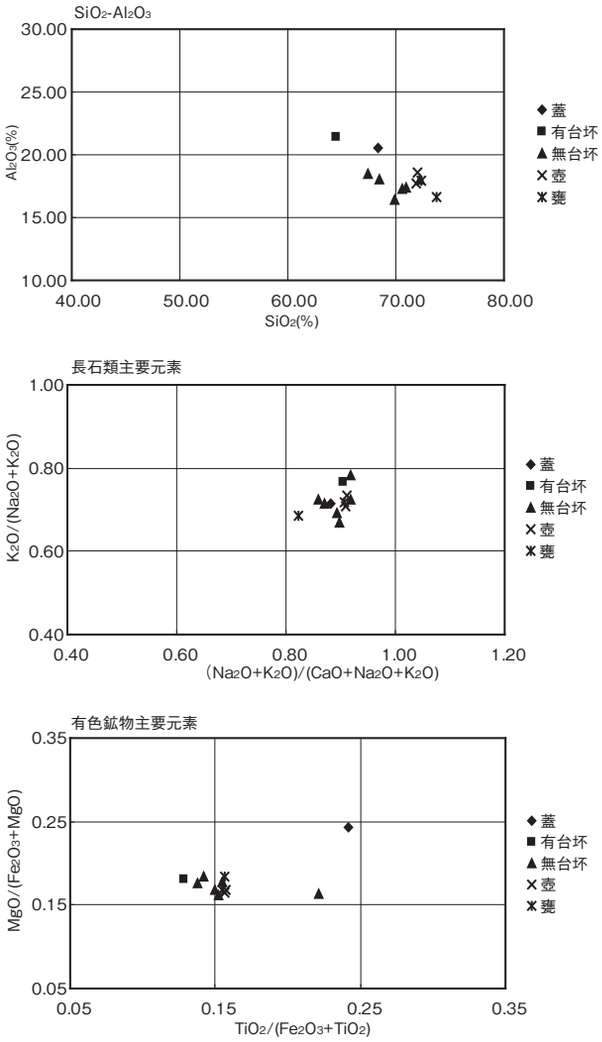
第60図　庄内地方の古代土器試料胎土組成散布図



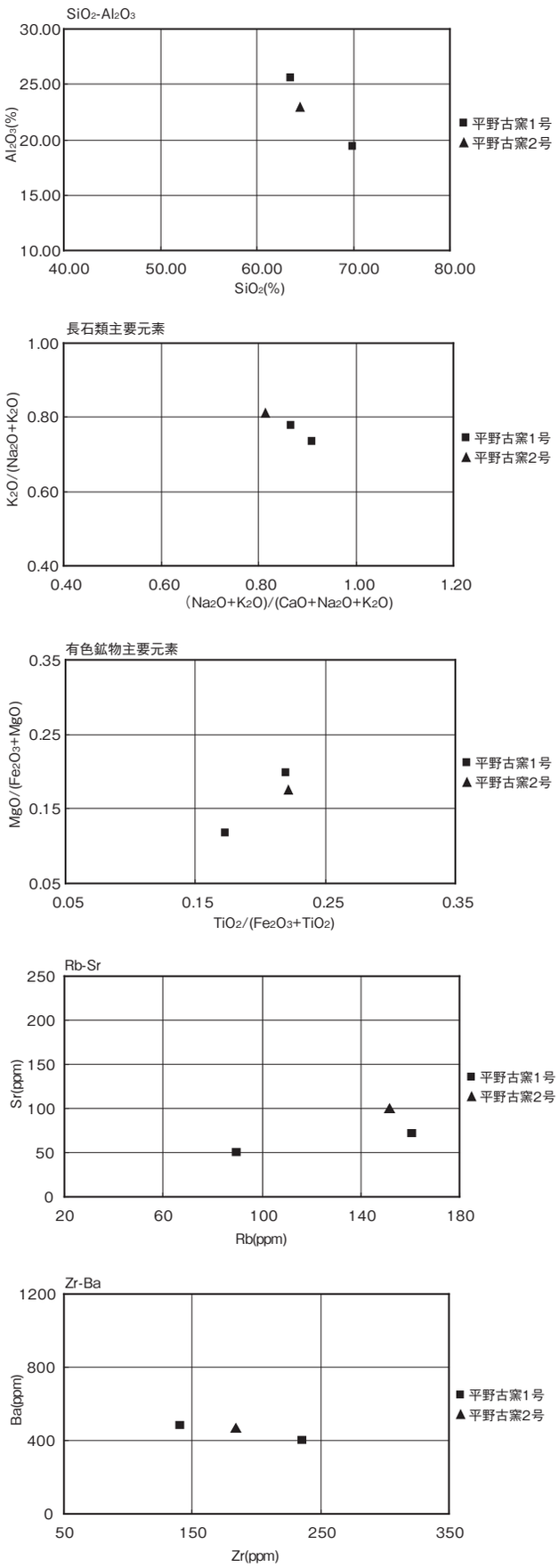
第61図　二子沢古窯跡出土試料胎土組成散布図



第62図　山形盆地の古代窯跡出土試料胎土組成散布図



第63図　蛇崩窯跡出土須恵器胎土組成散布図



第64図　平野古窯跡出土須恵器胎土組成散布図

Ⅵ　総　　括

下大曽根遺跡は最上郡鮭川村大字庭月に所在し、平成19年度に10世紀を主体とする平安時代の集落跡として登録された遺跡である。鮭川左岸の河岸段丘上に立地し、遺跡の推定範囲は東西約100ｍ・南北約200ｍの広がりを有する。今回の調査は経営体育成基盤整備事業（ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査で、遺跡に係る6,000㎡を対象として実施した。

検出された主な遺構は、平安時代～中世に属する竪穴建物跡・井戸跡・土坑・溝跡・柱穴など、計300基余を数えた。出土した遺物は整理箱８箱に相当し、量的には火山灰堆積土坑内から一括して出土した赤焼土器が主体を占めた。他に続縄文土器・石器、土師器や須恵器、14～15世紀代の産物と目される中世陶磁器などがある。

これら遺構・遺物の所在から、本遺跡は平安時代～中世にかけて断続的に営まれた集落跡であることが判明した。以下では、出土遺物に与えられる年代と、中世における遺跡の様相について検証したい。

1　出土遺物の年代

遺跡から出土した遺物は、縄文時代以降から近世までの広範な内容を包括している。遺物の大半は小破片で、全体の器形が明らかな資料は少ない。

西暦紀元のころ本州以南の地域では、金属工具を伴う水稲農耕文化が定着して弥生時代を迎えるが、冷涼な気候の北海道では稲作が成立しなかったことから、続縄文時代と呼ばれる別の金属器時代に移行すると考えられている。北海道では、その後の擦文時代が開始される７～８世紀頃までを続縄文時代として扱われ、この時代に使用された土器を続縄文土器と呼んでいる。当遺跡の出土土器（第54図141）は、口縁部文様帯の沈線文の特徴から、弥生時代後期に相当する続縄文土器と考えられ、移入品と目される。東北地方の北部では、特に下北半島や太平洋側において、北海道渡島半島と深い結びつきが窺われ、続縄文文化と密接な関連を有して発展したと思われる。第56図に掲示した５点の石器も、続縄文土器に帰属するものと推察され、弥生時代後期を主体とする年代が当てはめられよう。

平安時代の遺物では、ＳＫ58・152等の火山灰堆積遺構から出土した赤焼土器の坏類が主体となる。火山灰は覆土の下層～中層位に堆積し、遺物はその直上より出土するものが大方を占めた。２基の遺構は、前章に記した炭化材の年代測定及びテフラ同定の結果、放射性炭素測定値が示す９世紀後半に構築され、埋没途中に十和田ａテフラ（915年）が降下したものと判断される。ＳＫ58の遺物（第49図）では72･74が、ＳＫ152（第53･54図）では108・111・123・124・135～137が火山灰下の堆積層から出土している。したがって、これらは西暦800年代後半～915年までの、それ以外のものは915年テフラ降下以降の土器群と捉えられるが、大半は10世紀第１四半期の範疇に納まるものと考えられる。当該期の土器様相は、須恵器生産が衰退して食膳器の組成には認められなくなり、長頸壺や丸底甕類など一部の貯蔵形態器種のみが継続的に生産される。供膳具は赤焼土器及び黒色土器の坏や皿で組成され、坏類では底径の縮小と器高の増大とともに、高台の長脚傾向が指摘できる。当遺跡における平安時代の土器は、概ね以上の内容を備えており、矛盾はないと理解している。ただ、遺構別の土器組成において、上記の２基が赤焼土器の食膳器が主体であるのに対し、火山灰を含まないＳＫ134では須恵器の貯蔵器が組成の中心となる。これが単に時期的な相違によるものか、出土器種の偏在によるのかは定かでない。

中世に属する遺物は、大方が14～15世紀の所産と見なすことができる。外国産では龍泉窯系の青磁碗（13・19・82・161）をはじめ、ＳＤ２出土の８が白磁Ｂ群に、162は白磁Ｄ群にそれぞれ比定される碗で、いずれも14～15世紀のものである。国産でも溝跡から出土した袴腰形の香炉（７）をはじめ、井戸跡出土の尊式花瓶（39）、ＳＫ48から出土した筒形香炉（48）、包含層出土の平碗（167）は、瀬戸美濃産である。７・48は古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ、167は古瀬戸後期Ⅱにあたると認識され、39は古瀬戸後期に分類されると考えられる。いずれも井上編年10期（1370～1400年）に相当する。163の天目茶碗も

14 世紀後半の年代が当てはめられよう。一方、須恵器系・珠洲系陶器は、年代を特定できるだけの根拠を欠くため、12 ～ 15 世紀までの所産とするに止めておく。

瓦質土器は、遺構内出土５点（38・87・86・105・106）、遺構外出土１点（161）の計６点を数える。このうち 105・106 は、ＳＫ 132 土坑から出土した同一個体であり、５個体以上の存在が窺える。いずれも擂鉢の破片資料であるが、口縁部形態や口径が復元可能なものが数点見受けられる。一般的に瓦質土器は、表面に炭素を吸着させる燻しを施した瓦質焼成の土器を云い、煤けた色調が特徴である。井戸跡ＳＥ 102 出土の 38、土坑ＳＫ 105 出土の 87、遺構外出土の 161 が相当する。87 は擂鉢底部であるが、断面においても炭素の吸着が認められる。それ以外は燻しが認められない。このうち焼成具合から土師質焼成の 86・87 と焼成が堅牢な 105・106 に細別でき、瓦質土器の生産形態の多様な様相が窺える。瓦質土器の生産については、いずれも胎土が精良とはいえず、燻しを施した 38・87・16 でも、大和産に見られない焼成不良が見受けられる。また、底面の離れ砂の痕跡やヘラミガキの調整も認められないため、大和産（大和系）の瓦質製品の可能性は極めて低く、在地産の瓦質土器である可能性が高い[1)]。年代は、燻しを施す瓦質土器が 14 世紀中～後半に、土師質焼成または、燻しのない瓦質土器が 14 世紀後半～ 15 世紀前半の範疇に収まると考えられる。

２　中世の様相

今回の調査結果から、当遺跡は平安時代後期から 15 世紀までの中世を主体とする遺跡であることが判明した。遺構の分布状況は、調査区中央部と北側にやや密集した様相を呈しており、中央部ではさらに東側への広がりが予見された。遺跡の主体部が調査区外であることから、集落構成に関しては定かではないが、竪穴建物跡４棟の重複した在り方は、集落が数期間に亘って存続したことを示すものである。この建物跡群は、出土遺物や炭化材の年代測定から察して、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。

中世には鮭川流域の京塚・庭月地区において、眺望の良い丘陵の突端やその裾野を利用し、館の分布が顕著となる。当遺跡の南東約 600 ｍに位置し、第Ⅱ章でも触れた上野遺跡は、石組池や石敷の庭園を有した館跡であり、存続時期は 15 ～ 16 世紀前半と捉えられている。したがって、当遺跡はそれ以前の集落であるが、出土品には輸入磁器をはじめ香炉や天目茶碗など、日常の什器・調理器以外の嗜好品も混在する状況から、農村集落とは異なるある程度の有力者の存在を窺うことができる

室町時代における幕府と中国との貿易は、足利尊氏の天龍寺船による交易、義満以下の勘合船による貿易が行われるが、その輸入品が当地方にまで及んでいたことになろう。中世には農業生産力の上昇や手工業の発達により、行商人や日本海を利用する運送業者などの動きも活発になり、貨幣をその媒体として中央と地方、または地方と地方を結ぶ港湾商業が発達する。

最上地方では、室町時代に中国から輸入された宋銭が郡内各地から発見されている。その一つとして当遺跡が所在する高土井集落の北の田圃から、45 貫文もの中国銭が出土したと伝わる。古銭は皇宋通寶や元豊通寶など 10 種の中国銭で、宋時代のものであり、室町時代中葉以前に埋められたものと推察されている。以前この周辺は、古屋敷・蔵屋敷・サゲ屋敷などの字名で呼ばれ、付近からは中世の皿や擂鉢片といった日常品も見つかっている。最上郡内の古銭出土地として確認されているのは他に、金山町安沢、真室川町木の下、同町大沢内野沢、新庄市本合海などであり、時代が判明するものではいずれも宋銭が大部分で、元・明銭は極めて少ない。したがって、これらの古銭は、遅くとも戦国時代の頃まで意図的に埋蔵されたものと考えられる。この時代、当地方においても、貨幣経済がかなり一般化していたと言えよう。

注

1）　瓦質土器については、京都市で開催された「第 27 回中世土器研究会」の資料による。産地推定にあたっては、会場にて当遺跡出土の瓦質土器と大和産瓦質土器および各地域の大和系瓦質土器との遺物の比較検討を反映している。また、生産地・年代・遺跡の性格について各地域の研究者より多くの御教示を頂いた。

参考文献

大友義助・長沢正機 1986「第四章 中世の鮭川」『鮭川村史 通史編』鮭川村史編集委員会・鮭川村
鋤柄俊夫 1995「10 瓦質土器 - 各地の瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
北畠教爾 1996「中世農民の暮らし」『図説 山形県の歴史』河出書房新社
水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なるもの - 北日本の事例から」『帝京大山梨文化財研究所報告』第 9 集
高桑登 2003「奥羽南半における伊達氏系遺物の分布について」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号
高桑弘美 2003「山形県内出土の瓦質土器」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号
山形県埋蔵文化財センター 2006『上野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 149 集
高桑登 2007「東北の瓦質土器」『第 26 回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着 - 瓦質土器を考える（前編）』日本中世考古学会
中世土器研究会 2008『第 27 回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着 - 瓦質土器を考える（後編）』日本中世考古学会